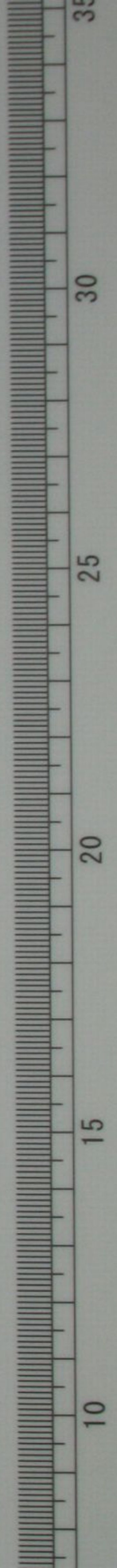


昭和十三年十二月起筆

戊寅座右錄附巳卯病床念八

特別
14
1919
498



から、之んを除けんと南派一化とかまこともおうする事な也

○吾の家は愛知のいつ七自分の勉めのおも暇の事なはるは
公をねかふ、此のあつたはる、「いづれかの竹中」と云ふ所のを其の
と、又よく喰ひこころいひか、事ハ残すうと其のいひ、「せんをまかりく
と食ひ畢つたことだ、いつかや何かの本じきりくすか竹の籠を
喰ひつた話をえはるとかあつた、あつた不さる愚の園でちう折の
かあつたことと思ふと猫も此も興とすう、近うあつたやうもあつた
古い方つた自分かてんことと、またやむことと、自分の病なはるの木か
も洋と尾はる、「さしを」
○木橋竹、蘆花亭と云ふ同西料理が、或る方面の喜んてみ
の公、自分も出づけるに、「あつたも相商の志近かあつた、初め
ハ終利給くといと云ふ割烹七うろたが、一両の前出づる



此時の、柿の籠りけを出した、始めて口へいれよれば、「さうい
味のよふよふに、外に魚数の石やきを出した、石やきの通傷を
やういひ、「珍くくく」と云ふが、「魚を」出すことが、「珍くく」いふ石
と大皿と敷きつめて、其上に魚数を敷き、皿と共に、「石を熱
まきく、煮焼の調理くも、「やい」と云ふ、「滋味があつた」
く感へん、最後の板の代り、「やい」粥を出した、粥の中
に、「魚の」鱈印を敷く、「てん」といふ、「魚」出るといふ、「やい」
が、「魚」出るといふ、「初め」と云ふ。

○自分、「直末」毎の十一の、「い」か、「散」集、「出」すけ、「出」すい、「干」登と、「取」る
ことか、「日」の、「例」と云ふ、「い」の、「随」分、「い」る、「日」、「店」か、「い」の、「教」て、「か」、「麦」酒の
下あつた、「最」も、「い」か、「い」の、「ス」ー、「ド」ー、「ブル」が、「万」の、「い」も、「味」は、「つ」て
あつた、「魚」の、「果」物、「い」か、「不」、「忘」り、「階」上の、「食」、「表」の、「此」よ、「い」か、「不」、「忘」り、「階」上

○自合年美熊公鳩岳の香を辨公の常用に居りて、
二三條公爵家係来の^二董香ありしこと未だ知らず、
家より歴史の名香の刻記ありて、^一常々宮中へ献せり、
十年の上表に云く

獻家係董香表

大政元

臣定美

誠恐誠惶謹白

臣定美

友世係董

香方雖不詳所受由未詳舊矣謹案家記

臣廿四世祖右大臣之親受香傳々後世

後堀河帝以未曆朝奉傳其方至及土御門帝

時臣十五世祖右大臣公教奉勅傳其方且上

歌河帝亦賜承傳以褒賞焉天文年中臣十

四世祖大政元大香及其子左大臣公賴同卷内



奉傳其方後太長帝當時之古史乘及關文

然福其在臣唱和之什亦可想見明良遭遇水

魚相款之概也

臣定美

賴祖先餘烈功業

天眷優渥身仕聖朝官登大臣寵采美加

焉洵無任感恩之至乃茲微家祖故市虎受獻

臣九世祖右大臣公富所知者董香并鈔寫家記

以進覽但恐其歷年之久香氣有損而今所

以獻之者臣定美有微意存焉亦唯欣仰則

欲臣定美陛下嚴聖明德惟君府則風辰惟宣

不墜祖先芳烈而已臣定美誠恐誠惶上表次

聞

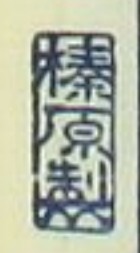
明次十年十二月十五日

當時の本が読まうとして興味が無い、いつか初版と道々の本を
獲れば、併せて五回に及ぶと云う。八大傳の勤王を修り仁
義道徳と語つてゐる所を去るを得る。殊に海戦を説
くところ、日本合戦の戦争をも強見して居るが如く、さう
く見れば、さうしてゐる。さうして、さうして、さうして、
く房物をも、海軍の文と併せて、その小説を更に、味つ
て見れば、さうして、さうして、さうして、
いかに、長男の末、お路の、某記、さうして、部分、連続と
書くべきを、意欲と強記、さうして、ことを、示す、さうして、
版本、此説を、改り、さうして、さうして、さうして、
さうして、精液、さうして、さうして、さうして、
代述、本、此説と、漢人の、か、徳、さうして、
初め



讀まうとして、淹ん、と、漢つ、山陽の、史との、比較、論、さうして、
か、漢、田、の、外、史、さうして、さうして、さうして、
さうして、漢、の、歴、史、家、と、さうして、さうして、さうして、
さうして、昨日、の、元、日、武、官、の、補、を、修、り、さうして、
さうして、故、考、の、上、身、又、大、使、と、さうして、さうして、
さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、
さうして、代、紅、木、倉、能、飯、と、さうして、さうして、
さうして、さうして、さうして、さうして、さうして、
さうして、漢、皇、の、苗、裔、と、さうして、さうして、
漢、皇、の、苗、裔、と、さうして、さうして、
秋、月、行、村、の、漢、皇

田舎商と刻一丸印を用いたし、副島経臣七の如く常々名を龍
 程と云ふれども、或人か龍程と云ふを皇室の系統の如
 く或こへて恐入つていひたつたかと思ひて初めと執あつても程臣と改
 めたとい嘗て武富の如く流れたる支那皇帝の流れた九制
 に在つては事なき相違なき。武富は大隈と申す教理の内
 づく財政に在り、龍程は推して武の財政に説く人として傾聴を
 せられた。大隈の如く時に入閣して始り進任を以て、大隈大隈と
 云ふは花おとりの馬場の人かあらん。或年出立不自由な家
 族を中へたが大隈差の地位を偏見する時を以て自分かあらん
 を以て相違したと云ふ大隈印と合する毎に自分の後敵
 である、故に其の九制の事と聴くことかあらん。



是より世の若く、其の例の如き也

一面真相一面空人河萬多懇無窮多
 言活去表休天、亦是先生石中

是又、海礼の印一丸と銘多、細井彦洋の子
 九皇年自刻の印也九皇年の刻印余多、其

其此印又云く日長如
 小年と後款あり、敢て
 珠くし、他は九
 皇年刻印と云く存ま





全五全貨を政府に賣りし名残を
 賣りしに、こゝめあり、全貨中計る自
 大隈総子の白と、貯りしもの也、此分
 日本銀行を専ら代幣に取換へた此價
 五十七七、自代の差の大有る見出し
 他の全貨を、三十四日迄と行換へざる
 此、あの銀行、貯け入る、名書意の、
 印代金とを保せしを、千円一口九角と
 十円一口と、貯け入る。
 〇久一、大トルストイ全集を、今譯せん、刻是既、八分迄
 リを譯し、其者思ふ、今、次配本の中、又、汝んが、起、在、の、情、
 を、侍、ぶ、も、あり、左、の、ぬ、め、あり、

標印



WILKINSON

この生活三ヶ年

原 久一郎

大トルストイ全集
 月報第九十號
 昭和十三年十二月
 第十九回配本附録
 中央公論社
 東京市丸の内九丁目五番
 電話・丸の内五三三番
 振替・東京三三三番

「大トルストイ全集」個人譯の事業もいよいよあと三冊で完結といふ所まで漕ぎつけた。これ偏に中央公論社長嶋中雄作氏の博大なる御理解と、親愛なる讀者諸兄姉の熱誠なる御聲援の賜に他ならぬ。これ等二つの温かい拍車掛けがなく更に讀者と殆んど呼吸を共にするやうな三昧なる編輯者諸氏のお力添へがなかつたら、此の事業も、或は一昨年夏、譯者が只一人で大河横断に泳ぎ出したやうな孤獨と不安に襲はれ、大きな波のうねりに押し流されてしまひさうになつたあの時分に、譯者と共に溺れてしまつたかも知れなかつた。譯者が自分にも不思議に思へるやうな新しい力を盛り返し、折から行はれた燈火管制下に、二十日間て日記篇一卷を一氣に譯了、以後十二分の自信と落着きを得、亂れざる息使ひて此の事業を進める事の出来たのは、全くこれ等の方々の御支援の賜である。謹んで千の感謝を捧げ、且つ向後も不變のお力添へを懇願する次第である。

編輯の方の御所望に甘え、「譯者の一日」と題して、本全集譯者としてのわたくしの一日を簡単に叙し、大方への消息に代へる。

私は毎朝、四月から十月までは四時十五分前、あとの寒い季節は五時十五分前に離床する。不思議に十五分前になると必ず眼がさめる。眼がまし時計の必要もなければ、起して貰ふ必要もない。實に正確に眼がさめる。(言ひ忘れたが、中學校、専門學校へ行つてゐる坊主共の希望で進めてあるので、うちの時計は普通より三十分早い)起きると直ぐ

【東京電話】
 は廿六日、電
 一月末に至る
 ける彼我、電
 品の調査結果
 によれば、敵
 のみ、上海
 一千、南
 萬三千、
 十二萬三

全王金貨も政府に売りつけ名残も
きつていよいよおぼろしく見えてくる

に顔を洗つて二階の書齋へ入る。

私は少年時代實に變挺子な、自分でも始末に困る癖があつて、毎朝小學校へ通ふ時、玄關を左足から踏み出し、校門をくぐる最後の一步が右足を踏まない、その日一日不快だつた。で、何とかして右足を最後の一步にしたいと思ふ。知らず識らず自分で歩度を加減するやうになる。校門近くになると、一心に前方を見詰め、目分量で距離を測定し脇の下にくつしより汗をかき乍ら、歩幅を調節して右足を最後の一步にしようと努力する。そのくせ、さういふ匙加減を足に加へてゐる事を意識するのが、また妙に腹立たしく、忌々しく、それと氣附くと、わざと荒々しく亂調子に歩き進む。その代り、最後の一步が右足になつた時の嬉しさ、幸福さといつたらなかつた。何故左足から踏み出して右足に終らねば氣がすまなかつたのか、自分でも分からぬ。——その癖が此の仕事をやつてゐるうちに、三十數年振りてまた私に甦つて來た。で、湯殿から書齋へ入るのが右足で終らないと氣がすまぬ。今一度湯殿からオイチニ、オイチニとやり直す。書齋は私の好みて、冬でも盛夏の候でも、いつも夜通しチン／＼と湯がたぎつてゐる。九時十五分前になると妻が、握飯二個とおみおつけとを運んで來る。これが譯者の朝食だ。何故握飯にしたかといふと、普通のやうに食膳に向ふと、どうしても食前後に一時間とんてしまふ。一時間位休まないと、腹の中がいままで片附かないやうで、妙に氣になる。それが握飯だと、急ぐ時に

は頼張り乍らも仕事を進める事が出来るし、それだけでなく、十五分間で十分仕事に返ることが出来るからだ。その代り、十五分前が一分早くとも、特に一分でもおそいと、實に腹が立つ。苛々する。生命の縮む思ひがする。

一時十五分前になると、また握飯、乃至パンの中食、「一時「もりそば」にしてみたが、時間が不正確でどうにもならぬ。已むを得ず、二三十分早目にとりかけさせ、定刻に書齋へ持ちこませるやうにしてみたが、これはまづいので間もなく中止。晝食の時には、可成り空腹をおぼえるにも拘らず、不思議に時間は寛大で、二三分の早い遅いは氣にならない。その代り、これは必ずしも十五分を費さず、食べ乍らドン／＼仕事を進める。五時(寒い季節は四時)になると階下へ下りる。その頃になると、犬がしきりに散歩を強請んで鳴き立てる。完全に約一時間、犬と庭で相撲をとつたり、曳いて散歩したりして費す。私のところには只今大型の秋田犬が一頭、中型の北海道犬が一頭、大型の秋田犬の仔が二頭ある。此の一番大きな奴を曳いて約三十分散歩すると、丁度大弓をやつた後のやうな快い疲労と甦りの氣持がめぐまれる。犬を曳き出すやうになつたのは、三笠書房主竹内道之助君の勧めに従ひ、猫足になるのを防ぐのが目的だつたのだが、今では一日の中の最も大きな楽しみの一つになつた。無上可愛い。その代り、小さい坊主共よりも犬を可愛がるといつて、ワイフに時々此れられ、且つ嫉妬される。幼少年時代、私の家に、私の最初の記憶と

年時代は「白」と呼ばれる大型の秋田犬がゐる、私の幼少の「白」の首に手をかけて、ちつと眼を見つめると、言葉はなくとも互の氣持のいみじくも曉知し合へる幸福が、これも三十數年後に芽を吹いて來たわけだ。

六時(寒い季節は五時)に、始めて家人一同と卓を圍んで食事を共にする。私は色々な品を食することがきらひなので、一汁一菜主義だが、その代りその一品料理を可成り澤山食べる。家人もみんな私の趣向に協和してくれる。

七時(寒い季節は六時)からまた書齋に立て籠る。併し此頃は成るべく十二時を越さないやうに心掛けてゐる。が矢張りメ切間際になると、一時二時になり、犬との一時間が仕事の方へ割愛される。

言ひ忘れたが、仕事の最中、譯語につまつたりすると、私は盛んに上刷する。その間の手頃な機會に、妻がまるで



繪のイトスルト
(ちか帖手のそ)

秘密事でもするやうに、大急ぎで書齋の掃除をする。もう馴れてゐるので、本やその他の品々の位置を一寸と置きちがへる事はないけれど、たまにちよつとも位置が變つてゐると、たまになく悲しくなる。原稿はずつと、前編輯者の進言に従ひ、鉛筆書きだ。ぐんと力を入れて書く方なので、直ぐに三ダースの鉛筆の芯が丸くなつてしまふ。一時間ぐらゐ置きに呼鈴を鳴らし、ワイフに鉛筆を削つてもらふ。此の頃は已むを得ず和製を使用してゐるが、鉛筆削りに容易に入らないのがあつたりして、ワイフに骨折らせ、且つ私を苛立たせる。

訪問客は殆んど全く謝してゐる。が、どの時間でも、十五分前位だと、きつかりの時間になるまで會ふ事もある。その代り客の歸りがそのきつかりの時間から一分でもおそくなると、あとの一時間ほどが苛々として仕事がか取らなくなる。手紙は毎週一回、金曜日にまとめて見る。學校の教師をしてゐた當時の面會日に當る日をこれに割り當てたのだ。が、此の日、何かの都合で見られなくなると、完全に一週間そのままのびてしまふ。

——以上で譯者の一日の略叙は終る。かうした生活が既に二年數ヶ月、嚴密にいへば三ヶ年續いてゐるわけだ。その間大した故障もなく、大體に於て順調に仕事を進める事の出來たのは、偏に前記各位並びに先輩知友の鞭撻の賜である。此の機會に重ねて深甚なる謝意を表す。

昭和十三年十一月二十六日 原 久一郎

【東京電話】
は廿六日車體
一月末に至る
ける彼我提議
品の調査結果
によれば敵の
のみ上海
一千、南
萬三千、
十二萬二

全五全貨も政府にきつりける名残も
きつりける名残も

せる段取りになつた。此の木舞は、更に其處へ格子に組合せ
た下葺きを釘附けて、その上を藁で直接葺にする關係上、可
成り細かく配置して、太い木釘で頑丈に留めねばならなかつ
た。が工事がこゝまで来た時に、吾等の親愛なる「大工さん」
はハタと當惑してしまつた。その木釘を打込むには、豫め螺
旋錐で木舞にも穴をあければならぬのだが、それが、それ
がトルストイには、非常な難事業となつたのである。屋根の
端に近い最初の一本を渡す時には、危なつかしい腰附で、そ
れでも兎に角足臺に乗つて、ちよいちよい棟木に掴まり乍ら
も、どうにか木舞を打込んだ。が、それから上の木舞になる
と、どうしても扱首の上を渡り乍ら作業しなければならぬ
のだが、さてそれがどうしても出来ない。恐ろしく、扱首を渡
つて、錐孔をあけに掛ると、いつの間にか螺旋錐が手から落
ちてしまふ。フラ／＼と倒れさうになり、あわて、扱首にし
がみつゝ。そして一先づ降りてしまふ。また登る。またフラ
フラになる。何度やつても埒があかなかつた。此の時、屋根
の上で悠々と仕事を手傳つてゐたブラコフイといふ百姓
が朗らかな聲で言つた。
「旦那下を見なさりはしませんか？」
「そりや見るがれ」とトルストイは答へた。
「だからいけえんだ。だから目が廻つて落つちさうにな
るんだ。やつてる仕事だけを見るんですよ。孔をあける場所

だけをちつと見て、他へ目をやられぬ事ですよ。さうすれば
何でもありやしません。」
是等の言葉をきくと同時に、トルストイの汗にぬれた顔は
光明に輝いた。よし、とばかり、今度はもう、二十歳の若
者のやうに輕快に、トルストイは扱首を渡つた。そして瞬く
間に錐孔をあけて難なく太い木釘を打込んだ。
「極意がわかつた！ 極意がわかつた！」と限らない喜びを
以てトルストイは叫んだ。「わしは此數分間に、普通の時の
一年分の修養をした。アラコフイの注意は、些細な事
のやうだけれども、其處に深い意義がある。今始めて私には
何物も恐くなくなる極意が、かうした大工さんの仕事だけで
なく、人生の他の凡ての分野にも在る事を會得出来ました。
自分のやつてゐる仕事に凡てを集注することだ、そして他を
顧みない事だ。自分の靈のみを見詰める事だ。靈の聲にのみ
耳傾けなければいけない。少しでも結果を考へたり、降り掛
るだらう迫害や恐ろしい敵意や損害などへ注意をそらすと、
此の屋根葺きと同じやうに、直ぐに目が眩んで、轉落の耻を
見なければならぬ。有難う！ 有難う！」
かういひながら、トルストイは、驚きあきれてゐる一個無
名の此の「人生の教師」の手を握りしめた。……
かくしてトルストイの偉大なる貴族地主から偉大なる農夫
への大轉換は、慘ましい跳躍と躍起とを伴ひ乍ら、其後の
生涯に於て着々行はれて行つたのである。

事變以來の戦果

敵兵の損害は二百萬を突破

【東京電】大本營陸軍部では廿六日事變發生以來本年十一月末に至る十七ヶ月間に於ける敵我損害の總計及び獲得品の調査結果を発表したが右によれば敵の遺棄死体のみ上海戦の八萬一千、南京戦の八萬三千、徐州戦の十二萬三千、北支

方面掃蕩戦九萬五千、武漢戦の十九萬五千等を始めとして總計實に八十二萬二千三百に達し敵に與へた損害總計は少くとも二百萬を越えるものと推察されてゐる、この間さき記風の鬼と化した我が

忠勇なる將士の數は四萬七千二百二十三名である、しかしてこの間における主なる獲品數は現在判明した分は左の如くであるが實際はこれより遙かに多數に上る筈である

▲小銃二十萬八千挺 ▲機銃一萬二千挺 ▲青龍刀一萬二千挺 ▲野、騎、山砲六百八十門

▲迫撃砲一千二百挺 ▲戰車トラス五百六十挺 ▲客貨車二千二百挺 ▲小銃一萬三千六百挺 ▲手榴彈二萬五千挺 ▲手榴彈一萬七千挺 ▲迫撃砲百七十一挺 ▲日露戦並びに世界大戦と今次支那事變との戦線比較がこれと同時に發表されたがこれによると十一月末におけ

る北、中支戦線は南は杭州附近より永修、岳陽、早市、信陽、正門關、拓城、開封附近を経て山西省境に及び遂に安北東北方地區に達し全長およそ二千九百七十五キロで、これを世界大戦において數個の大國が參加した西部戦線およそ七百九十キロに比較するとおよそ四倍に達し又南支方面は戦線四萬二千五百キロにして日露戦線における奉天附近戦線二百三十キロに比較しはるかに大である、なほ占據地域は察哈爾、綏遠、河北、山東、

山西、江蘇、安徽の全省及び河南の大部、浙江の一部、江西の一部、廣東の一部で面積は一・五一一・六九六平方キロに達してをり、我が全土六七五・二二六五平方キロの二倍強で占據地内外の支那全土三・二〇四・五八八平方キロの百分ノ四七に當つて居り又人口は一六九・五〇九・〇〇〇人で占據地以外の支那全土の人口二四八・三七二・〇〇〇人の百分ノ六八である

○高田半峰の遺言を十二月廿九日遺物二三紙於中
 二洋行中焼ひ得て骨を指帶しを以て握るを飾りて技を好
 ありたるを深しと云ふ所の出づり時必し骨を信託とせん歌
 外より杉木入り伊藤春歌の歌もあらず長柄志士の名
 深き馬頭大星に在りてと云ふ在りの便面は必歌を信の
 骨を以て骨を以て歌を以て骨を以て歌を以て骨を以て
 あり春歌の歌を以て骨を以て歌を以て骨を以て歌を以て
 の詩歌横巻一、出巻の骨を以て歌を以て骨を以て歌を以て
 ありと云ふ人として骨を以て歌を以て骨を以て歌を以て
 北村依也夫といふ。

○中井杜微が母を奉じて城後、久しく住し、母の歿するや、其の遺
 骨を祀りて御室に物乞とて、途次城後高田の村人、母の亡

標原製

霊し供養を捧げ杜微を一日百印を刻せし、未分の人々
 布施せしめ、其の斯くも秘
 費を補助し、其の心も
 公に此時事とて、其の
 陰の刻印も、其の心も
 しも、授けし、其の心も
 得ることを、其の心も

松葉印譜

題一日百章首

平安松葉激公夙綜衆藝刻印特妙挾技以遊四方蓋倡復古也曩侍
 其太孺人來住北越雲浦殆十年焉以故余數々相見而謹焉去年秋
 公喪太孺人今茲仲夏將及葬於平安道過高田諸舊知要之日當爲
 太孺人扶設薄奠請公一日而刻印百枚以布施此都人士吾曹之願
 也公謀余曰此舉以街名者爲之奇何余曰庸何傷昔吳道玄稱畫絕
 嘉陵山水一日而就公於刻印神手也第對于衆望而可也於是下日

施刻一日百章
 松葉杜激公篆

惟孝	友于兄弟	執中	思古	梅花知己
泉石	北山之雪	高尚	幽人貞吉	福田
社止	一水一石	碩人之寬	三益	山氣日夕佳
古澹	太玄	白雲深處	慎其獨	蕉雨
飛遁	詩酒	十里梅花	不如學	隱逸
不可說	一貫	看雲	天真	若何
長自在	無心	葛天氏民	青山白石	杏花雨

幽峯石泰書 回

石泰 幼平

門生

石之如子介

山義如伯壽

漁童 沈冥 釣月 一家風 泊如 一布衣
 思成 通隱 與天爲徒 時哉 玉壺冰
 南山壽 此一時 雲與我同無心 心如水
 玄通 名山藏 忘言 我有旨酒 采芳 陶古
 明窗下 樂山 和光 昆山片玉 山中人
 至爲 不孤 得意 付之一笑 平生一片心
 其人如玉 簡靜 不器 四海同處 十里荷香

一畝宮 古之人 雨後青山 空谷一叟 停雲
 孤雲自飛 高風 初出芙蓉 松石閒心 何有
 天地一家春 久要 守株 不知有漢 希有
 佳境 小隱 如之不動 夷白 知新
 誰以我 溫故 金剛身 壽康 放曠 養生
 一日一百印 檀波羅密

古の百印と刻の印文を得たもの
 一
 一

人本難於違衆而難於違己
 休過望于世間一切衆之我身
 休妄罪于氣化一切責之人事
 最難處實最難言
 要事了不移之於言尤妙
 厚祿故人書斷絕
 人用財試金用火試
 脫却朝衣便赤去古字及向中書
 今朝有酒今朝醉明日愁來明日愁

口五年陰夜に合すんも本年の陰夜にいつもと違つて是
中にもう一夜のん八十一年と違ふ、曰甲の友人を
手先比ち死す、市の生存を告ぐべき歎、近以と過
あは借る免んたるの感なき、誰かす、人生七十七未
稀しと云く、稀有は七十、稀んか、八十と云く、稀
初め、稀有は七十、稀んか、八十と云く、稀
舟年の陰夜は是くたる感概なき

一夜のん昭和十四年、皇化二千五百九十九
年、明治元年から美事いこと一七十二年、西暦八
九百三十七年である、我等も此方多く皇化二千五百一の故
を懐き、呼んたる書いなりし、昭和十一年、即ち昭和十五年



が皇化六百年と云く、西暦千九百四年と云く、明治元年
をいつともい七十二歳の人ちと云くと得ると云へん、其の五人
たることを否み難い感概なき。

陰夜は家例より若しと云く、陰夜部を作、故後料理
し、陰夜多く、いつと云く、陰夜給せし、陰夜
と云く、陰夜止む、今年、陰夜つけば
都のよりの十の五、陰夜つけば、陰夜つけば
笑と禁し、陰夜つけば、陰夜つけば、陰夜つけば
を送り、陰夜つけば、陰夜つけば、陰夜つけば
家例を、陰夜つけば、陰夜つけば、陰夜つけば
こと、陰夜つけば、陰夜つけば、陰夜つけば
八の、陰夜つけば、陰夜つけば、陰夜つけば

昔所^り考^へせしものを記せん凡そ左の如くである

塩川 北海 数の子 北海 鮭卵 餅 秋田 納豆 あづ

子ぎ 秋田 蓮根 秋田 萩柑 伊豆 大根 伊豆 午しき 伊豆

人参 秋田 かつすみ 秋田 善子 秋田 秋良漬 秋田 秋良漬 秋田 善子 秋田

此等の品概ね名産地を来す例へば鮭の行渡りも納豆のあづも秋良漬の大根も来すことき毎年の例より斯く好むものも有ればあるを運送して喰ひ乾海苔も有る也

一月三日餅を食す前必ず茶を吞み茶葉は八十一歳此所^りの京の物上の急須茶碗の圓沙画す所の大石良雅と僕の懸子道の圓井に四十年前高田中津とせし京都^り津^り打^り賭^りひ^り等^りよ^り北^り若^り今



あるすもれと嬉むるは時既に無し一年とあやうくと特^に八十餘^の京^の物^上の急^須茶^碗の圓^沙画^す所^りの圓^井に四^十年^前高^田中^津とせし京都^り津^り打^り賭^りひ^り等^りよ^り北^り若^り今^のか^の衆^共の^人と^同く^いふ^んと^す、歎^入歎

三^也百^の臥^床倚^せる^無聊^を独^らに^唯比^旣徳^を後^み興^を出^して^火の^煙草^の煙^をと^兵隊^の二^三分^中の^突撃^と敵^に対^して^いふ^も、烟^草か^い何^ん人^間の^種別^もも^趣味^もあ^らず^かを^極言^して^いふ^も、^と其^の名^をい^ふも[、]あ^らず^も難^しい^も、特^に谷^根の^津輕^に運^送し^て島^根の^中に^も得^るも[、]梅^の日^津輕^の名^の名^物あ^らず^もあ^らず^も、^あら^ずも[、]人^の之^を注^意し^てい^ふも[、]北^の若^と兵^士と^約考^す其^の

馬車や駿馬に乗つて慶んヨロ口ツバ中を駆け廻つた後
 の割に何の事もなく上流で暮らす時五ツの達つたのが
 江戸の上り連載々んれ、段々自分の小説や劇と逢つた
 暇もあつたが、まじし二十回もの決闘をすゝ飯後を
 もつてあつた。



○喬臍かゝる病外三四万
 に流り外出せせざん人々
 依頼せんれ相 喜も成
 とお今もいふのれが漸や
 く床を療はれのか二三
 日身急、押直毛しと
 右使と傍印し、一。

東京製

二七も何れも初出を試みたる。海州の親長を賞した後
 金田鶴由左に飽をくらた此もまた毎年例としてある。
 行く所、年中行事の「ごま」の「ごま」の「ごま」の「ごま」の「ごま」
 である。

○喬臍除夜はけり〜四五の病人を押し立てて頼ま
 んれ、何故ぞろく、頼まよきとを思ふと、来々年自分
 の八秩の歳をすてつる心、は歎き是れ年歳を
 とすは泣きのある。歳の暮るるを待た押直毛をへきや
 とも思ふれが、八秩と告いでし年の明けぬぬ、死ぬことも
 あつた、年の明けけるを待つて十数紙押直毛しれ
 八十歳と告ぐのか何とぞ〜一返近めえれやう
 五氣持も〜七十七代うの、年齒を及ぶ

○三四村、島越の江戸後本、巻頭言を云い、自分の七島
を、對して、江の川、辭典を編む、と云ふ、左の七島
島、と云ふ、いれ、武多の、隨筆、八、抵、辭典の資料、と云
ふ、江の川、後本、毎、辭書、の、編、む、の、亦、同、く、資料、と云
ふ、是を、辭書、の、編、成、を、一、部、辭典、を、作る、こと、と云ふ、と云
ふ、難、事、と云ふ、が、う、く、書、き、散、く、て、ある、を、散、供、も、する、し、度、く
讀、ま、ん、と云ふ、か、ら、自、分、の、纏、め、を、辭、書、作、り、する、こと、を、勸、め
こ、よ、め、也

○自分のハハ秩の山威を迎へて述懐の一を筆して元は、天清會を
報やうと、壽を以てする、といふ、法、を、思、ひ、出、す、自、分、か、四、十、の
厄、年、日、病、を、得、て、政、心、界、を、思、を、絶、ち、更、生、し、れ、か、壽、を、保
つ、れ、存、固、む、あ、ら、ん、思、ふ、と云ふ、壽、志、と、ど、こ、か、ひ、也、押、し、通、し、れ、

標

或、人、並、み、の、業、績、七、也、の、れ、も、切、り、ん、か、其、代、り、確、か、短、命
と云ふ、れ、と、思、ふ、自、分、ハ、今、更、に、政、治、の、心、を、免、せ、や、う、と、思
は、ん、自、分、の、亡、友、の、子、が、近、衛、の、か、く、首、相、と、な、り、う、不、汝、の、こと、と
花、相、と、な、り、つ、れ、り、と云ふ、今、の、政、治、ハ、自、分、の、子、の、時、代、か、あ、ら、自
分、の、殘、年、ハ、天、の、公、許、を、得、て、洲、人、と、し、て、送、り、れ、い、唯、れ、一、條、欲
望、の、存、す、の、ハ、蘇、尚、か、ど、う、拾、ね、ま、ん、と云ふ、を、見、て、死、な、れ、い
と云ふ、の、み、で、な、す

○此、と、同、く、來、り、し、心、華、法、と云ふ、自、分、自、然、の、法、論、を、披、き、する、と
先、後、の、心、事、を、禮、さ、ま、や、存、在、の、法、と云ふ、と云ふ、か、い、く、は、く、か、ま、い
今、誰、也、左、の、編、綴、する、也

多、に、ご、と、の、ろ、く、を、終、く、ハ、世、は、長、き、よ、は、い、を、れ、も、つ
か、い、や、ま、か、ら、ん、也、唯、れ、大、事

世の中は鏡なり。うらみ影は人にもあり。ありては毎日を
日ごとく生きよ。金柳集

層仲付天地、生死又奚疑

安逆勿忘号

少壯尚不如人、老来更复何用

謀生待足何所足、未老得闲方是闲

大闹生恶業、大静类俗情

酒中时有得、物外復何求

味无味、安求吾乐、才不才、闹置此身

第亦乐、通亦乐

才多自悔、瓢空早

微名身後、酒生前

一笑六根静

世上有枕靠

心無事即禄

柴枝蠟梦

一枕邯郸别有天

境静意自适

一日清闲一日福

聪明造形

心無枝节、案有好奇

守无求曰强

是吾所好、既而充矣

殊野樸平、却见天真

半日清閑半日仙

天自有安排

守冷素以自怡

白髮踉蹌欲意少強顏終入少年素

酒強昔持花共艷野毛今共州爭新

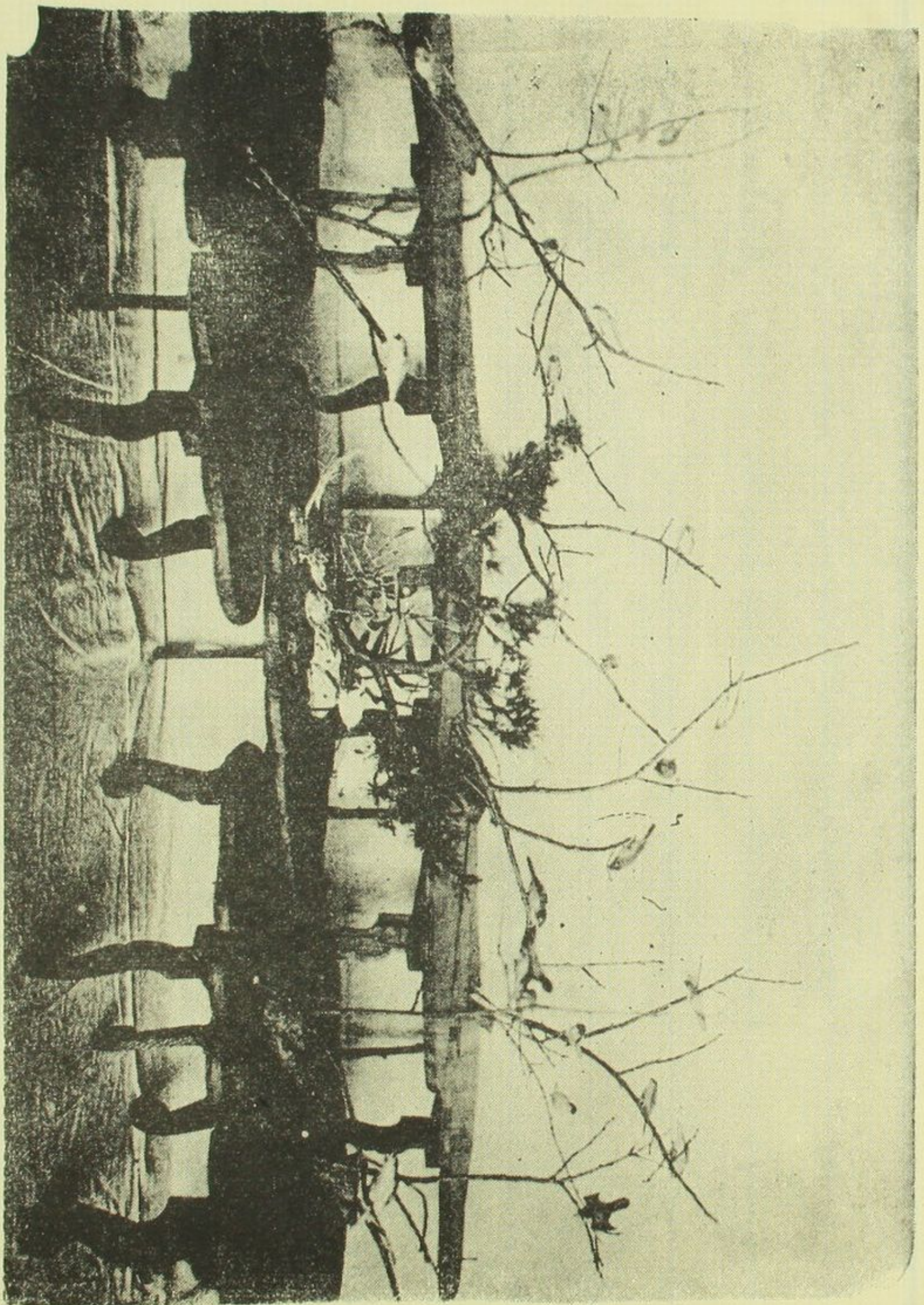
送空笑跨如餐字吾題為乞米人

天將強健報清貧

哀莫哀於心死而人死次之

○近着の雑志有志路に流彦の神市に献鳥のことか見
へらるゝこゝに物をおく

標原製



(照參事記氏井花)事神宴夜社神彦齋

しと在る新字紙の態度に於ては変化があるかと思ふ。幾
と変化を見出し得る。相変する貴族や化粧品の大産
品から更夫のズベと寒い。ハルが缺乏の爲め用紙の
節約を要する折柄。馬鹿と云ふ大産生を救済する
の。此際こそよへ核合がある。依然としてよむ。此際
井日貴族や化粧品の実生活より関係する。よへ。此際
大産生を減少することを折柄運動の現はんとしても有力
の新字紙が変更を試みるべきである。却つて大産生
をよへ歓迎する。人を改めると云業又不利を生ずるか
ら。官利の爲と云ふ。大産生と雖も七見識は何も。いと
りよへ。貴族や化粧品も。映画やポスターや娯楽
的の況と云ふ。大産生の方から注め。新字紙面

軍回りの堅張るを死んと思ふ。勿論新況の通信を
有力の社より多数の記事を戦後の第一線から送つて。従前
の例の無い冒険を冒して。この多と。故に。新字紙の
新字紙の志の競争を張る。生して。往々。新字紙を
喰ひ。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。
一面。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。
を。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。
道。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。
人。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。
と。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。
の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。
恒態を。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。新字紙の。

放り投げた受けかき... 吾輩も不利とあらんも 不相変り多の紙
 而る脂肪粉の氣を絶つこと出来ぬ... 軍國刻下の木樨
 も以て任す...

○大分理子博士(蓮)の研究... 蓮の定みの活カ... 現に今も... 蓮の定みの活カを... 蓮の定みの活カを... 蓮の定みの活カを...

アフリカの種子が日本の古墳中に

アフリカの種子が日本の古墳中に

千數百年目に發芽

考古學が「植物學を... 謎いし新の史代古... ところが同君は植物學にも興味...

の古墳から出たのであるから、古... 代にあつては日本とアフリカの間...

○銀世の表... 壽屋... あつてい... あつてい...



俳句帖から

大根は隣に青しそばの花
 やがて見よ棒くらはせむ蕎麥の花
 山越えて三島に近しそばの花
 瘦寺や十歩の庭にそばの花
 三日月の地は朧なり蕎麥の花

芭 梅 子 宗 盧
 蕉 屋 規 因 錐

獨得の味
 蕎麥を語る

近頃は萬事機械應用の迅速お手軽時代であるために、昔風のものゝ段々亡びて行く、しかし、一方に於て舊來のものを保存して何に依らず獨得の味を讀へようとする風が案外根

とか、湿度とか、さういふ微妙な關係から蕎麥の味を全く一變させてしまふ。そこで味を誇る銀座七丁目の長壽庵の如き麵舗では、始に大量に買込みその土地の倉庫に入れておいて入用の都度使用分だけ取り寄せ手碾にかけるといふ風にしてゐる。

花崗岩の石臼

これは蕎麥の胚芽の部分の主としたものであるから、色は白く手觸りはいいが（俗に更科といふ）本來の風味からは遠ざかつた感がある。ど

うしても本來の味を知るには、一番粉、二番粉、三番粉までを加味したものでなければならぬ。つまり蕎麥粒の表を包んでゐる薄皮をひき込むわけである。それを引ききるみといふ。四番粉となればこれをサナゴと稱へ蕎麥の味はないがこれを材料としたものは、安くて量が多いから昔は馬方蕎麥と稱へたものである。

殊々先づ堅いものを
 皮から、此家
 のよい好まう

強いには驚かされることがある。例へば蕎麥の如きものも、即ちそれである。

戸隠と妙高

蕎麥粉の産地については各種の統計表があり、薩摩のキリシマなどは天下に響く産地ではあるが、本當の粉としての味は、信州戸隠の高原（長野市から行く）、信越國境の妙高高原のものなどがいいとされてゐる。これは誰しも異議のないところであらう。ただ、むづかしいのは、かうした特殊のものは、一度に澤山の量を汽車で遠方まで運んで來ると、温度

なほ、一般に用ひられてゐる蕎麥粉なるものは、モーター仕掛の製粉機にかけてガラガラやつてしまふがこれでは全く味も香も消し飛んでしまふ。本格にやつてゐる所では、花崗岩の石臼を用ひてゐる。これは直徑約二尺、高さ約一尺二三寸位のもので、それを手廻しで根氣よくひいて粉にするところに、味が出て來るわけである。つまり、手打にはこの手びき粉（手碾粉）に限るのである。

引きくるみ

かうして手びきするにしても、粉に順位が出来る、一番先の一番粉、

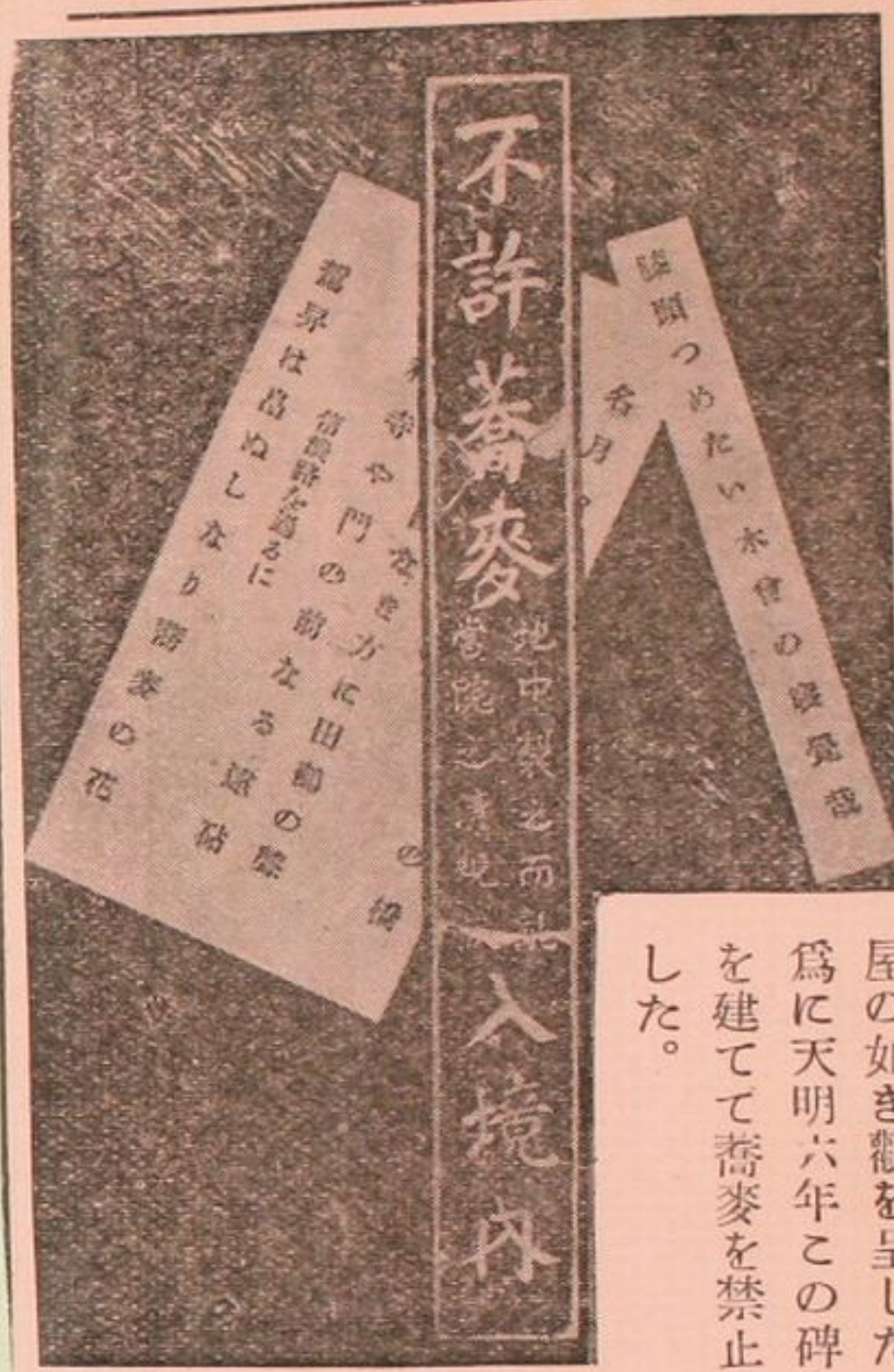
味のよき蕎麥が生ずることを修めが注ぎしと見るべきに
 と感し此の宣傳書に左にぬれ文献をあつたおや
 こゝにぬりて天吹えん代す

ソバヤ・オン・パレード

東京では麻布永坂の更科、神田連雀町の藪そば、日本橋の東橋庵、下谷池の端蓮玉庵、淺草雷門の並木そば、神田の地久庵、本郷團子坂の菊そば、本所の白瀧銀座七丁目の長壽庵、など今日なほ名實共に麵舗たるの貫祿を發揮してゐる。

が保し口喰え、
 うまよいと感し
 自家の製りて宣傳
 かく種々のことが
 出るとある中
 粉のあ排り因り

(1) 蕎麥文獻集
奇妙な標石



蕎麥境内に入るを許さず——この奇妙な標名は、現在東京府下北多摩郡鳥山の稱往院にある、稱往院はもと淺草の寺院、寺内道光庵では上手に蕎麥を打つて檀家に供したことがあるが、終には宛も蕎麥屋の如き觀を呈した爲に天明六年この碑を建てて蕎麥を禁止した。

の閑に乘りて隨筆二篇を呈す、身延寺の法と題す
 のよ政界性未、投す、昔の孫の因念、八十歳と迎へての
 所感、入海居士、死を悼む、兒玉伯、傳を讀む、大久保士
 の編纂研究と題す、大隈侯百年記念の故典の考

他の二篇、雅俗漫話と題す、也の程々の新説を讀んで
 滑り作りも、ノート。内容、池大雅の逸話、劍雪の
 夫命、藤公、橋本通之、鳥居、頼山陽、室の素
 性、伊達政宗の瑞鳳殿、建築の事、北村、泡盛、と題す
 一月廿九日

八ツ目の笑話

八ツ目(八ツ目鰻のこと)は郷土語大川の名産で、ドー(ツツともいふ、共に釜の方言)によつて捕へ就中寒八ツ目は薬用の効ありとて干して菓で巻いて下げ置き虚弱な小兒なごに毎日二切れ三切れ宛焼き與へ或はその脂肪をヒョメキに塗つてやつたりしたものだが最近ではビタミンAを豊富に含有すると言つて東京人が好み喰ふやうになつて輸出が夥いで地方では却つて得難くなつた。料理法は蒲焼若しくは豆腐等と汁にするのだが之れを題材として次のやうな笑話が出来てゐる。

以上八つ目の笑話の小説を著すは澤家のやりとら後、あつてよく出来てゐる。八つ目の物語は小兒の病の苦を云へん。自らも切りのいぬんをくらした。久しく病の概念を切ぬ。

○故村崎路姫が十二年の苦心を結ぶ信長を以て他は人名辭書の漸や、郷里の書林、由つて出版が企てられ、余も序文と校註とを書けと云ぬん。病中のついでに稿を起し、此文章思ひ、任かせず、不修のまゝ、あつて者へ送つた。左の初稿であつ、二三個、交代行正加添した。あつて、あつて送つた。文は左と同一である。

越後人名辭書の出版の者が、野上、に於ける破天荒の快筆と云ふを憚らぬ。越後の人物傳は、従来種々出版されてゐるが、人名辭書の編纂を企てしもの、當て無い。尤も、其事が甚に困難であるから、其の困難は、ある。辭書の文獻の微少、ことゝ、あつた。地方に缺乏してゐるから、或る顯著な人物に就ては、人物傳より、當て優越してゐる。ふん、浮んぬ人、ことゝ、久しく埋没して、尋ねる由、あつた。此の浮んぬ方面、ことゝ、多敷く、大切なる人物が、あつた。或る、或る、神文が、あつた。或る、詩文、世和歌、俳諧、繪畫、といふ、作品が、あつた。と、残してゐる。人、いふ、由つて、傳人物傳、取り上げ、ん、と、め、辭書、に、取、扱、ふ、べ、き、人、々、ハ、文

他邦の人をも経歴し、大正十四年より福を起し、
昭和十一年即ち海軍の没する年迄十二年間、
著作の著者。若し編者尙在せば編者の方、
余のいふところの如く、博搜の方、
想ふに餘りある。こゝに出る版と云ふは、
其の詳を云ふことも、恐らく其の内容の如く、
又、ふも、編者不幸中者で、
九、
文界の記憶、
の瑕疵、
心を一途、
を作つた切、

海軍

卯土：斯う大著の出版を見ることを中心欣喜と云ふ
若者、
者の苦心の酬へんとて、
心出版、
を表

△峨山和ある、
馳名、
魚躍

△紅葉、
園林、
日之是、

余等と云ふ、

戦費負擔一人當り百二十圓

日露戦の七回分

今ぞ示す偉大な國力

東亞の新秩序を自指す聖戰第三年目の臨時軍費と、世界的軍備競争に我海陸の生命線を守るための軍備充實に當てる陸海軍の十四年度追加算は一昨日の如く前者が四十六億圓余、後者が六億七千萬圓、合計五十二億七千萬圓と大體の決定を見た。最初臨時軍費だけで六十億を突破し、追加算も十億以上たらずと豫想された場合に比へると案外少く、臨時軍費など十三年度の四十八億五千萬圓より二億五千萬圓も少いではないかと、最近何十億位の金額には驚かなくなつた國民の中には意外に思ふ人もあるかも知れないが、

多いこととなる、又支那事變だけに就いて見ても事變以來十三年度迄が七十三億九千萬圓であるからこれに今度の四十六億圓を加へると、十四年度未迄には何と直接の軍費だけでも百十九億九千萬圓の金が使はれることになり、これを國民一人當りにすると同齡一億としても一人約百二十圓の戦費負擔となる。

更に、又この百二十億圓を嘗て我が國運を賭したあの日露日清戦争の戦費に比較すれば、日露戦争(十七億圓)が七回、日清戦争(二億五千萬圓)に至つては實に四十八回も出来るのだから、今度の事變が如何に大きなものであるかも知れない。諒解出来る國民も亦それだけに大きな決心と覺悟を以て今事變の遂行に當らねばならぬわけである。

首相大

友邦新聞記者の「日露戦争の戦費」は一日午會堂で開かれ、相は「日露戦争」を以て、

〇或十億或百億の軍費を海軍に上る人も人敢て敢るが、一措か
 知へがザンくもこの大軍費を以て國力増進一此と思へば、度々(さ)
 七半して然るが、政府の保証信すべきか否、征支漸やく終つて
 更々ソ聯と戦はん事なき、尚大なる國力あるか、之を考へんは
 尚更其憂に怯くざる可、知る政府の押し切り得るか。
 昨今の國情を以て、我々生活の不安の状を以て却りて或る
 方面へ大なる不安を感ずる。軍費の事業は、繁榮の任果
 職工の予元潤い、収入の多きを以て、政府の爲め、爲る
 甚多、私営の子弟の事業を以て、飲合店七亦、
 かり、婦女子の事業を以て、就くも多し、或る職工の
 安んじ、子を以て、九尺二寸の貧乏を以て、人、起非の憂を以て、
 と言ふ、然し仲士と氣取つこと、多し、一月の収入、數る

東京新聞

の産を破る、自家庭に紛擾を生ず、とて夫婦相和する、聖
勅の命する所、且鏡馬の爲の産を乞ふ、夫婦喧嘩と云
鏡馬から遣勅あると云ふ如き附會も亦甚し、吾等の
言概かた斯く、聴者思ふべく、演者の子息は其思想問
題の概を乞ふ、鏡馬遣、即ち後編の言説又あると云
ふと、貴族院内の一笑也。

○佛國駐紮の外交官と某書にエテ去る年全にエテヤ
完俗との爲の後編を移すべく、鏡殺の様多あり、勅
判に及んじ此去る年無罪の宣告を受けたる、何れと云ふ
エ、エリーの多数が、エデヤ系の人とあるが故と云ふ、
ハ、ジニデヤ人の勢力の隆盛、之を以つて推し得べき歟
ゆゑの事、此民族也。

○此の醜態を演ずる、以て合の内紛也、彼等、堂首を奉
けんとして各々好む所に派別を生じ、長老あるも、
代行あるも、嫉視も治る能はず、分別あるも危殆を及ぶ
既に今、彼等、此困難の當つても、廓然改む所なく、私争
を事とし、一笑を識者も信ず、政友果して之人を放
おの人も、政友の便使の減り、在傍の是んと是ふ所ある
い、何んぞ、是れ大いなる危懼せざる。

○是れ、堂の合向を策するや、正さる成るとも、堂首を
奉ぐ、去る方り終に挫折したり、官利合の合保も、社長
の争奪の事と破ることあり、皆大本を重し、
利益を向促するからむ。此弊を改めんハ、
ハ氏の能はることを思ふ、
相に伊仁史の首魁を毛ぬひ、
伊

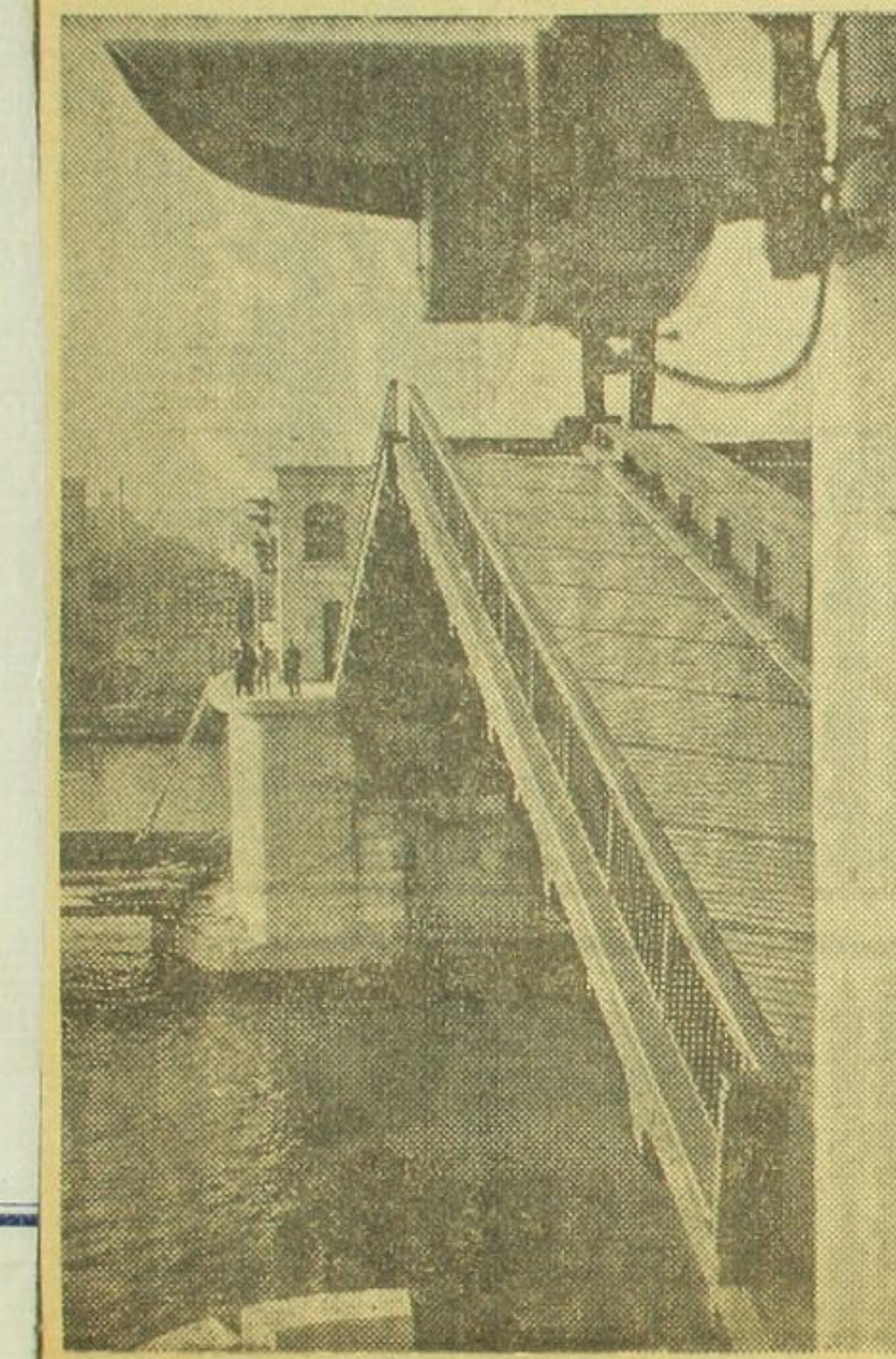
この橋は、日本の交通の発展に大いに寄与することと考へると、甲國の
 政府は、この橋の建設に大いに力を入れて、その完成を期して、
 政府は、この橋の建設に大いに力を入れて、その完成を期して、
 政府は、この橋の建設に大いに力を入れて、その完成を期して、

三月廿五日の所載

と開けば 船を呑む

港に國際的新名物

可動橋は銀座四丁目から真
 木局の浦尾達也技師、安宅勝技師
 師村三六氏、中西義榮氏等をはじ
 め工事の當初から監督して来た橋
 梁工事掛長徳善光技師、反町五
 三郎技師の苦心は日本で最初の工
 事だけに筆舌には盡し難いものが
 あつた。



二、三米、橋上には復軌軌道を敷
 設する。問題の中央可動部はシ
 カゴ式双葉開橋 (Double
 Leaf Bridge) のボタン一つ
 で両方に開閉する二葉の形の大
 鋼板よりなり、その一葉だけで
 も重量三千トン、人間に例へる
 と約四萬人分の重さに當るとい
 ふ。可動部分の開閉を司る主電
 動機は兩橋脚内に、それぞれ直
 流二二五馬力二百つつを

最高二五〇馬
 力までは出し
 得る。この電動機に必要な電力
 は築地側橋脚にある變電所から
 水底電線で供給され、しかもこ
 の電流は交流三三〇〇ボルトを
 二系統から受電してあるから萬
 一にも一系統の停電した場合も
 直ちに他の系統に自動的に切換
 へ得る装置となつてゐる。

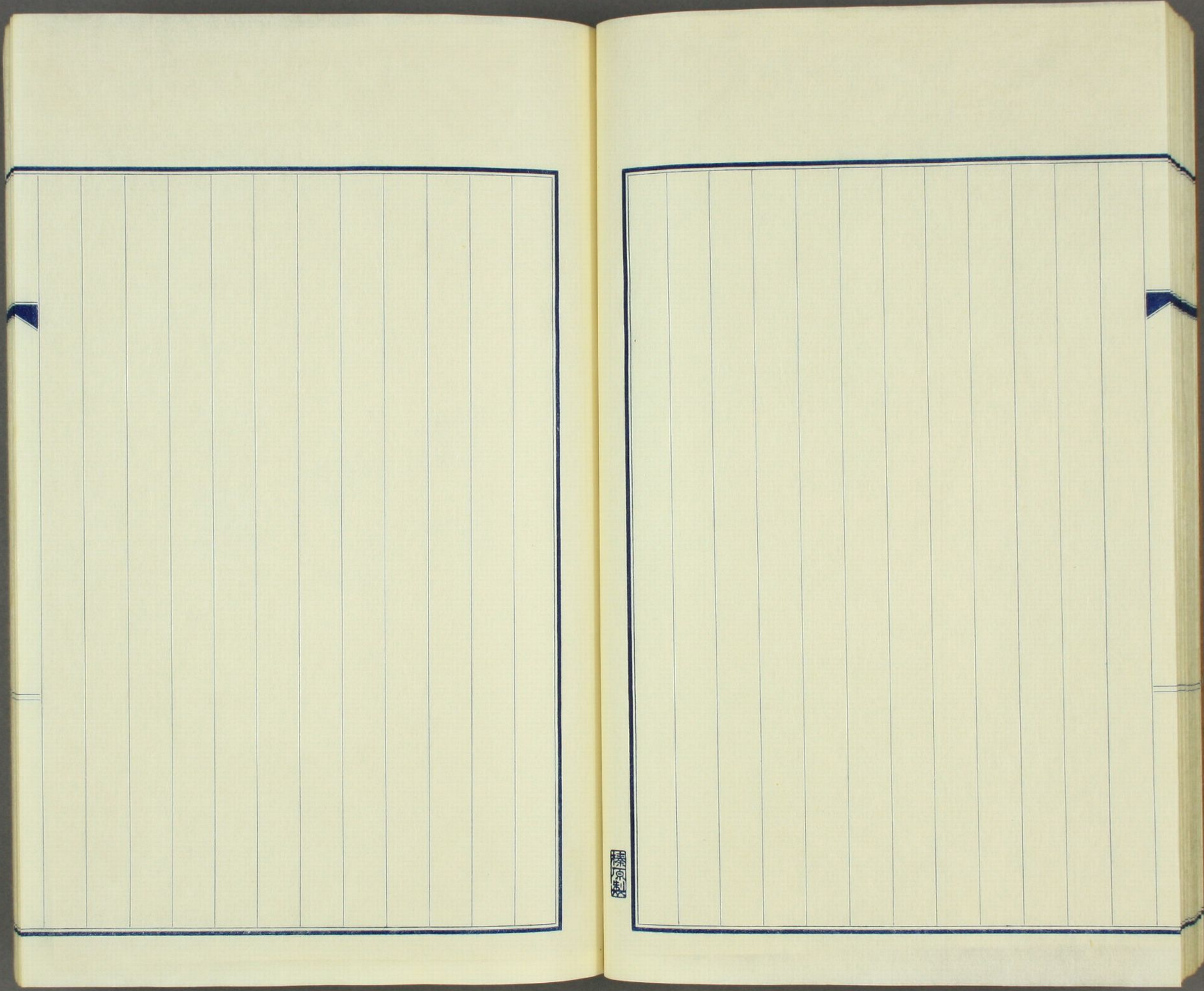
この可動橋の運轉操作であ
 るが、これは築地側橋脚の下流寄
 りの塔の中にある運轉室で、まづ
 第一のボタンを押すと、電機室内の
 電機機に通じ水底電線でも可動部に
 作用する。次に第二のボタンで水
 陸のゴ一・ストップの赤青信號を
 行ひ、第三のボタンで主桁のピン
 をはずし、第四のボタンで徐々に
 橋桁が上つて行く。この橋桁は水
 面に對し七十度まで開いてまた、水
 面に對し復するまでに最大七十秒。經
 過速度は一分廿秒を要することが
 これまでの試験の結果で確められ
 た。

開閉の場合橋上にある諸車や
 人馬や水上の船舶には如何にし
 て告知するか？これは運轉開始
 に先立ちサイレンを鳴らし、同
 時に陸上の青燈は桃色に、水上
 の赤も桃に變る。橋上の人馬車
 が全部通過を終ると橋桁が上り
 はじめ、上り切れば陸上は赤
 色に變り、水上は桃色に變る。

可動橋の偉觀 月島
 岸より見たもの一四十度位
 に開いたところで、上部の信
 號燈は船舶に對して信號する
 やうに取付けられてゐる。左
 方人物に見える建物はこの橋
 の運轉室である。

水上は青となり、この間兩橋
 脚で
 カンク
 橋を鳴らして
 夜間と雖も危
 険は絕對に起させない設備がし
 てある。橋は一日五回開き、大
 體午前二回、正午一回、午後
 一回、夕方一回の豫定で一回の
 開閉時間は廿分間、大暴風や汽
 船の事故などの場合は水上署の
 報告を待つて定時以外に開閉を
 行ふこともあり、このため従業
 員廿名は晝夜を分たす三交代で
 詰め切る等である。

現在日本にある可動橋としては
 現で名高い鴨綠江の旋橋、寧波
 の雙葉開橋、神戸の高松橋(現
 在停止大阪の大船橋、川崎の昇降
 橋位のもので鴨綠江を除けば他は
 全然比較にならぬ小規模のもので
 ある。この橋が完成の時は工業
 地帯月島の一大發展はいはずもが
 な、中央四十四米の水路(トイツ
 のキール運河と同じ)を三千噸以
 下の船舶なら自由に航行出来る密
 で大陸方面の發展と東京港の開港
 を見れば可動橋開閉の存在は國
 際的にも名物の一つとなるのも遠
 い將來ではあるまい。



蘭河

以下
6丁
白紙

序

越佐人名辭書の出版は、吾郷土に於ける破天荒の快舉である。越佐の人物傳は從來種々出版されてゐるが、古來人名辭書の編纂を企だてたものは嘗て無い。必竟其事が甚だ困難であるからである。編纂は必ずしも難くないが、材料を得ることが甚だ難い。委しく云へば、材料を徴すべき文献が甚だ乏しいからである。或る顯著の人物は從來人物傳に常に繰返されてゐるが、隠れた人物となると、殆んど尋ぬるに由ない。而かも此の隠れた方面にどんなに大切の人物が多数あるかを思はねばならぬ。或は著述があつたり、碑文があつたり、或は詩文、和歌、俳諧、繪畫等の作品を残してゐる人は、それに由つて其人が常に人物傳に採られてゐるけれども、それは人名辭書に採るべき一部の人に過ぎない。

人名辭書に於ては古今を通じて社會全般に渉る人名を網羅せねば、人名辭書として役立たない。而して人名辭書を編纂するの困難は、此の隠れた方面を探ぐるに在るのだ、尙ほ困難と云ふべきは假令ひ必要人物の名を得ても其の事蹟が不分

明であれば、それを採り入れることが出来ないのである。即ち口碑に依つて或る郷曲に傳ふべき人を得たとしても、何等行蹟が具體的に知られないやうなことは事實少なくないが、それを文献に徴することの困難は此種の編纂に當つた人の皆な知る所である。到底大昔の人物の如きは國史に就て知るの外はないが、之れを涉獵するには編者に相當史家的能力を要する。斯く考察し來ると從來人名辭書の編纂の企だてられなかつたことは決して無理は無いが、こゝに幸ひにも村島靖雄氏を得た。氏は帝大に史學を専攻した人であつて、久しく帝國圖書館に司書官を勤め群書の涉獵に充分の經驗があつて、吾が新潟の圖書館長に迎へられ、且つ新潟縣史編纂の局にも當つたから、群書の涉獵には極めて便利の地位に在つたので此の難事業を成就することを得たのである。

自分は村島君とは交が深く、會する毎に辭書編纂の行程に就き苦心談を聽くのが常であつたが、實は其稿本の或る部分を見たに過ぎない。凡例に依ると、收めた人名は三千五百の多数に上り、神代から最近に至る二千六百年に亘り、越佐出身者の外に越佐に關係ある他邦の人をも網羅し、大正十四年稿を起して編者の歿

支那の筆墨 (一)

佐藤 膽 齋

櫻痴居士と唐筆小緑欸

福地櫻痴居士が、東京日日新聞の主筆をしてゐた時、原稿は必ず「小緑欸」で書いてゐました。當時、岸田吟香さんのお店が、只今京橋の袂にある葉茶屋池田園の隣家あたりで、當時の日報社とは筋向位になつてゐましたから、唐筆や、唐墨を買ふのに、甚だ便利でもありました。その時分の「小緑欸」は、實際よく書けたものです。然かし「小緑欸」は、元來文人墨家の使用する筆ではありません。御存知

の通り、小を「小緑欸」といひ、大を「大緑欸」と申して、支那人が記帳用の筆で、主として商人が店先で使ふ筆です。勿論櫻痴居士も、この事はよく承知して居られたのですが、日本の平假名交りの原稿を書くには、どうしても「小緑欸」でなければ、意の如くは書けないのです。

無上の良筆長沙雞狼毫

今日やうに交通が発達して居れば、原稿用、即ち漢字と平假名交りのものを書くには、湖南省長沙の特産なる「雞

狼毫」を、取寄せて使ふのが一番宜しい。「雞狼毫」とは、狼毫を心にして其周圍を雞の毛で包んだもので、雞毛に墨を含蓄させ、狼毫の勁い心で、筆畫を正しく書かせるといふ製法でありますから、科學の小楷には無上の良筆であり、また假名交りにも誠に都合の好い筆であります。

この「雞狼毫」は、長沙の特産で、殊に其筆管には、娥皇、女英の涙が滴つて斑紋を成したといふ傳説のある「淚竹」を用ひますから、筆の姿が非常に高尚であります。長沙では五鳳林彭三和などの製品が尤も優良です。附言して置きますが、長沙製の「羊毫」筆は、力量に乏しく、上海製に比べてお話に成らぬ位劣悪であり、その代り「雞狼毫」に至りては、上海品や

北京品に較べて高く、一頭地を抽んでゐます。

吟香と支那文獻の輸入

お話は前に戻りますが、當時の岸田吟香さんが、上海に樂善堂藥房を開かれ、大に精鑄水其他の洋藥を賣り始められた一面、我邦の有志や、書生を世話されたり、また日支文物の接洽に努力されたことは、實に偉大なものであります。筆墨の販賣などは、支那文獻の輸入に伴ふ刷毛ついでの仕事でありました。仕入先は、主として上海の小東門内周虎臣といふ筆屋です。この周虎臣は、明治三十年頃閉店しましたが、好い筆莊でした。

高木壽欸と筆史の翻刻

「天下の事奇なく朝あり」といふ言葉がありますが、其頃日本橋の通油町に、有名な高木壽欸といふ筆屋さんがありました。この壽欸さん仲々の好事家で、梁山舟の筆史を翻刻して、我が製筆界に非常な貢獻をなし、又上海から馮耕三といふ製筆の名人を雇來りて筆を製らせ、其頃高木の馮耕三といへば、文人墨家は其の筆を使はぬを恥辱とした位です。

秋巖といへば、巖谷一六さんなども其初めは秋巖の門人であつたので、彼の東宮侍講で鳴らした文學博士川田剛さんが、同じく菱門の高足越後長岡の中澤雲城の養子に一時なつてゐたのと對照して、面白い話です。

支那名工馮耕三の製筆

馮耕三の來ぬ前から、高木の筆は非常に評判がよかつたものです。殊に眞書は最もよく人に愛用されたものですが、其處へ馮耕三が來て、大筆を作つて賣り始めました。主に羊毫ですが、第一に材料の選擇がよく、第二に筆の結び方が堅固ですから、日本在來の製筆は、殆んど馮耕三製の前に顔色なしといふ有様でした。

馮耕三が在京中、いつも筆を作りな

支那の筆墨

(一)

佐藤 膽 齋

櫻痴居士と唐筆小緑欸

福地櫻痴居士が、東京日日新聞の主筆をしてゐた時、原稿は必ず「小緑欸」で書いてゐました。當時、岸田吟香さんのお店が、只今京橋の袂にある葉茶屋池田園の隣家あたりで、當時の日報社とは筋向位になつてゐましたから、唐筆や、唐墨を買ふのに、甚だ便利でもありました。その時分の「小緑欸」は、實際よく書けたものです。然かし「小緑欸」は、元來文人墨家の使用する筆ではありません。御存知

の通り、小を「小緑欸」といひ、大を「大緑欸」と申して、支那人が記帳用の筆で、主として商人が店先で使ふ筆です。勿論櫻痴居士も、この事はよく承知して居られたのですが、日本の平假名交りの原稿を書くには、どうしても「小緑欸」でなければ、意の如くは書けないのです。

無上の良筆長沙雞狼毫

今日やうに交通が発達して居れば、原稿用、即ち漢字と平假名交りのものを書くには、湖南省長沙の特産なる「雞

狼毫」を、取寄せて使ふのが一番宜しい。「雞狼毫」とは、狼毫を心にして其周圍を雞の毛で包んだもので、雞毛に墨を含蓄させ、狼毫の勁い心で、筆畫を正しく書かせるといふ製法でありますから、科擧の小楷には無上の良筆であり、また假名交りにも誠に都合の好い筆であります。

この「雞狼毫」は、長沙の特産で、殊に其筆管には、娥皇、女英の涙が滴つて斑紋を成したといふ傳説のある「淚竹」を用ひますから、筆の姿が非常に高尚であります。長沙では五鳳林彭三和などの製品が尤も優良です。

附言して置きますが、長沙製の「羊毫」筆は、力量に乏しく、上海製に比べてお話に成らぬ位劣悪であり、その代り「雞狼毫」に至りては、上海品や

気が向かぬと、一月でも二月でも筆を作りません。無慾で、恬淡で、酒が好きで、書が上手で、其容貌からして、一種の風韻を帯びた、俗離れのした人物です。

それで愈々筆を作るとなると、二三年前の筆を結ぶのに材料を精選し、毛などは丹念に一本づゝ吟味してかゝる、それから心毛、のど、頸と結び上げて仕上をして、筆管に漆著けし、文字を精刻して、始めて自分の筆を愛用する人の許に持つて来る。

かやうに丹念ですから、本人は十分の自信と、一種の誇りとを有つて、この筆でお書きなさい、味の處は私がお願いいたしますと、大威張りで持てまゐります。

面白い事にはまたその價が一定して

みません、何でも老人當面の入用だけを、筆の價と極めてあります。されば、或時は拾元であつたり、或時は五元であつたり、三元であつたり、全くの無標準ですが、廉價だから筆が悪いの、高價だから筆が好いといふ譯ではありません。どの筆でも、精神の籠つた丹念の作だから、面白いではありませんか。

市井の筆屋には賣らぬ

この吳鼎李老人は馮との關係から李鼎和とも親類になつてゐまして、李から、是非自分の店の筆を作つてくれと頼まれますが、自分の筆は

自分の知己の爲めに作る筆で、賣品ではないと威張つて、如何に貧乏してゐても、市井の筆屋へは一本も賣品を出しません尤も一年に精々二三十本しか作りませんから、數に於ても賣品にはならぬのです。こんなわけで、吳老人の製筆を手に入れることは、なか／＼容易に出来ませんでした。

【不律】筆の異名。爾雅に「不律とは筆を謂ふ」、説文に「楚これを聿と謂ひ吳これを不律と謂ひ、燕これを弗と謂ひ、秦これを筆と謂ふ」とある。



東平堂

人物

兒玉源次郎

✓ 新海北橋

近衛宗山通信

小笠原

大石山也

星合豊成

山崎如洋

高田半峰

林義樹

谷村一大

安田善次郎

法

水御流化

若山

鎌倉時代の武士登山

陸奥の日本史蹟を拓く

文人の魂

初見と見れば

新井御川探検

長田秋清

石塚敏一

流傳子

✓ 長崎と市の定石

日本のローランドと北島

雲は碑と見え

東山

地名辞典編纂者の思い

モリスの日本史のめぐり

岩盤の伝説と地名

東島と西島の二島

甲必丹の渡来

長崎の歴史

湘南地名辞典

湖南新報

回書刊行

名家書簡集の思ひ出

書物の教

愛物女の心算

高寛の手紙に就て

下なる集と集と

非礼清湯

家塾私塾

若くは大衆教育

...

名と反動

雑俎

佛感雜俎

頤と禪無

東洋の酒

...

...

...

不滅の火

...

...

一理仰 ・ 珠人 一日好日 八方眼 三市産

長火鉢 白飯本と一葉 酒勤書 夜有残柳

一巻の晴るの夜多、虎、梅、三びん法門

赤龍子、メスノリスム 深衣栢の地

一平公、不疑、白樺とちへ、豆腐乳醬

祖上産術、生けうまふう、川柳 家の松名

一ち丹、酒飲童子 板子と懸ぶ

日本の女性を説く、探香隨筆、大分居士と道

走こと衛生と誤る 漢の銀鏡と傳

八十賢と白くん 漢の銀鏡と傳

種々の異なる雪の結晶も芯と云ふべき程がある。廿十がう金朱
粒を伴ふて、灰子と云ふと砂粒とかき廻りすと、彼んかれき多角
を生ずること、雪の結晶する正規の六角の生ずるものもあるが、
空気が中の湿ぶるや、其の地味は降るまじり生ずる湿分の表
化、氷化の速速なるや、種々の形が生ずる。是れ人達が雪
を造つて見ること、どうも、自然と云い、湿分、固い変化と異
へて試みるると自然の雪と同一のものが生ずる。若者の実験
は概このやである。

若者の研究をやつた勝の中、八章、雪の度と六章の気候を保持極
め平穩の時の雪を採つて、鏡下へ試験して見ても、同じ結晶の
雪、氷と云ふと云ふ、まんまと氣象が複雑であることが、この、西洋
の日本が、かく氣象が複雑である程、其の極め極りの結晶と云

雪の結晶

雪もまた、長い年月を要するの、日本は、僅く、一年がと
人不知のころ、空より降る、つと、その、若者の実験、法、は、
前には、品の、芯、が、要する、核、が、要すること、ふたが、是れ、塵と人間が、云々、ある、
ま、上、の、煙、や、油、中、から、是、れ、ある、塩、分、が、塵、を、形、生、ず、る、の、か、ある、
微、細、の、もの、が、空、の、ち、く、見、へ、る、も、不、潔、の、見、線、が、此、の、塵、を、解、る、の、
現象、が、空、を、舞、ひ、ま、る、塵、を、油、中、に、ある、人、の、心、を、く、空、中、の、
塵、を、吸、取、し、ある、の、心、ある、塵、の、世、の、や、り、と、よ、く、その、か、言、ふ、
その、か、言、ふ、雪、も、空、の、塵、の、一、変、体、である、こと、を、思、ひ、ね、る、
よ、か、言、ふ、結、晶、の、見、る、か、結、晶、である、と、云、塵、を、こ、し、て、
雪、を、見、た、ら、る、もの、がある。

昭和十一年 三月廿一日の記

の男音北島治合の大隈侯が十四日平野を下つた時共ニ遷るるを
祈りて回志で家も帰つてゐるが北人の法隆寺の寺侍があつたと
かか、晩年の法隆寺に法隆寺村の北島、其の自合のりゆを
行つたことがあつた、彼人の行跡に就て近所の南意山鐘堂中の
伴林光の傳をえり、北島もと平野越すと呼んが、光平の
門弟があつた、光平も七とい僧侶であつたが、後々備衣の生
活を喜ぶ、尊王の大義を唱へ、天珠の日の牛耳を取つたが
矢張り法隆寺村の勅修とト指し、この事あり、北島も又此の
へん、あつたと見え、さて天珠の運動を光平がわいて、南山
路空の、光平が敬信を脱して免人とい時、死を望む
誓つた人、光平と先んかんと、遂に捕へられ、これを志言の
といふ、光平と北島が法隆寺を企て、北島●の出版を志

法隆寺

いふ、このつらさを、時のあふれ、古河藩が、北島男の口
吹り、敬信、法隆寺を憐れ、かゝる北島を脱して北島の、界
をぬか、これと、光平の、北島、光平の、北島、
師、光平といふ、人が、北島、光平、北島、
光平、光平の、人が、北島、光平、北島、

科學日本が誇る

日本刀の大量製作



世界的權威 本多博士の偉業

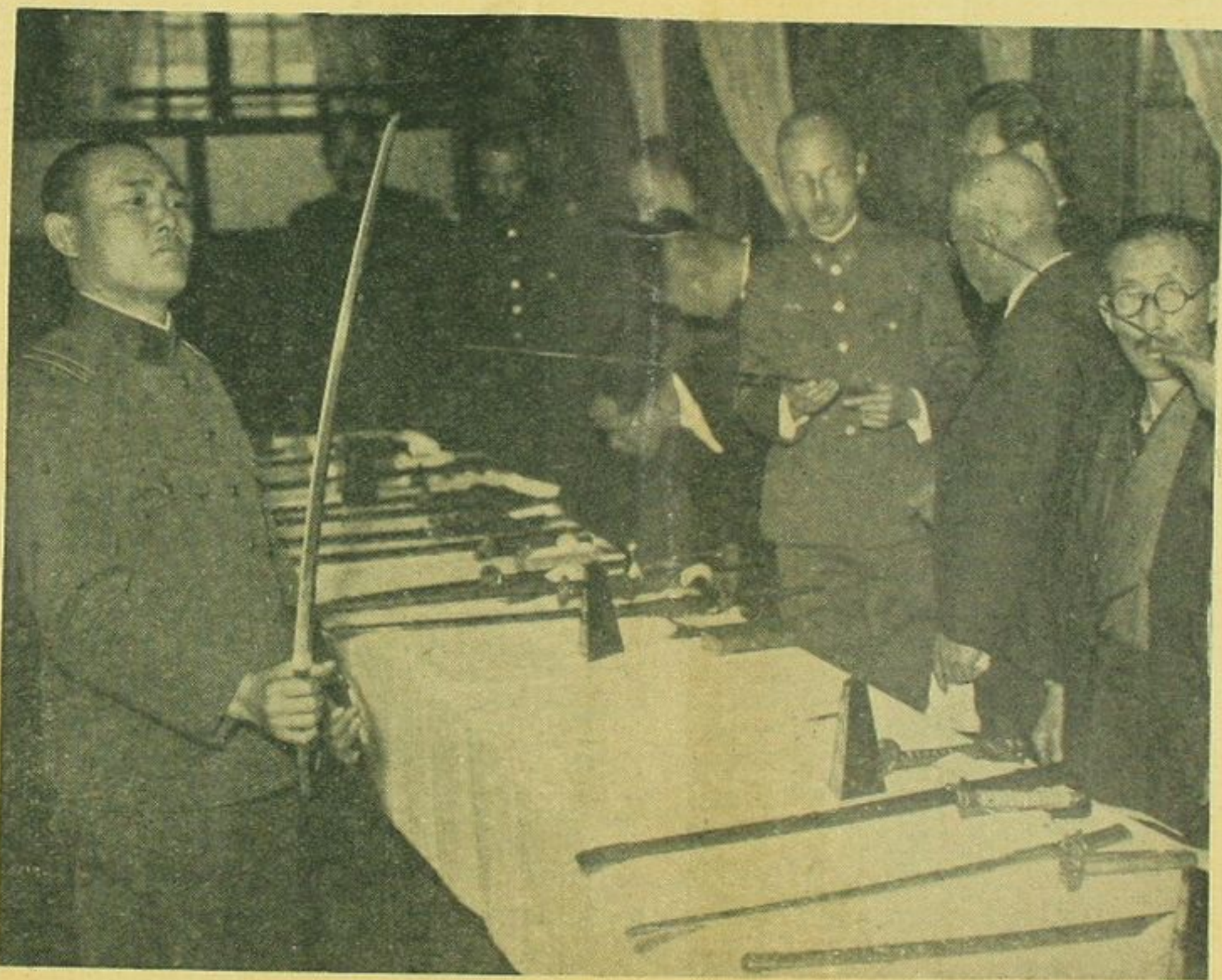
日本刀の研究は可なり以前から各所で行われて来たが、多くは冶金學的の研究が古來の製法の研究であつて、最新の冶金學を適用して製作する方法の研究は行はれてゐなかつた。ところが、支那事變が擴大して日本刀の需要が急に多くなり、製作が間に合はず、價格も騰貴するに至つたので、金屬學の世界的權威である東北帝國大學長本多光太郎博士は、岩橋教授刀匠青山秀氏の助力を得て、日本刀の科學的製法を研究し古刀新刀に優る切れ味のものを、大量に安價に製作することに成功した。

いふまでもなく、すべて双物は鋼鐵(單に鋼といつた方がよい)でできてゐるが鋼は鐵とは異つたものである。鐵は純粹なものであるが、鋼は少量の炭素を含んだもので、この炭素は炭素のまゝに入つてゐるのではなく炭素と鐵との化合物、炭化鐵となつて混じてゐる。

この炭化鐵は非常に硬いもので、炭素の量が多いほど鋼は硬いのである。

かやうに鋼は硬いものであるが、双物は更に、これに焼入れを行つたもので、これを行ふと鋼の硬さが三倍にも増すのである。焼入れとは一度高い温度に熱してから、急に水か油の中に入れて冷却するのである。焼入れをすると何故硬さが増すかといへば鋼は攝氏の七百三十度になると、急に性質に變化を來たして全く別な鋼となるのであつて、それを徐々に冷却すると、逆の變化を起して、もとの鋼にもどるが、急に冷やすと、

その暇がなくて中間の物質を生じそれが非常に硬いものだからである。さて古來の日本刀の製法は、先づ心鐵と稱する炭素の少い鐵と、皮鐵といつて炭素の多い鐵とを、よく鍛へ合せて、双の方は硬く、背に近い棟と稱する部分は比較的軟くなるやうにし、日本刀が、切れ味がよく、しかも折れたり曲つたりしないやうにする。焼入れは長い間の經驗により火の色を見て適度な温度を知るのである。この温度は攝氏の七百三十



度以上から八百度位までが適當であつて、これより五度か十度低くても十分の硬さは得られず、また餘り高過ぎても硬さが減じ、時には龜裂を生ずることがあるが、この温度を判定することは非常な熟練を要したのである。刀匠は未明に起き出で、齋戒沐浴して仕事にかゝつたのであるが未明に始めたのは暗い時の方が、良く火色の判定ができたからであり、齋戒沐浴したのは精神を統一して、仕事に魂を打ちこんだのであるが、さうすれば火色の判定も誤らないからである。それでも眼は頭の調子や天氣工合によつて判断を誤ることがあり、正宗の如き名匠と雖も、澤山製作した中で會心の作といふものは、いくらもなかつたのである。

一振の日本刀の製作は、右の鍛

なり勝て、靱性を持たせることができなないので、博士は特殊な方法で、双のみを硬くするやうにした。

焼入れはバイロメーターと稱する高温度を正確に測定のできる装置を用ひ、最適の温度に熱するのであつて、火色で判定するのと違ひ、一本と雖も誤ることがない。研磨は研磨機を用ひるのであるから、これまた頗る迅速である。

信賴することができない。博士は低温脆性が少く、且つ從來の鋼よりも遙かに優秀なるニツケル・クローム鋼の如き特殊鋼を用ひることにした。

次に刀身の製作は心鐵と皮鐵とを合せて鍛鍊する如き在來の方法によらず、丸鋼を用ひ型に入れて鍛鍊する火造法を用ひ、短時間で製作されるやうにした。

第三の焼入れは、古來の方法は

とができ、大體研ぎあげた上で最後に從來の如く人手で美術的に仕上げるのである。右の製法による日本刀を博士は金研刀と名づけてゐる。

寫眞 は先き頃陸軍省で行はれた板垣陸相以下省員一同の軍刀審査會、カッツは名刀打始式

陸相の寫眞

○秋山陽武元君三ノ谷小、漢文の長河先頃(題)を
暖まんとす、字一を得んを、香林の意に、ぬる余君主
の山陽、昔々なる古詞を元人、こゝと欲す、其言し木
時ニオラセテ、武元山陽、古々十、家、又素、小、何、も、
あり、所以也、武元と春、人の、山陽、終、史、の、春、
あり、も、ア、モ、キ、自、修、の、史、を、癡、山、陽、入、渡、り、り、七、傷、
あり、も、ア、モ、キ、
昭和十四年三月十日記

恒白。

賴君憐二足下。久絕嗣音。翹想滋甚。日者與人大槻子繩。至自西遊。訪恒山居。就審。足下起居佳。裕鄙心。則降牲歲。足下之浪遊也。塗說紛紛。僉以足下。為失心顛狂。恒獨不信。曰。我嘗知斯人。杖器非常。龍駒適奔蹏。不久自就馴良而已。及乎聞子繩之言。且觀。足下次韻古賀才子之什。自頷曰。果如我所揣也。蓋恒本與。足下同病。故嘗有私說。今日且妄言之。足下具妄聽之。夫世之出才也。猶水之沸騰於地上。沿之者。從其大小導之。決之。疏。故納新則。

沛然達乎四方。有舟楫灌溉之利。若或壅之。防之。悉以為沼沚。則淳瀆腐敗。而無用。或有奔衝漂蕩。而不可收者矣。方今之世。無舉材取士之方。武辨世祿。上下秩然。昇平之久。庸俗之論塞路。而功名之門不開焉。於是英才負俗之士。無所宜。其氣陳其力。沈淪鬱塞。憂愁幽思。遂以病其身。而無益於時。不爾。則或橫出圖不軌矣。恒少而不自量。抗志功名。辭家遠遊。汲汲希有得也。既而通曉時事。茶然沮喪。以為今之圖功名者。不為由井山形。則為失心顛狂。乃翻然改轍。息游屏跡。抱攬家園。將以終身焉。願恒之與。足下。

資之。是以其成之速，乃如此歟。恒亦嘗讀前志，病其
多浮文，繆說有志於筆削，其恒之不文，而無輔者，何
唯西備管、荼、山，勸恒學為之也。恒乃自興起，強索紙
牘，自人皇之始，至豐氏之興，編年略紀，效遠氏細鑑，
已成稿，但僻地乏書，未能更互細釋，以紀事實，有待於
他年，以為恒終身之事業也。及聞足下之舉，乃慙
然自失，顧以足下之才，因尊大人之資，其為善史
可知也。恨不得詣高居，而一寓目也。敢請所撰體裁
及年代卷數，其以見示其果，無闕編，則恒絕筆焚稿，
耳。嗚呼！丈夫生而無益於時，猶當殺而聞於後也。我

雖才不才，相懸絕，其所迷而復，蓋不具殊。尔又聞諸
子繩，足下屏居著述，甚富。若其史籍，積為卷帙，爾
時恒與子繩談話多緒，而不暇叩其兩端，不知所撰
史籍果如何。夫史之為業，難矣。大矣。雖才學識兼備
者，非積以歲年，則不能成焉。今足下齒未滿卅，雖
才之敏，何其成之速也。柳恒又聞尊大人遊學浪
華，與中井伯叔氏各言其所欲言。中井伯學氏
特取諸當代，叔氏總取諸武家。尊大人遠取諸
皇朝，伯氏逸氏，叔氏通語，果為成編，獨未聞尊大
人之所成也。然其間必有冗材，鳩工者，蓋足下或

曹已不能宣氣。陳力於當世。則發之文章。以圖名山
 之藏而已。聞足下禁錮未全解。是方史遷蠶室。致
 力之秋也。冀勉旃自愛。毋易厥身。雖襍錄如恒香。為
 足下之素臣。則庶乎有傳矣。伏願不遐棄。肯賜瓊
 音。幸甚。時雖炎威薰灼。尊丈人及令叔。君動履
 何似。敢請各致下情於左右。不備。

江戸圖彙

屋根船の双枕

刊年不詳の人情本糸柳初編の挿畫なり、屋根船、猪牙舟が駕籠と並び、江戸の交通
 機關として重要なものなりしは、よく知られたることなり、しかれども屋根舟の内

に双枕を常備
 したるを見て
 その如何なる
 ものに成行き
 たるかを知る
 べし、
 此圖にては
 町藝者を描き
 あれど、必ず
 しも町藝者に
 限らず、密會
 を屋根舟に擧
 げるは、その
 他の婦女に及
 べり、町藝者
 が歩行せし
 て、輦ぶこと
 は云ふまでも
 なし、天保以
 後の江戸の風
 俗は、幕府滅
 亡に相應した
 るものなり。



病床の産

己卯一月以降
三月中旬に至る

○日分、本年八月の果を迎へて兎角病氣待て困り、四脈の月未
からけり、そのけりて氣多支カク、咳のけりて痛床、此れ是か
疾くとも一月の二十一日相から急に脈を亡に疼痛とそりて身
体の屈伸、自由ならず、此れは痛ういかに回をむ回復す
たうと病牀よりき、志きりて注射を言ひてえり、一向に効能が
なく、其の任も同じ状態をあるの、終る二月一杯寝て居るに
利唐、医蘇、此れをりともうと、只此氣侯の候むのを待つとも
外、ういと一時、あきうめて静か、病を差ひつれが、此の病氣未
ハ初め、の経験、蒸気を脱し、多い、知ん切つた病氣未、此れは身体
の自由を失く、病、起き、まのこ、か、叶はず、此れは公事を取り
灌腸、便通を来し、仰臥して髪を剃り、やうな仕末、今、
困り、此れ生憎、人七、同じ、忘、抱、初め、此れ、病、後、七、お、来、る、い、り

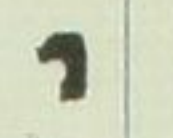
漢語

い、夫人、の、兄、長、め、の、静、を、呼、び、ら、の、せ、甘、の、飽、り、看、後、と、さ、せ、れ
血、論、喫、烟、も、飲、酒、を、忌、し、大、病、人、の、如、く、ひ、あ、り、れ、**○**二月の
十七、日、日、分、り、返、辰、い、つ、の、の、如、く、春、城、人、り、の、通、知、七、登、り、れ、が、遂、に
之、を、延、い、ち、し、と、ま、ら、う、れ、或、る、友、人、が、兄、身、が、て、く、ま、き、て、神、経、痛
を、治、す、る、針、灸、が、よ、い、と、あ、き、う、り、自、家、の、経、験、を、譲、り、の、此、の、れ、の
し、れ、自、合、う、い、ま、ん、む、経、験、の、を、無、い、針、灸、を、神、藥、の、方、か、し、根
さ、り、の、を、四、五、回、針、灸、を、施、し、と、い、う、是、ん、が、あ、ま、の、入、利、志、疾
痛、が、這、う、難、く、う、り、身、体、の、屈、伸、も、故、障、を、ま、き、う、い、つ、れ、の、
針、灸、も、癒、し、れ、が、久、張、腰、を、し、り、う、マ、チ、が、終、人、む、あ、る、の、ん、
今、以、つ、て、全、治、し、ま、い、が、床、を、拂、つ、て、か、ら、既、に、五、六、日、を、経、喫
烟、も、免、れ、の、復、し、れ、が、ま、ご、外、出、す、る、ま、む、に、別、々、う、い、の、一時、の、氣
業、も、叶、い、れ、或、十、年、後、の、け、り、未、れ、日、迄、を、癒、す、る、の、を、遂、成

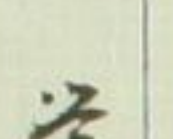

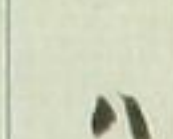

こゝ毎のつとめて存中へ是東の董七師に先角裏残の
先魁の意を其の役程障いと見え、別と精神上の阻むるも、
腸胃も健全であるのん、気候の日の変化も何んとして抗し
得る。漸々と暖氣も日一日と暑りつゝあるが、近い内外出ても未だ
ようと思ふ、幸よくして肉子も漸やく回復の向ひ屹らう、主働くや
うである。

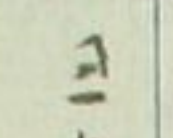
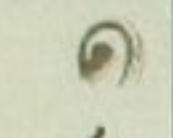

(三月九日記)

此記事以下皆病中、或の書き或の切りぬき粘りつけ
れこので題して病床の巻とす。

自分久しくワラチン注射をきけてゐるが、鍼灸をきく
けれど、尚も毎日の茶もはたかた、自分少年の頃から身体
が鍼とて、のを見て、恐怖と感得れ、先年
鍼灸とあつた、自ら鍼を用ひたことと、目撃して

漢方

鍼を厭ふれ、而して今方然るも、鍼灸をきくは、
何等感するも、まのうぬぬらういれ、大抵一回患部を七八鍼を
施した、二三回より患部の疼痛が軽減し、五回より患部の
神経痛の或人と癒へれ、ある患部が癒へると、鍼の感
覚への無いつても、注射の時に比すれば、全く微痛も
なくぬ、注射を比すれば、鍼の感する細いから、
は、但し鍼灸も、の針が、
ハ回を、の針を、
ねの灸点を施し、の針を、
効があつた。

○現在世界の雪の融定をせめる最も不なる極限として、
ミナミ、の針を、
のチヤーチ博士が、の針を、
世界の八十ヶ所の氣象を及、の針を、
研

文家が冬に書いた日本の事柄を今更とらうてみる。四十一回
回次分淑といふと冬分今更の研文を連結してゐるが、其國の初令
の最也流流の研文してゐる。

日本二百年前より下世に何れ故主井利任と云ふ人が雪華園院を
著してゐる。此中三十八個の雪華を描写してゐる。勿論科學
的研究の伴はぬ、純粋的の道にありては、其國の同いやうな道
程が多く、雪華を写すつて主派の國情を伝へてハントしと云
ぬ人があつた。(米國人) 此人の科學の志長か、其の唯此熱心は
其の比雪華を写すつて取ら、生涯の身を捧げ、六千種のもの
種を採り、其の内三千種を回譲して廿日行んたのが、その界
界と云ふ冬分今更の傳してゐることの如く論じらる。

中谷宇三郎著「雪抄録」

雪抄録

○心は痛し漸やく疼へれば、リウマチが腰をこわんび、正坐が出来
ないのが執筆に障りてゐるが、然るに無聊の憂ひから、随筆を以
てんとその御座に記すべし、即ち鹿島を取て此を、訪ふれば此の
り、討論諸君の遺著、執筆者名、其の順序も消えんぬのこゝろ
執筆して、而して中央公論社に各大家の自叙傳を掲載せんと云
ふのが、早稲田大学の回顧を自今に執筆せんとす。其の未だ、隨
筆的の四月節に回る字法二拾枚、五月節に〇三十枚との
記述がある。曾て隨筆、早稲田の同いやうのことを書いては、
断つてかうかと思つたが、とうとう誤つたことと云ふ。三四日病
をひき、創文の時、政権の壓迫の甚いかつた時、僅かに
此の考を掲げ、その夜の困難、パトロンたる大隈が政府
から無糧たる邊へんは、其の影郷を、當時毎月大隈

家の補給を仰ぐれば各校が、性より補助金を受取ら得
るべしとある。非考の任滿詔に臨むべしと、遺言の日詔の便
上げを断行して補給を断れしこと、是が傷、学校の獨立
の端をかかれしこと、改格の感道に、帝大の教授の吾を校に應
接すること禁ずる、ことき、妨言を述べて去る。○吾を校を
困しめしこと、英米利法諸の創主に我法科の移轉を策
し我を校の一角と滿るとも、吾を校の隱微を困めしこと、
こと、吾を校の吾を同人が皆生活雜り、窮しること、等と下通
り書いて、正坐又述べ、明行の四つとある。しが、之を創
業期の回顧と題し、次第の、吾を長期の回顧と
書く。其のあらう。

○隨筆を二三法する或人の汽車旅行する事、必ず二三の隨
筆と稱して、觀後する。常習にして、其の隨筆の法、必ず
以て能験かちおいた人の文を讀むと、此人の吾を隨筆と
述ると、法と云ふ、乃ち卷末か、法み出ると、述る吾を、
ふと云ふ、其の譯ハ、どうかと云ふ、吾を、初頭ハ、卷中の
上部ハ、ある文ハ、興味か、意、下部ハ、中、から面白
いと、其のあらう、こと、吾を、一考、案、の、吾を、自人が、吾を、
の任職、の、吾を、上部ハ、望、の、吾を、多い。自家ハ、見、
と、願、念、し、と、成、る、吾を、折、つ、と、作、し、と、吾を、前、
と、志、か、し、骨、を、折、つ、と、吾を、め、と、吾を、興味、の、
何ん、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
人ハ、一時の感、其、と、吾を、目、の、吾を、物、と、吾を、出、
と、吾を、出、と、吾を、出、と、吾を、出、と、吾を、出、と、吾を、出、

可まのふと一考もせうまふん、身も巻唯比鶏肋の念、紀ら
 ん事もも惜しむ、巻尾に附するもの、時より公用と係
 りや、いふもあふ、讀者の思惑めると、意を、いふもあ
 つか、實に元真爛熳無遠、雲の所、思の味が、無のり、い
 てもいから、或る地帯、愛讀の家、考案、ハ、地帯、東の
 昔、あつた、他山の石、首飾上部、堅く、いふもあ、をぬめ
 の、い人を、あつた、所以、いふもあ、いふもあ、いふもあ、い
 巧、いふもあ、と、感、いふもあ、いふもあ、いふもあ、いふもあ、

〇一茶の句を、あつた、相録、いふもあ、又、〇一二句を、あつた、

八文が、あつた、見、いふもあ、り、望、遠、鏡、

月、七、いふもあ、一文、格、の、春、也、いふもあ、いふもあ、

通、り、ぬ、け、いふもあ、いふもあ、と、恒、か、いふもあ、いふもあ、

昭和十四年三月八日

スガフミヤタカコ 清宮貴子内親王

けふ御命名の御儀

八日はお生まれまし、
 新内親王殿下御命名の佳き日、
 春陽うららかに瑞氣こめて、
 御の壽一天四福に満ち充つる中
 に、宮中では午前七時入江皇后
 宮事務官が奉仕して青山御所御
 苑内敷敷付近の御埋納所に御
 胞衣を埋め奉らせて御埋納の儀
 を終へさせられて後同九時大輿
 皇子女官長等奉仕の上
 皇子女官長等奉仕の上
 皇子女官長等奉仕の上
 皇子女官長等奉仕の上

八時儀場に参入、讀書、同窓の
 注進之助、宇野西人博士は雅
 やかな装束に書卷をさし、囀
 弦、同窓の奈良男、松浦子、大
 給子、徳川男が大を候する中
 に、定刻まるまると御健やかに
 御發育の内親王様には佳務奏の
 小倉御養育掛が御抱き申上げて
 御参入、保科女官長等奉仕の上
 御めでたく御産湯を奉らせ給ふ
 や、辻博士は朗聲高らかに讀日
 本紀卷第九の一節を奉り、同時
 皇子女官長等奉仕の上

宮内省告示第七號
 本月二日午後四時三十五分御
 誕生アラセラレタル内親王御
 名ヲ貴子ト命セラレ清宮ト稱
 セラル

昭和十四年三月八日
 宮内大臣 松平 恒雄



高貴は光榮の奉仕者、左より
 讀書辻善之助、同窓宇野西人
 浦男、鳴弦奈良武次、同子爵松
 浦、保科女官長等奉仕の上、
 同男爵徳川義徳の各氏
 (宮内省御下)

安藝賴襄謹再拜答

備前武元君立足下與足下始交殆十年于此十年之間人事反覆多不可言者襄也非復昔日襄也時思昔日所交游其於足下尤不能忘諸懷忽辱惠書書詞慇懃讀之猶接十年前之歡也復讀數四自喜自愧將即裁答書而襄父子皆病替緩至此幸勿罪也昔人有言丈夫之心如青天白日夫青天白日至易覩也而雲霧蔽之曖焉昧焉若襄往事毋論其自昏迷而流俗之不相知者加以紛紛之說雖鄉

党人猶側目焉所以致此曖昧也而足下在教國之外乃能排群議而懸知襄心昭昭然猶覩青天白日焉襄不自喜哉然至其以才器非常稱襄則弗敢當也夫材也器也果何謂哉養之有本發之有源窮可以自立達可以濟天下大事之難幹也大疑之難剖也正色當之裁而畫之若決大川而注之海是之謂材器若夫文籍之上翰墨之下挾其尺寸志高氣揚者輕狂書生指不暇屈惠在其為非常也夫當今之世假設有材器非常若前所言者亦死行伍而已而况萬萬不及此者乎襄才質迂踈百事毋曉獨

以家學略規於漢籍。輒不自揣。以古之所謂材器。非
常者自期。和漢之別。窮達之殊。無所分辨。翹然飛揚。
終伍夫輕狂之徒。而不齒於君子之林。是襄所以忤
悔弗措也。而足下遽以此稱之。襄焉不自愧哉。然
如所論。則雖足下之才。其前迷後悟。亦有類於襄。
襄又喜天下有同類者也。語曰。同類相求。同朋相照。
宜乎足下之知襄心也。襄之屏居窮處。有所著。區區
翰墨徒。以自遣謬。推足下之耳。欲聞其詳。悉襄又
愧之。雖然。古之人著書立言。欲以得知其心者。於千
載後。今襄也得之於當世。豈可不自喜乎。方襄尤悔

也。偶讀司馬子長答任安書。慨然有自悟。於是乎絕
念功名。一意文章。屏居無事。俯仰百五。以其宿好。論
載國事。自平安之已失。復得以至前後。錄倉室町安
土大坂。論其治亂。總之於終。目曰八議。叙輿地封建
官制兵制。財用法律之沿革。目曰六略。官祿之政。農
商之制。錢穀訟獄之利害。較之和漢。參之古今。備其
論。而擬其体。目曰二十三策。此三者。總脫稿矣。撮於
保元元中之際。綜其事之本末。目曰十八紀事。紀北
條大江武田長尾織田豐臣之興壞。目曰六將傳。此
二者。未全成也。總此五者。名曰新書。要之。皆出於屏

居止聊之餘。考拙未精。肆筆而成者。安足止齒牙也。
襄富春秋。異日之所成。自意不止。此區區者也。聞
足下畧紀國事。做体表。業已就緒。聞襄所成。欲焚
其稿。又欲為襄之素臣。何其言之過激也。凡足下
論事有傷於激者。不特此也。襄父壯歲。亦借史之志。
其所擬体。稍與足下均。已屬多事。廢而不舉。又無
庀材鳩工者。今襄所為。自與此別。居常思繼其志。而
未之果也。不圖足下之為之也。襄又喜且愧焉。
足下勤之。其於足下。猶成於襄也。抑近日諸儒所
成。業非不勤。傳非不廣。以襄觀之。文失其体。名遺其

義不義少矣。夫君子立言。將正天下之名。之。而振天下
之文。今天下之名已正矣。而君子乃禁之。天下之文
稍振矣。而君子乃廢之。是何事也。我輩宜卓然自立。
取法古人矣。眩於流俗。毀譽從眾。豈丈夫之心哉。
足下知襄心者也。又與襄同類者也。故相為言之。慎
勿語之俗人。時下寒。泣。伏願白。愛。

賴襄 謹再拜

武元君之足下

十月十日

何とか手短かに云はなければ悪いといふ心持で、とりあへず、いや、ウウとか、しかしか、そんな言葉で隙間をつないで置ききつてそのあとから本當の心を云はうとする。ところが、間に合せに云つた意味なしのつなぎ言葉のために、とんでもない方へあとの言葉が變つてゆき、しまつたと思つて引き戻さうとすると、それが又不思議な言葉を生み出してさうさう云つた場合が私には茂々である。

Hといふ飲んだくれの友人と、道でばつたり逢つた。飲んだくれの癖に親孝行なので此男に逢ふと、つい、お母さんは達者かと云つて了ふ。今日はと

お母さんの問題がこつちの心に浮んで、その日もお母さん達者かをやつた。「ウ、難有り、この頃上機嫌でほくくしてよ」

Hは満足さうにいひながら「おれんちへ嫁さんが来たんでね」と云ひ添えた。

「君の嫁か」

私はすぐにさう云つた。これがつまり、突差に何かいひたいといふ心持のためにとりあへずはちき出された間に合せ言葉なのだ。まづいなアとすぐに思つた。Hの家は母一人子一人といふのだから、母親に嫁さんが来るわけはない。

尤も、不慮、友だち仲間Hの噂が

吊車にぶら下つてゐられなかつた。Hの顔へまともな目が向けられず、そこへに次の停留場で下りて了つた。

どう考へても世間並ぢやない。我ながらどこかしら足りないところがあるんぢやないかと思ふ事もある。言葉だけならまだしも筆の先でこれをやらした事がある。

先年故人になつた石割松太郎が細君をなくした時だ。

「重荷ををろした氣持だらう。好い意味にも悪い意味にも——」

これが私の悔み状態のだ。書いて送つた時は、これでもしん底からくやみを云つたつもりだつた。この細君は石

「おいくつてす家内がびつくと、又しても、」

「おいくつてす赤ん坊の生れをいひに來ながいくつてすかものだが、かういじりは愛嬌があい。私なんぞ、輩の家の不幸をに行き、一際際上げて、」

「此度はお目出さいます」とや

の盛況を招いたのは、この好位置を占めた運の福原氏が、家業を巧みに軌道へ乗せた活動力の行進にあつたと言へませう。

明治十二年五月に、資生堂が米國醫學士の病

の盛況を招いたのは、この好位置を占めた運の福原氏が、家業を巧みに軌道へ乗せた活動力の行進にあつたと言へませう。

明治十二年五月に、資生堂が米國醫學士の病

芝高輪
品川駅前
宮前橋高輪
電
六二〇
六〇二六番
六〇二六番

即ち六期は内國商業に必要な學科を教へ、後二年は四期間、これを英語を以て外國商業に必要な學科を教へてゐました。

其の英文科は、物産誌(ワウ)△商業算術書(ライアント)△小經濟書(ホトリ)△英和譯△和英譯△英文書取△英文習字△簿

銀座手帖

記習例記載△英文商用作文△致富學(カワシ)△商律(ワラシ)△經濟要領論(ベリ)△商業沿革地理誌(ニル)△產物沿革誌(ニル)△佛蘭西語△電信暗號△商談

この授業料は一ヶ月金壹圓。教科書は校中貯蔵の分は之を

所に來りて、實地商業の有様等演説せらるゝこと教則中に載せたる如くなれば、生徒は之を聴き、各々卒業の後、其盡すべき所を知るの便を得紳士諸君も又生徒の性質品行技術、人柄等を知り、隨て其紹介又は採用の用途を、生徒

の芳名を傳へてゐますが、この頃から其頭角がこの文言に顯はれてゐることは争はれませんが、銀座の珍妙なる商業講習所をお傳へします。

官報も銀座から

官報は明治十六年七月一日の刊行ですが、この

京橋區三十間堀二丁目一番地 博文堂 原田庄左衛門

この銀座の二軒と、外には日本橋の小柳津要人(丸善)神田の八尾新助とでした。

長尾景弼といふ仁は、帝室博物館長股野琢(藍田)先生の弟で博文社といへば、其頃鳴り響いた長尾の書肆でした。同社の出

銀座をおもふ

吉井 勇

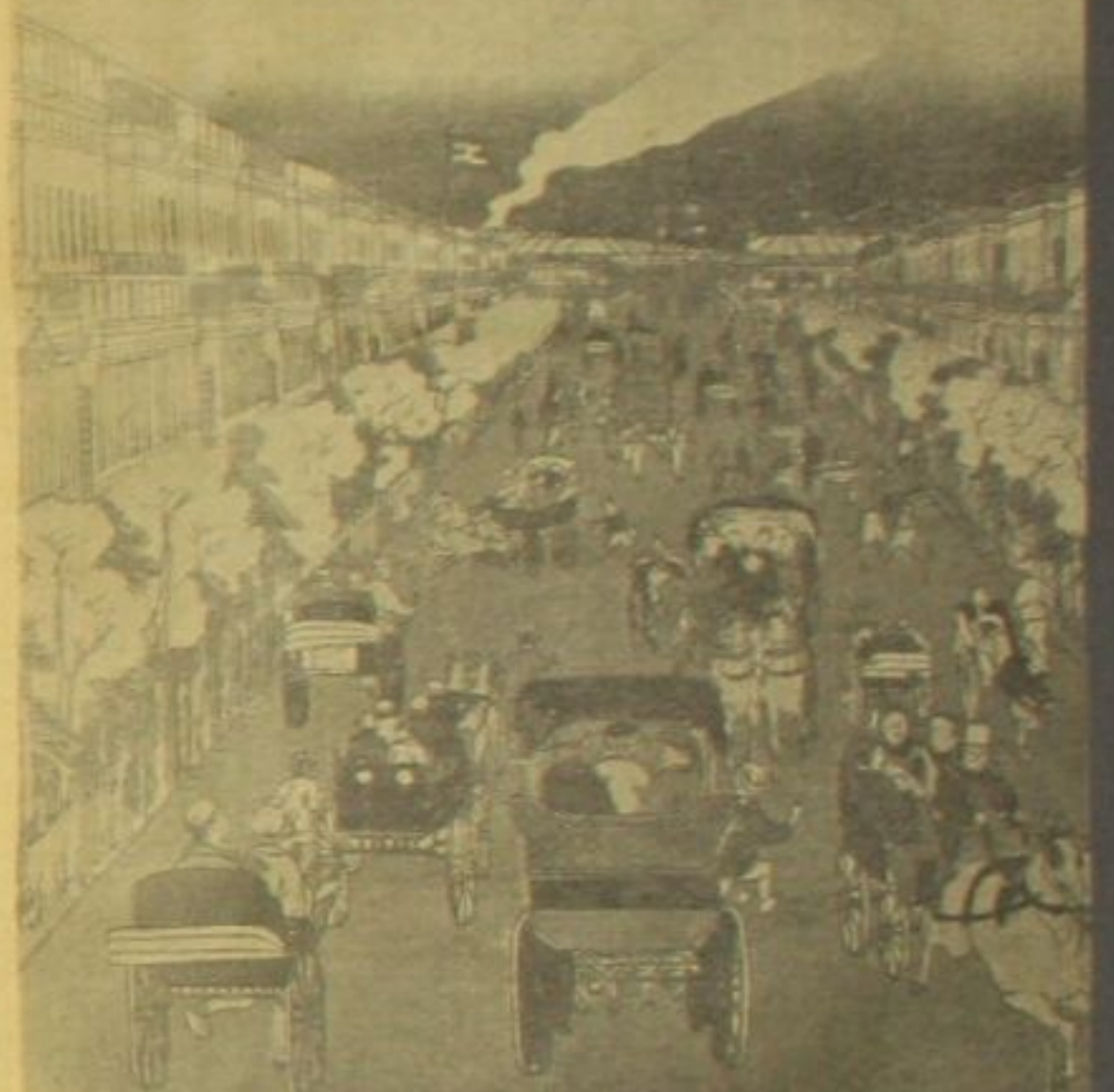
夜ごとに銀座を練りしそのかみの



旭菊水宣傳店 につぼん茶館

銀座七丁目 銀座電話四座

銀座百話
篠田日鏡造



資生堂の變遷と

銀座高等商業學校

資生堂は賣り又買戻す

現代

銀座の豪華な資生堂も、明治十年には、杉田家具店、杉田幸次郎の手で、福原有信氏は三千圓で買拂つてゐます。杉田家具店は官内省御用を承る當時の豪華商でした。資生堂はまだハッパネ箱や、毛の生へる薬を買つてゐた、藥劑店に過ぎませんでした。

明治二十二年の杉田家具店の堂々たる廣告を見ても、同店の豪華さが察せられます。

和洋室内装飾家具製造、店主幸五郎御造御裝飾御用にて歐米巡遊の際親しく各國の製造方を視察致し爾來其計畫をなし居りしか、其準備既に成り、這般愈々該機械購求と光景取調の爲め、佛國博覽會を兼ね支配人一名技士一名を歐

と思ふのは、左記の廣告が物語つてゐます。これも妙なものの一つ。今般捕者後東京新橋出雲町十六番地藥舖資生堂福原有信方へ左の時刻を以て出雲内外患者診察致候間此段廣告候也
木曜日(午後二時) 診察料金一圓
内國人
土曜日(午後二時) 診察料金一圓
外國人 金五圓
故米國華學醫學教授 在橫濱六十六番 醫學士 エルドリツチ白

銀座の帳場格子商業講習所(高等商業) 尾張町に「東京府商法講習所」の設立されたのは明治八年八月で、森有禮(野文太郎)の創意に成

級廣東料理

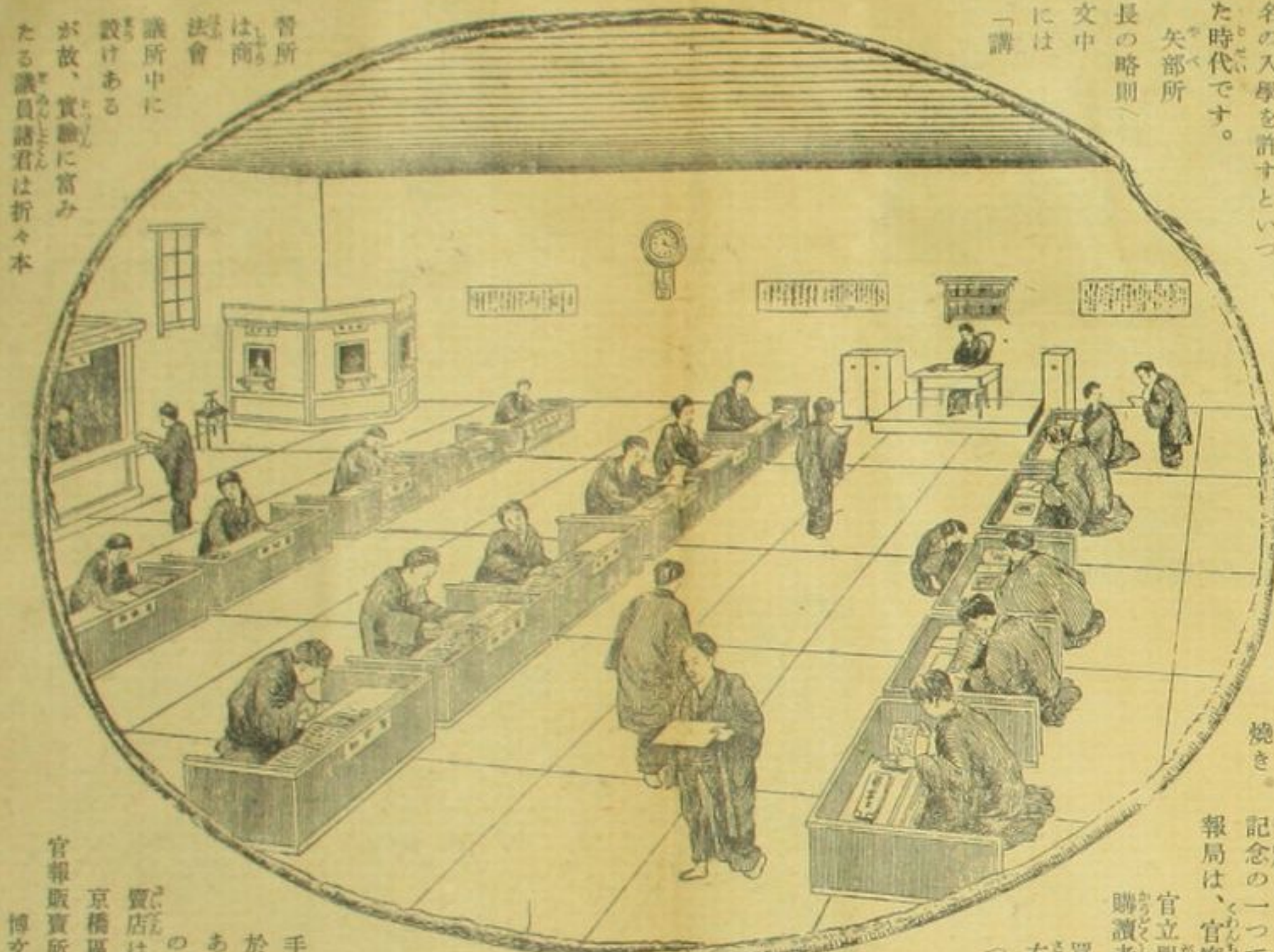
芝高輪 宮前橋高台 品川 六二六番 六二六番 六二六番 六二六番

芝高輪 宮前橋高台 品川 六二六番 六二六番 六二六番 六二六番

り、これが高等商業學校の前身とは、息淺度難を抜かれるお話ですが、明治十四年四月の同所略則に、所長矢野次郎議といふ本願を讀んで、確實の文獻であることを合點されます。其講習所がどんな風であつたか疑問符にされてゐた所、明くれば一昨年帝大明治新聞雜誌文庫へ入車した、こゝに掲げる繪に據て其の生徒がナント一人々々帳場格子を擧げて、勉強してゐる態制を觀るに及んで、珍奇の感に浸たれると同時に、商法學に熟練の米國人を備ひ教師となし、稍我國普通學を修め、兼て精英語に通ずる少年をして入學せしめ、歐米諸國に行はる、商業の慣習、帳合、算術等を教授せしめたといふ略則中の生徒達が、この江戸式商店の教場に精古してゐる珍景に、一驚を喫します。

明治九年五月、木挽町十丁目十三番地に新築されて銀座を退いてゐます。我國内外商業の振興隆盛を圖る指導者の養成機構が、この養育所の如き體裁であつたのを珍妙とせざるを得ません。生徒は滿十三歳以上、普通小學卒業若くは同等の學力所有者を入所せしめ、學業教授は五箇年を十期に分ち、前三ヶ年、即ち六期は内國商業に必要な學科を教へ、後二年は四期間、これを英語を以て外國商業に必要な學科を教へてゐました。

其の英文科は、物産誌(フロッ) △商業算術書(フロッ) △小經濟書(フロッ) △英和譯 △和英譯 △英文書取 △英文習字 △簿



記習例記載 △英文商用作文 △致富學(フロッ) △商律(フロッ) △經濟要領論(フロッ) △商業沿革地理誌(フロッ) △産物沿革誌(フロッ) △佛蘭西語 △電信暗號 △商談

この授業料は一月金壹圓。教科書は校中貯蔵の分は之を貸與すべし(前記参照)。

前記の随分むづかし、原書教科書は、外國から取寄せてゐたものと見えます。生徒は二十四名の入學を許すといつた時代です。

矢野所 長の略則 文中 には 一講

所に來りて、實地商業の有様等演説せらるゝこと教則中に載せたる如くなれば、生徒は之を聴き、各々卒業の後、其盡すべき所を知るの便を得紳士諸君も又生徒の性質品行技術、人柄等を知り、隨て其紹介又は採用の目的を、生徒卒業前に於て豫定するの便宜あるべし(五)。

矢野次郎氏は後年高等商業學校校長となつて、卒業生徒世話

官報も銀座から 官報は明治十六年七月一日の刊行ですが、これを民間に販賣せしめたのは降つて明治二十二年で「官報販賣所」の指定を布達してゐます。其の官報が銀座から販賣されてゐることも、忘れられない記念の一つでせう。當時内閣官報局は、官廳(局長役場を除く)官立學校及陸海軍省義務購讀者を除き、官報を購買せんとするものは左記の官報販賣所につき購讀すべし。其

京橋區三十間堀二丁目一番地 博文堂 原田庄左衛門

この銀座の二軒と、外には日本橋の小柳津要人(丸善)神田の八尾新助とでした。

長尾景助といふ仁は、帝室博物館長野野(藍田)先生の弟で博文堂といへば、其頃鳴り響いた銀座の書肆でした。同社の出版書籍は多量あつて繁昌を極めたものですが、博文堂はこの博文社の隆興にあやかるため、前として世間に打つて出て、遂に同社を凌駕した次第。尤も出版書籍は硬軟途を異にしてゐましたが、時潮に乗つて博文館の天下となつたは周知の事柄です。

上圖は明治八年銀座に開設された銀座商業講習所の教室の實景です。生徒が一人々々帳場格子に入つてゐる珍景を御覽下さい。詳しくは本文「銀座商業講習所」の項参照。

手續等は該取次者に於て廣告すべし、とあるのが、同年四月の御達しで、其の販賣店はといふに 京橋區銀座四丁目一番地 官報販賣所 博文社 長尾 景助

大倉組は洋服店

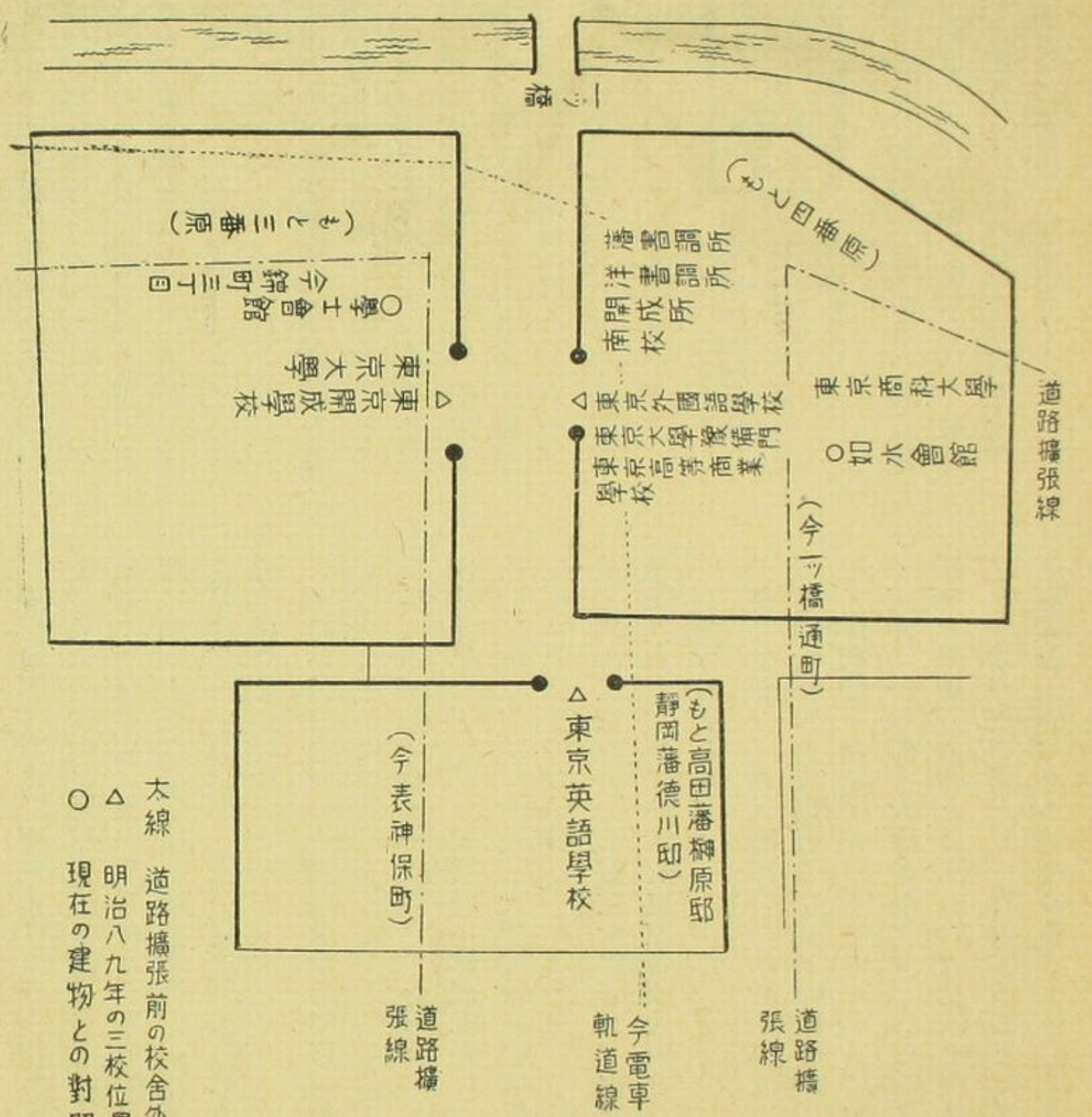
新聞社の銀座一の角に、所在の頃、明治九年十二月、芝琴平町から銀座進出を見た、其棟瓦家屋は西村三氏の洋服店の跡で、會計の戸籍は移抄の置場であつたとやら、銀座は洋服店の集であつたとも言はれます。投資は洋服がよいと思はれた時代で、大倉組が既に銀座三丁目三番地野田屋の跡へ開店したのも、大倉洋服店でした。(前記参照)

今般弊店に於て、倫敦巴里服裝店を開業仕り専ら御婦人方の御服用に關する物品一式の御注文に應ずるため、倫敦巴里の有名なる製造家と直接の取引を結び、且倫敦西京製の絹掛物も仕入置海外流行の形に準じ調進仕候間多少不拘御用向被仰付度右相願候也

大倉洋服店

去程二月廿日
 物色修治中
 此等南洋女子
 此等南洋女子
 此等南洋女子

一ツ橋外に設置した蕃書調所等の所在地并に
 明治初期に於ける開成學校等の位置一覽圖



△ 本線 道路擴張前の校舎外廓
 ○ 明治八九年の三枚位置
 現在の建物との対照

[明治七年の開成學校の全景寫眞はフェルベック傳
 (Griffis: Verbeck of Japan) に載す。]

○ 戦後の藩名並びに家歴左の如し

藩名		創設年代	
新島田藩	新島田藩	道長元年	安永元年
村上藩	村上藩	文徳元年	寛政元年
村松藩	村松藩	白尾元年	向次元年
共立藩	共立藩	正徳元年	天明元年
長子藩	長子藩	崇徳元年	文化元年
碓氷藩	碓氷藩	入徳元年	明次元年
芳田藩	芳田藩	徳吉元年	安永元年
清浄藩(上野司)	清浄藩(上野司)	明道元年	明治二年

家藏

三餘堂

所在地

長善館

刈羽北條村

鹽澤南蔵

有為堂

西備栗生津

鈴木文基

誠意齋

中尾村松

蒲生重幸

不如名舎

長子

高橋竹次

積善堂

新河

長井久三

律已橋

新島田

丹羽伯弘

田舎堂

北備飯石山

大野恥重

光宗

北備赤松

肥田重基

光宗

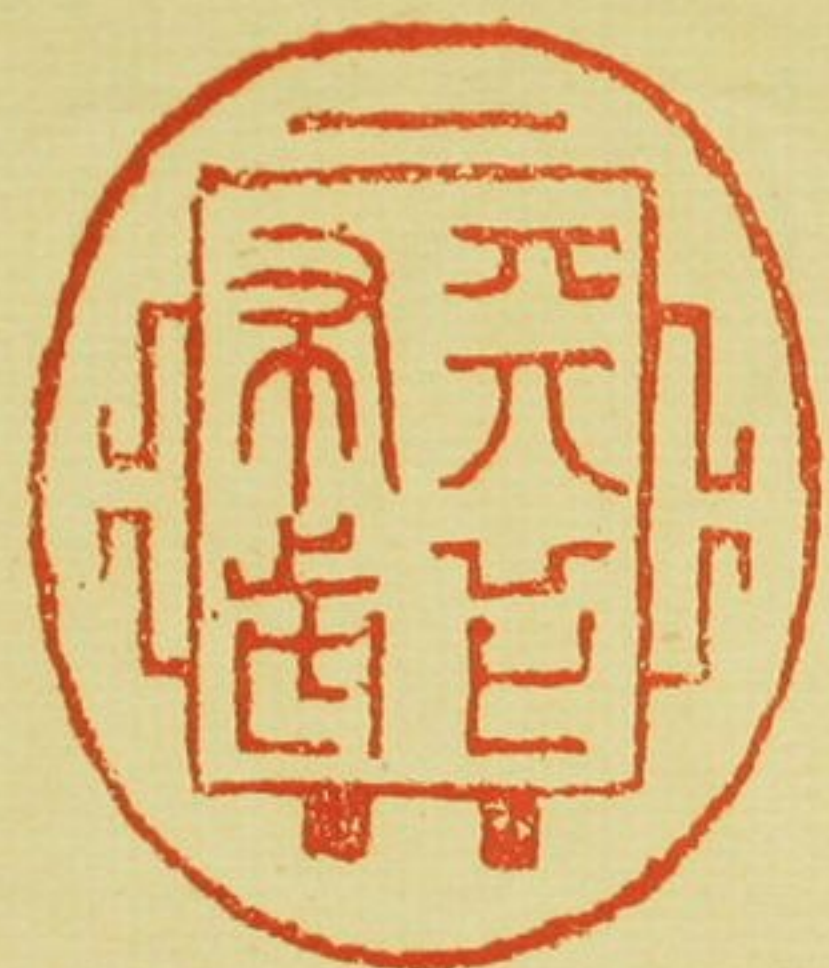
北備浦木

曾我綱重

城後藩に出納し、書物八百四冊、嘉永六年、中島嘉吉
 通校の史稿八十冊と出納し、村上藩の寛政御
 服部元寛の史記二十五冊を流版し附してあり、前も多
 くの書稿を出納し、そのうち、大部の古目の本
 を奉け、儀礼経傳通解後二十冊、寶流通解後
 抄略正續十六冊、山崎嘉助の四書集注十冊、口史
 十一冊、禮出抄略(法軒校)十三冊と出納してあり、他
 一冊より三十数部を贈り、皆安永流のものである。
 尚書田舎の史稿の書と流し、松氏文集十冊
 あり、その中の史稿の文字村松重基氏の文集集むる。

○池田お村の抱一上人の弟一門才と云ふてあるが、其墓の吾郷
 里ある。寺に在るのむ、去二月十三日仰堂の有志は遠
 今を催し、多分自合が宇佐守海、お村の山あり大橋と
 此く此の杖像とありと今が僧とんれとありし。此今のこと
 とか僧とんれ時の生場自合病臥中、今了法利此の
 と思つてぬれともちあらんが、取出すことか不能のちるは
 遠徳びちうたか、近日お村印湯を作つて、お村合の童と
 つれ人に贈りたれと心づけとあり、お村の遺印の印造と
 共此合部今の家、花とあり、印造の度とあり法遠し
 彫り多うし、粧品とあり。印の大小合し、四五十顆とあり
 んびぬる、其の定數も進運今とあり、此のむとあり、尚
 お村遺像の、經冊一箱、天守古刹の遺材ひ生つれ、研經也。

美濃西



天下布武 古銅印一
 美濃西方寺藏
 天下布武なる印は三種ある。これは織田信長の印である。信長は永祿三年に今川義元を亡ぼし名聲天下に聞こゆ。永祿五年には天下を平定すべく密敕を蒙り、同十一年九月に將軍足利義昭を援けて上京した。朝廷にては信長の功を論じ、從四位下左兵衛督に任ぜられしが、信長之を拜辭せし爲、從五位下彈正忠に任ぜられたのである。此印は此頃より用ひた。即ち京都成就院の古文書には永祿十一年九月彈正忠と書し此印が押捺されてある。初メ信長が印を作らうとして、尾張國名古屋政秀寺の開基である僧澤彦に請ひしに澤彦は此印文を撰み呈せしゆゑ、其賞として二百貫文の領知及び古法眼元信の畫きし秋野百菊の屏風一雙を賜はつたといふ。○今一つは印文は前と同様であるが輪廓が異なつたもので、京都曇華院の古文書に永祿十三年三月二十二日信長と書しこれを押捺してある。輪廓が子持である。○又一つは印文は略ぼ同様であるが輪廓に龍の形を入れたもので、京都大雲院の古文書に天正七年五月二十八日信長と書しこれを押捺してある。(皇朝印史に據る。)

我が水原町唯一の古跡たる

越後府の趾をしのぶ

我が水原町の唯一の古跡たる天長山は天保年間飢饉打續きて細民塗炭の苦しみに泣きし時市島家六代の當主大に之を憐み大土工を起し貧民を驅つて荒蕪の地に埋立を行ひ邸宅を築かれしが其工の竣りし時恰も水野越前守の勤儉令が布かれたので直ちに呼ばれて譴責されんとせしが働くも仕事のなき窮民を憐み驅つて不毛の地を開拓したので叱られる所が却つて其處置の機宜を得たる事に大に賞せられたものである

慶應三戊辰の年松平容保侯の臣西郷頼母此處に宿陣して越後路戦争の本營に充てたるが同年七月二十五日官軍松ヶ崎に上陸し新發田城に入り二十七日水原を攻むるに當り會津軍衆寡敵せざるをさとり守備を棄て、走る其の際官軍邸内に若しや敵兵が残り居るやらんとの疑より遠卷に之を圍み鐵砲を打ち込んだので陣屋建物は大部分焼け（今のテニスコトになつて居るあたり）其周圍にあり鬱蒼たる松の樹木にも燃え移り其の爲め現在残りある松は並んで内側は一本の枝なく外側のみ枝の繁茂せしを見るこれは當時の有様を物語る唯一のものである

此の邊を逍遙し往時を回想せば感慨轉た深いものがある翌明治元戊辰の年七月二十九日始めて民政局を置かれて四辻公賀卿越後府知事に任せらる然るに府は藩縣の上位にある故水原町は恰も高田、新發田、村上、長岡、村松の各城を始め越後一圓の中央都府の如き觀をなし諸侯の參勤多く前原一誠、八木朋直の諸氏も當時越後府の官吏として勤められ居りし同町には七人衆と云へる富豪ありて府廳の便利を計りしたの一層の景氣を増し町民競ふて資金を投じ各種の營業の擴張を計りしが不幸二年九月官制の改定により府は縣と改まり三年八月水原縣も廢せられて商業唯一の水原町となり同町の繁榮は一朝の夢と消え失敗者多數續出するに到りし當町に落首ありケン飛んで水原町は疵だらけ

明治六年府跡建物取崩しとなり賣却せしが邸地は北蒲原郡中浦村大字天王市嶋徳次郎氏へ返還さる爾來同家の別邸地となつた庭中に明治三十四年八月閑院宮殿下北越御巡視の折此の地に臨ませられ記念御手植の松が保存されてある府跡今や松籟のみ過ぎし昔を物語り思ひ出深い越後府の跡を傳へてゐる其の他數百本の杉は鬱蒼と高く伸び茂つてゐる櫻樹も紅葉も又數百本春に秋に爛漫として偉觀を呈して居る又水原町在郷軍人分會では日露戦役の記念の爲め戦病死者の英靈を祭り忠魂碑を建立し年々盛大に招魂祭を行はれてゐる日露戦役後再び閑院宮殿下御來水に際し御手植の松を御覽遊ばされ慶びの御言葉があつた杖を曳く文人墨客枚舉に遑なし左に一二を擧ぐれば

昭和十三年十月二十四日水原府廳の跡ある天長山の公園を廻りて後亦吉田可月氏所藏の印譜を見る因て懷舊の情に堪えず一首をものしぬ

越後府の造營なりし六十年世の昔の跡をしのぶ印章

八木朋直

昭和五年五月二十二日北越漫遊の途次天長山市嶋家別邸に休憩の節

老杉のしみたつおかのなりとこころひるもさびしさ山鳩の聲

千葉胤明

吉田 穰(稿)

御得意様各位

毎度御引立を蒙り厚く御禮申上ます當店は常に良品を安く皆々様に御す、め致すモットで營業致して参りました此の度可月堂御主人より多大の御指導と御援助を得て水原町の名物としてもつとも意義深い御菓子をひろく皆様に御す、め致す機會を得ました何卒一層御引立下さる様御願致します

最上屋菓子店主

謹白



幕末 水藩 西洋文明輸入譚

高須 芳次郎

(一) 水戸烈公の西洋文明 研究と蘭學者招聘

水戸市内の東照宮に参詣した人々は、その物静かな境内の一隅に安神車(昔の装甲自動車)の陳列されてゐるのを見るであらう。曾てこれを聞き知つた荒木文相は、昭和七年、陸相時代に東照宮を訪れ、水戸烈公(齊昭)の發明になるといふ、わが國最初のタンクを見て深くその先見の明に共鳴したと傳へられる。

そのタンクは、烈公の創案により、刀鍔治久米新七郎が心こめて、製作したのである。全體が菱形で、車臺の上の一室を煉鐵七枚で作し、周囲一丈五尺四寸、高さ三尺五寸、室の後に一つの扉を附けて出入に便し、左右に

は、展望に都合よきよう、窓を穿つて、便所の設けもある。その總量九十五貫餘、これを動かすために、一頭の牛を用いたといはれる。惟ふに、この事實に接した人々のうちに

は、意外の感に打たれるものもあらう。烈公といへば、尊皇攘夷派の總帥で、海外文化をも嫌惡したと想像さるゝからである。ところが、實際は、さうでなく、當時、烈公ほど熱心に西洋文明を研究して、その輸入に努力した藩主は、類を見ないといつてよい。

一體、烈公は、深くその祖先、義公の英明に私淑し、萬事、義公の云爲を手本とした。義公は、性質潤達で、度量が廣く、夙に海外文化攝取についても、熱心だった。のみならず、國防の充實、産業の開發についても、特別の注意を拂つてゐた。

外に求める態度を執つたことが分る。

従つて、義公に私淑した烈公が西洋文明の長所を採取するに力めたことは、寧ろ當然である。一體、烈公が唱へた攘夷は、外交國難を前にして、學國一致の體制を鞏固にするため、古い言葉でいふ通り、背水の陣を布かうとしたのである。それは、だれ切つた幕府當局をはじめ、一般國民の心の眼ざめをうながすための懸げ言葉で、腹の底までの攘夷ではない。

それ故、烈公は、西洋文明についても、特別の注意を拂つて、その長所、短所を見きりはめ、國家本位に、その長所を採用する上では、極めて熱心だった。當時、國防を充實するについても、産業を興すについても、烈公は、オランダ學者の説を聞いて、そこへ、自分の創意を加へるといふ行き方をした。

日本の富強!

烈公が寝ても、醒めても、忘れぬ一事は、こゝにあつた。ひしひしと迫ってくる歐米列強の壓力に對して、烈公は、全日本のために深く憂慮し、イギリス、アメリカ、ロシアなどに劣らない富強國日本の實現を急いだ。

この立場から、烈公は、(一)西洋學の講究(D)造船(三)銃砲製造、(四)洋式武器、兵器

及び諸機械の製造、發明、(五)産業振興などに力を入れた。これがために、烈公はあらゆる困難と戦ひ、あらゆる苦心を拂つて、國家本位に、ぐんぐん進んだのである。

かうした關係から、烈公は、西洋の新知識に通じたオランダ學者の任用についても深く考へ、先づ天保二年、青地林宗を招聘した。林宗は、オランダ學の權威で、漢學の知識も亦深く、文政八年、杉田立卿と共に、ゴロウインの『遭厄日本記事』を譯し、また同年オランダの理學書を『氣海觀瀾』と題して譯述した。他に『輿地志略』の著もある。

烈公は、林宗の實力をよく認めてゐたところからその手書のうちにも「町醫師林宗は、天文憲御用も相勤め、蘭學者にては日本一の由」といつてゐる。それで特別任用の意味で林宗を江戸在住の儘、藩に抱へた。

ところが、林宗は、在職一年ばかり天保四年二月で卒去したので、その翌月、蘭醫シイポルトの門下、幡崎藩を藩の西學都講に任用した。元來、幡崎は、長崎地役人で、本姓を菊谷米藏といひ、シイポルトからオランダ學の教へを受け、深く接近してゐた。さうした關係のため、シイポルト退去事件——知識交換の目的で、高橋左衛門が、シイポルトに

義公が西洋文明に注意したことは、藩臣葉間玄術を長崎に留學させ、また當時、邪宗門といはれたキリスト教についても、諸種の文獻によつて一應、その内容を研究した様子によつても知られる。それに、義公は、公益のため、廣く南支那、南洋方面から薬用となるべき草木を移植したり、西洋の軍艦にも劣らぬ大船、快風丸を作つたり、或は自ら洋服を拵えたりした。

快風丸は、長さ二十七間、幅九間、深さ六間に達し、帆柱の高さは、十八間に及んだ。これは、六十丁の櫓を備へて、大體、總噸數五百噸と推定された。この日本式軍艦が北海道探險に赴いたとき、艦上に巨砲を載せたといはれる。して見ると、義公は、夙に洋式武器についても研究したらしく、廣く知識を海

日本地圖を與へ、土生支領が將軍家から拜領の葵紋附をシイポルトに贈つたため罰せられ、これに伴つてシイポルトも日本退去を命ぜられた——に連座し、押込みの刑に處せられた。

これについて、幡崎は、不當の所罰だと考へ、不満に堪えぬところから、服罪中、俄かに逃走、姓名を變へて、江戸に潜入したのである。當時、水戸では、幡崎の前身を知らず、そのオランダ學の才能を愛して、七人扶持で任用した。爾來、幡崎は、水戸藩内にオランダ學を普及するに力め、醫師松延玄之、森庸軒、鱧半兵衛(重時)らに蘭語を教へると共に、烈公の望みによつて、『海上砲術全書』(原名「セイアルチルリイ」)を譯述、軍艦製造法や砲術などについて、詳しく、藩の人々に説明したのである。その際、造船の上下一番、知得するところが多かつたのは、門下の鱧重時で、後水戸で軍艦旭日丸を作るとき、その主任となつたのは彼だった。

ところが、こゝに、幡崎の一身に一個の運命悲劇が起つた。天保八年、彼が藩命によつて長崎に赴くと、同地の役人は、彼の舊罪を知つて、忽ち彼を捕へ、拘留處分に附した。このため、彼は到頭、御預けの身となつて、



幕末 西洋文明輸入譚

高須 芳次郎

(一) 水戸烈公の西洋文明研究と蘭學者招聘

水戸市内の東照宮に参詣した人々は、その物静かな境内の一隅に安神車(昔の装甲自動車)の陳列されてゐるのを見てあらう。曾てこれを聞き知つた荒木文相は、昭和七年、陸相時代に東照宮を訪れ、水戸烈公(齊昭)の發明になるといふ、わが國最初のタンクを見て深くその先見の明に共鳴したと傳へられる。

そのタンクは、烈公の創案により、刀鍛冶久米新七郎が心こめて、製作したのである。全體が菱形で、車臺の上の一室を錬鐵七枚で作り、周圍一丈五尺四寸、高さ三尺五寸、室の後に一つの扉を附けて出入に便し、左右に

は、展望に都合よきよう、窓を穿つて、便所の設けもある。その總量九十五貫餘、これを動かすために、一頭の牛を用ゐたといはれる。惟ふに、この事實に接した人々のうちに

は、意外の感に打たれるものもあらう。烈公といへば、尊皇攘夷派の總帥で、海外文化をも嫌惡したと想像さるゝからである。ところが、實際は、さうでなく、當時、烈公ほど熱心に西洋文明を研究して、その輸入に努力した藩主は、類を見ないといつてよい。

一體、烈公は、深くその祖先、義公の英明に私淑し、萬事、義公の云爲を手本とした。義公は、性質潤達で、度量が廣く、夙に海外文化攝取についても、熱心だった。のみならず、國防の充實、産業の開發についても、特別の注意を拂つてゐた。

義公が西洋文明に注意したことは、藩臣衆間支術を長崎に留學させ、また當時、邪宗門といはれたキリスト教についても、諸種の文獻によつて一應、その内容を研究した様子によつても知られる。それに、義公は、公益のため、廣く南支那、南洋方面から薬用となるべき草木を移植したり、西洋の軍艦にも劣らぬ大船、快風丸を作つたり、或は自ら洋服を拵えたりした。

快風丸は、長さ二十七間、幅九間、深さ六間に達し、帆柱の高さは、十八間に及んだ。これは、六十丁の櫓を備へて、大體、總噸數五百噸と推定された。この日本式軍艦が北海道探險に赴いたとき、艦上に巨砲を載せたといはれる。して見ると、義公は、夙に洋式武器についても研究したらしく、廣く知識を海

水戸市東照宮の安神車
の陳列されてゐるのを見てあらう。

水戸烈公(二)

水戸市東照宮に参詣した人々は、その物静かな境内の一隅に安神車(昔の装甲自動車)の陳列されてゐるのを見てあらう。曾てこれを聞き知つた荒木文相は、昭和七年、陸相時代に東照宮を訪れ、水戸烈公(齊昭)の發明になるといふ、わが國最初のタンクを見て深くその先見の明に共鳴したと傳へられる。

を招聘することとなった。

大島高任は陸奥(陸中)盛岡の藩醫の子で早く江戸に出て蘭學を修め、それから二十一歳で長崎に留學、四年間、西洋の兵法、砲術鑛山、製煉の諸學を修めた。彼は身長五尺八寸、極真面目な學究式の無口な人物だった。竹下矩方、亦高任に劣らぬ造詣があつて、鹿兒島藩の出身である關係上、度々、長崎に出かけ、オランダの武器、モンニツキ、デフエエルらについて、鑄砲術、砲術、火薬製造法などを學んだのである。

彼は大西郷に似た風貌體格の持主で、外出の折、陣羽織を着て七尺の大刀を帯び馬上ゆたかに顧眄した様子は、いかにも立派だつた。以上の三士が安政元年初夏、東湖に伴はれて江戸小石川の水戸邸に赴き、後樂園内の琴晝亭で、はじめて烈公に謁したとき、烈公はひどく喜んで、鄭重に饗應し、今度の新事業のため、特に努力するよう、囑望した。

三士は深く感激して、將來の成功を期し、勇んで、水戸に向ふべく、江戸をあとに千住に向つた。折柄、烈しい大雷雨で、天地をゆり動かすばかりの雷鳴に青くなつたものも少くなかつた。さうした中を東湖は、馬に鞭つて、三人のあとを追ひ來り、千住の宿で再び

懇談した。

その席上、東湖は、幾度も大杯を擧げて、酒間、時事を痛論し、三士も亦率直にその所懐を述べて、興は頓に加はつた。

「今回、作られる反射爐については、盟つて成功を期し、中納言様及び貴下の御厚意に必ず酬みたいと存じます。この點、何卒御安心願ひたい。」

三士が口を揃へて快くいふのを聞くと、東湖は、満面に喜色を湛え、その所感を即興の詩に示した。

同人報國心丹の如し。

須らく識るべし墨夷肝膽寒きを。助くるに似たり新爐鐵を熔かすの勢。殷雷快雨征鞍を送る。

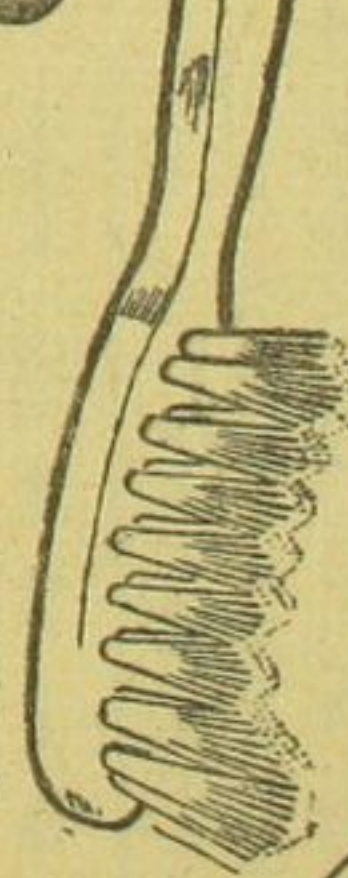
かうして東湖と歌をつくした後、颯爽と水戸に入った三士は、心をあはせて、反射爐の建設、鐵製巨砲の鑄造に、最善の努力を盡し倦むことを知らずに、各種の難關を突破したのである。その結果、見事に烈公の所志を上げることが出来た。

以上だけでも、水戸藩とオランダ學者との交渉が可なりに深かつたことが判明する。それは、烈公、東湖らが率先、西洋文明輸入の

No. 1 TANCHO 頂丹

頂丹

耐久力三倍の經濟品
優秀眞價は御期待以上



いけない!

かう烈公は、臣下のものに話して、大きく笑つた。

この十貫目長身砲を作るについて、烈公は非常の意氣込で、天保十一年五月、通事、監督らを任命し、鑄物師長谷善四郎を召出して技師長とし、神崎の鑄造所で、起工式を擧げた。

その日、善四郎は、多数の弟子たちを集めて訓示し、一同懸命に長身砲の製作をはじめた。かくして、いろ／＼の苦心を経た後、長身砲の形も出来、爐も作りあげたので、四ヶ所の爐へ二千貫の銅を配達し、人足百二十人を使つて、いよいよその鑄立を烈公の縦覽に供することにした。

當日、烈公は、深い期待の色を緊張した顔に現はしつゝ、鑄造所に臨んだ。善四郎らはこれを無上の光榮として、都下一同を督勵し、張り切つた姿で、鑄立に當つたところが、意外に豫期通りにゆかなかつた。

この有様を見て、眞青になつたのは、善四郎である。

「平生、多大の御信任を受けながら、この見苦しい結果を御覽に入れたのは、實に申わけがない。たとひ、在來、この種の經驗がなく

とも、失敗した以上、殿様に合はすべき面目もない。責任上、自分は死んで、御わびするばかりだ。」

善四郎は、咄嗟にかう決心すると、地獄の花のやうに眞赤に燃えた火中へ身を投げ込もうとした。これに驚いた周囲の人々は、善四郎を引き留め、

「大砲の御用は、何も今日に限つたことではありませんから、靜かに後日の沙汰を待たれた方が宜しいでせう。」

と頻りになだめた。烈公も亦善四郎の眞剣な心持に動かされて、顔色をやはらげ乍ら、

「今度の仕事は、まだ一度も經驗せぬことぢやから、二度、三度失敗したとて、決して恥にはならぬ。それを氣にせずに、新しい勇氣を振つてゆつくり仕事を續けてゆくがよい。自分も心附いたことは、申し傳へ、何處までも協力し

てゆかう。」

と説諭した。この言葉に善四郎は、心から深く打たれて、再起の精神を奮ひ起し、工夫に工夫を重ねた末、天保十三年六月、第三回目鑄造をしたとき、豫期通り長身砲を作りあげることが出来た。

それから少し前(天保十一年)のことであるが、烈公は、種々苦心、研究の餘、水中から敵艦を射撃する大砲を創案し、これを試作したことがある。それは、當時、椎實玉といつて、今日の魚形水雷にひとしかつた。さてこれを作るに當り、烈公は軍器の秘密を守る

名物 頂丹 頂丹 頂丹

理料西劇 小官女にも

銀座松坂屋重衣 電銀一五八五



ため、矢倉奉行はじめ職工らにも、一切、この事について他言せぬといふ誓言を書かせた。後、大砲が出来ると、那珂湊の海岸で試射したが、結果は十分でなかつたといはれる。が、烈公が、オランダの知識を自ら兵器の上に活用しようとした熱意だけは、汲み取ることが出来る。

(四) オランダの原書を活用した反射爐の建設と鐵製巨砲の鑄造苦心

それらの日、水戸で一番、苦心を重ねたのは、反射爐の建設と鐵製大砲の鑄造だつた。それらは、オランダの原書や精密な原圖によつたのであるが、それ丈では、雷を隔て、物を見るやうに、どうも十分でない。どうしても實地の工夫、研究、經驗が何より必要だつた。然し、この方面については、誰ひとり、老練したものはない。これが製作上、何より大きい難門となつた。

従つて、一同は必死の覚悟で事に當つた。先づ何を措いても、反射爐を作るに於いてその原料となるべき耐火煉瓦の製造を始めねばならなかつた。當時、竹下矩方は、鹿兒島で反射爐を作つた際、苦い經驗を嘗めた。そ

れは煉瓦がよくないため、いよいよ鑄砲に取りかゝると、爐内の煉瓦が高熱に堪えきれず、崩落したのである。「あのやうな失敗は、斷じてしたくない」

矩方は、熊田、大島らに、かう語つた。

それで、大島高任は、主に耐火煉瓦のことに力を注ぎ、これを焼く時に必要な良土を得るため、烈公の許可を受けて、諸方を歩き廻つた。最初、彼は、多數の優秀な工人を従へて、安政元年六月、水戸領内を根氣よく見て歩いて、土質を調べ、七月には、那珂川沿岸の土を調査した後、尙ほ根氣よく旅を續けて下野那須に入り、小砂村に至るに及んで、はじめて耐火煉瓦を作るにふさはしい良土を見出した。

これに力を得て、九月に反射爐敷地内に設けた瓦焼き場で、煉瓦の製造に着手したが、この方面の經驗に乏しいところから、千七百度以上の熱に耐え得る煉瓦を作ることが容易でない。何回となく、失敗を重ねて、當時、瓦焼の名人といはれた福井仙吉さへ、全く絶望しようとした場合さへあつた。中には、附

東京市下谷區上野櫻木町十八番地
電話下谷83 三五七〇番
土田腦脊髓病院
院長 醫學博士 土田 誠
分院 埼玉縣與野町(大宮與野驛下車)
電話 大宮五三二番・與野六番

近の岩間稻荷に祈りを捧げて、生命がけの氣持で、努力した若い工人もあつた。が、中々、成功しない。そのため、大島高任らは「もつと理想的な良質の土を得なければならぬ」と考へ、直ぐ磐城方面に急行諸方の山をあさつて、多量の燧石を採集した後、それを粉末にして、在來の粘土に調合した。こゝに至つて、はじめて、思ふ壺にはまり、立派な耐火煉瓦を作るやうになつた。

困難は、ひとり、こゝに留らぬ。次には、良質の鐵を手に入れるについても亦少からぬ苦心をした。水戸藩内でも、久慈濱方面に産出する砂鐵があつたが、そればかりで、中々足らない。それに、大島高任は、鐵製大砲の鑄造に一番役立つのは、磁石性を持つ岩鐵でなくてはならぬことを知り、この事を上申し、そこで、水戸では、雲州鐵を江戸で買ひ

鍵として、オランダの必要を認めためた後には、皇道主義を強く主張した豊田天功もオランダの存在價值を知り、自分から進んで、これを修めるやうになつた。中にも、武田耕雲齋などは、更に英語學修の必要を烈公に進言し、國語學の權威、鶴峰海西は、オランダ語辭典を作つて、水戸藩内の國語講習者に便宜を與へることに力めたほどである。

(三) 藩學弘道館に於ける洋學講究と鑄砲事業

次に烈公が西洋學に於ける長所を活用するために、これが講習について盡力した事實に筆を進めてゆかう。以上に關係ある設備は、すべて水戸の藩校、弘道館のうちに出來たのである。そこには、醫學館、數學館、兵法館、鐵砲館、操練館などが置かれた。醫學館は天保十四年に成就したが、館の側に藥園、養牛場、製藥局などを作つた。藥園には、廣く内外の草木をあつめ、それらを採取して、千金錠、紫金錠、紫雪などの奇藥を製造したのである。

それから養牛場では、毎日、牛乳を絞り取つて、烈公らの飲用に供し、藩士中、病あるものに、これを頒ち與へた。そして、その餘

分を利用して、乾牛酪を搾れた。

當時、烈公は、藩内の士民で天然痘のため苦しむものが多かつたことを憂ひ、何人よりも早く種痘術の必要を認めて、一般に行きわたらせようと思ひかけた。が、まだ古い考へに囚はれて、種痘を嫌ふ風が旺んなので、さうした誤解を一掃するために、先づその世子公子らに種痘し、無害、有效なことを示した。かうして、烈公は、各方面に醫師を派して、すべての士民に種痘を施し、天然痘の流行を防いだのである。

烈公は、また最初、神發流の砲術を弘道館のうちで講習させてゐたが、その強化、擴大を計るため、嘉永五年六月、那珂川沿岸の地に長さ五町、幅三十間の大砲射場を作つた。これを士民らは、五町矢場といつた。このほか、同じ場所に修學所、火藥製造所、講師官舎などを設け、更に一町矢場、小銃射の場、大砲彈藥貯藏倉庫なども作り、それら一切を神勢館と呼んだのである。

かく烈公は、西洋知識の普及と活用とに力

帝都味覺界の嚆矢
若鯉料理
洗きた伊熱海老と
グリルニル
銀座・歌舞伎座前
TEL (57) 3713

を入れたが、その日本を富強第一たらしめようとする念願は、炎のやうに燃えあがつて、各種の新事業となつた。その中でも、烈公は國防上、西洋式の軍艦、大船を急造すべき必要を痛感して、再三、再四、幕府當局の心を動かさうとしたが、大船禁止令のために、容易に實現されなかつた。従つて、鐵砲製造の事業に着手した方が遙かに早かつた。

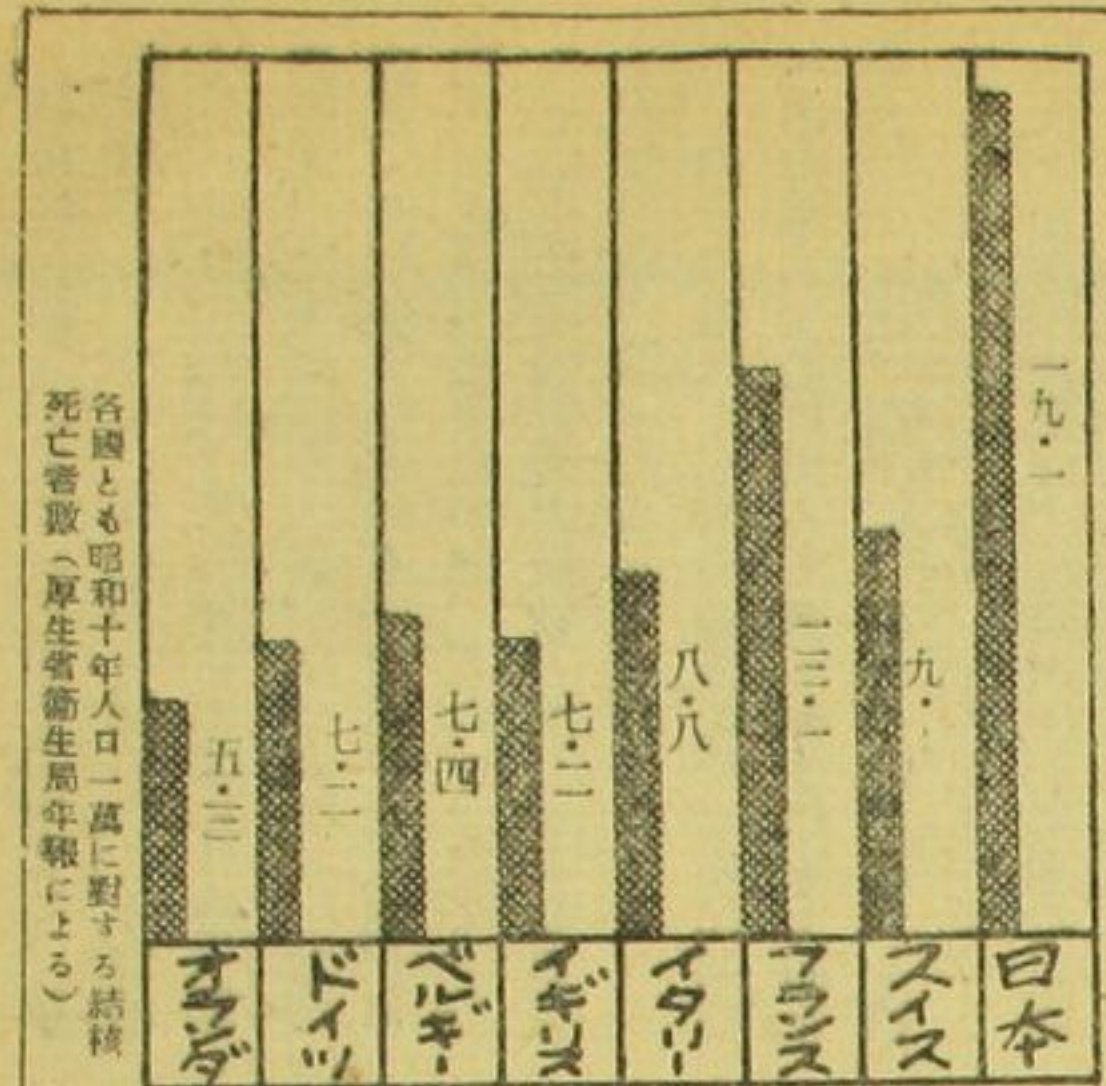
その最初に出來たのは銅砲で、次に出來たのは、鍛鐵砲だつた。それから更に烈公は、一丈二尺もある十貫目長身砲の鑄造をするこゝとなつた。

「こんな大きなものは、自分のやうな馬鹿ものでなくては、到底、作る氣になれん。然し國の飾りにもなる上に、軍艦大船を擊破するには、この位の大砲で、大王を用ゐなくては

入れ、一時の用にあてたが、これでも足りない。
 その際、大島高任は苦心の末、上州甘楽郡小坂村で優れた鐵鑛を發見し、それが磁石性を備へた鐵鑛であるのを知つて、開山の建議をしたが、用ゐられない。止むなく、安政三年八月、かねて藩に願ひ出て置いた南部地方の岩鐵山を開くことに一決した。そこで高任は同地に歸り、まだ誰も試みたことさへない洋式高爐を設けて、多量の柔鐵を作り出した。こんな風に、鐵の使用についても亦豫想以上の困苦を重ねたのである。

その上、最後の大難關を突破しなければならぬ運命が、鋭く工人らの上に迫つた。それは、反射爐で鐵製大砲を鑄込むときの手加減が、ひどく、むづかしかつたからである。この事については、技師らが再度、失敗をした後、いよいよ「三度目には、是非成功せねばならぬ」と思ひつめ、烈公が親しく描いた繪圖面によつて、更に大砲鑄造に當ることとなつた。
 若し、この仕事失敗したならば、今までの苦心努力も空しくなる。それ故、この方面を専ら擔當した竹下矩方をはじめ福井仙吉大工與七の三人は、死を賭して、事に當つた。

豫め領内の檜、樅の類を伐採して、漆の御舟廠に貯へ、また臣下に命じて、軍艦の雛形をも作らせてゐた。當時、烈公は、幕閣を動かして、平素の主張を貫きたいと思ひ、右の雛形を造艦の參考として、幕府に献するに及び、流石に優柔な幕閣でも、到頭、心を動かして、漸く大船製造のことに決定した。それから、間もなく、大船禁止令が撤回されて、海防上一期を劃する時代が來たのである。この際、烈公は、幕府の依頼を受けて、その頃、至難とされた造艦の事を引受け、その主任として、オランダ學者、鐵工時を任用し



た。この重任を荷うた重時は、實際知識を吸収すべく、伊豆戸田浦に赴いて、ロシア人の造船術を見學し、烈公も亦これに力を添へて、家臣を長崎に派した上、オランダ人について、造船法を學修させ、更に侍臣をして米艦を採檢させたりした。然し、中々、思ふやうに仕事が捗取らない。やつと一年半の後に建造を終ると、烈公は、満足の色を浮べた。それは木製の二橋帆船で、船體は堅固に作られ、艦装や、裝飾もよく出來た。が、他に二三の缺點もあつたので、波立つ海上を航行するときは、少なからぬ支障と困難があつ

た。それで厄介丸とさへ呼ばれたが、實際は旭日丸といふ名が附けられた。そのほか、烈公は、小銃を作り、彈藥を製し、大砲には鐵丸を、小銃には鉛丸を用ゐることに定め、大砲一門に各一千發、小銃一挺に各一萬發を備へしめる積りで、工人らに精勵するよう、申渡した。一體、烈公は、機械類に興味を持ち、大早の場合に必要な水揚機「雲霧機」を試作したことがあり、また早間器といつて、早く湯をわかすことの出来る機械を造つたこともある。それから、船中飯たき器の創案を示したこともあつた。

我國が世界有数の結核國である原因として國民の衣食住殊に食物に重大關係があります。歐米人はバター臭いと云はれるほどバターやチーズや肉類の脂肪を攝ることが多く、自然とその中に含まれるウィタミンADを多量に攝取するため皮膚が艶々しく、呼吸器粘膜炎の病菌に對する防壁が平常から強化されて居ます。

日本は有数の結核國

これに反し我々の食物はあつさりし過ぎてADを含む脂肪に缺けてをり。そのため、自衛力が衰へ皮膚が弱く結核菌などに侵され易いからです。食物以外からADを補給するには肝油ハハリバが一ばんです。小豆大の糖衣粒で肝油一盃、バター一ポンドに相當するADを含み、臭くなく一日二―三粒で樂に連用出來ます。



銀十五円二... 百... パリハ

その成否は、一瞬の湯加減一つにかゝつてゐた。
 若し湯加減が少しでも悪く、鑄込みに失敗するならば、彼等は、申わけのため、たぎり立つ熱鐵の湯の中へ一齊に身を投げ入れる覺悟だつた。
 當日、彼等は、いづれも、白釋、白鉢巻、白小袖を着けて、入場した。その蒼白の顔には、歴々と決死の色が浮んで、一種、悲壯、沈痛な空氣が二つの反射爐を中心に漂うた。無心の反射爐は、今渦巻く黒烟を盛んに吐き出し、三日前から火熱した鐵の湯は、爐の

うちで、物すごい音を立て、くらくらとしたきつてゐた。
 「一同、持ち場に著け！」
 嚴かな號令が先づかゝつて、やがて緊張した合圖と共に、二大反射爐の注湯口へ、熱鐵の汁が流し込まれ、雲のやうな湯氣を立てたこの一瞬こそ、三人に取つて、生死の瀬戸際だつた。それを思うて、場内の人々は咳一つせず、手に汗を握つた。中には、油汗を全身に流して、眼を見張り乍ら固くなつた人々もあつた。その結果は、どうであつたか。急に運命は微笑した。

アルゴン

家庭生活に入り痔疾の經驗を覺へる悩みは絶へ難いものです。アルゴンは婦人に多い出血性の痔疾に對し止血、殺菌、消毒、鎮痛の諸作用を具備してをります。

包裝
 軟膏 一〇瓦 二五瓦
 坐藥 一〇瓦 五瓦
 坐藥(小瓶) 五瓦

大日本製藥株式會社
 本店 大阪道頓堀町支店 東京本町
 出張所 盛北・榮町 出張所 札幌・南三條

各地藥店にあり

後に、烈公がオランダ學を應用して、殖興業の上にも、新生面を開いたことを附へて置きたい。既に製鐵・煉瓦製造・製硝子などは述べたが、このほかに、硝子・瓦斯使用などにも手を著けた。水戸に製造所が出来たのは、天保十一年で、藩産出する硫酸質の礬物、燧石などを原料として、硝子鏡・酒盞などを作った。それか烈公の素志——北海道開拓のために同地行する大船に用ゐる管の硝子板をも拵え、これは、幕閣で、烈公の北門經營を許すところから、途中、やめて了つた。

烈公の瓦斯の使用は、大島高任の考案によつはじめ、高任は、常陸多賀郡介川の石炭掘し、反射爐建設當時の燃料とするつもりだ。ところが、炭質がよくないので、を以て瓦斯を作ることとし、安政二年、の職人に命じて作らせた瓦斯機械を据ゑ、介川の石炭を入れて見ると、結果が宜し、それで、實用上の燈火として、この瓦斯を、用ゐられたのである。

(六) 財政上の努力

以上、烈公が水戸藩で、西洋文明を輸入し著々、効果をあげたことを述べた。これについて、烈公の財政上の苦勞も亦中々、大きかつた。反射爐の建設にしても、各種の大砲を鑄造するにしても、また大船、軍艦を作るとしても、少からぬ費用を要する。これがために、烈公は、衣食その他の上に極端と迄思はれる節約をした。「烈公行實」を見ると、「公資性節儉、華飾を喜ばず。朝儀大禮を除くの外、瀚衣饜食し、賓客に供する、饗政、汗飯、鷄卵羹に過ぎず、國にありては、必ず賞布の外、伊賀袴を被る」と記してある。伊賀袴は、俗に「たちつけ」といつて、裾をくくつて、脚絆のやうにした極簡単な質素な袴である。これを平生、天下の副將軍が著けたといふのでも、烈公の節約さが分る。

勿論、烈公は、節約ばかりに力めたのではなく、一方では、製陶・製紙・製茶・林業などによつて、藩の富を増すことにも心を注いだ。これによつて、「大日本史」などの編纂で財政難に陥つた水戸は、少しく立ち直つたといはれた。それに、烈公は、九年間に互つて、幕府から毎年、五千兩宛の補助を受け、また安政元年には、反射爐建設のため、資金として一萬兩を幕府から借り入れたこともある。かうして、烈公は、西洋文明の長所を探り入れて計劃した新事業の費用を支辨してゆ

くため、人知れぬ配慮をした。が、それでも、以上の新事業に従事した技師らを適當に優待するほどの餘裕が存外、なかつたと見える。従つて、反射爐及び鐵製大砲のことに著しい貢獻をした熊田、大島、竹下三士らに向つても、存外、禮儀を支給したにすぎない。然し、三士は、いづれも、名前に淡泊だつたから、些の不平をも持たなかつた。竹下矩方は、鹿兒島でも重用せられた人であるが、水戸へ来てからは、水車場附近の粗末な長屋をあてがはれた。それは、六疊二間に勝手、馬小屋が附いてゐる丈で、夏の日には殊に暑苦しかった。けれども矩方は、これで満足し、自費で、外宅を作つて、補はうとした位である。その上、矩方には、國元に八十に近い母がゐたので、孝心の厚い彼は、寸時も母のことを忘れなかつたが、水戸の國家的事業のために、五年の間、ちつと耐忍し、死を賭して、その任務に全心を傾けた。かうした國士を得たのは、烈公に取つて、大きい幸ひだつたと思ふ。かうして、水戸藩は、尊皇攘夷の中心視せられつゝあるうちに、西洋文明輸入と活用とについて、すばらしく、活潑な機能を働かし來るべき新文明の上に一道の光を投射したのである。

日本映画

集論研映

★ 映畫批評に就て・小林秀雄
★ 映畫法 雜感・館林三喜男
東寶東京・並木鏡太郎監督
樋口一葉
脚色 八住利雄

映畫時評 今日 日出海
風俗時評 大宅 壯一
映畫藝術論・エリイフ・オール
府廳局外批評
映畫是非・渡邊 一夫
最近の映畫・伊藤 整

●シナリオの製作
●シナリオの製作
●シナリオの製作
●シナリオの製作

特輯分科批評
倉田 山根 柳井
村山 演技 銀二 音榮 隆雄
★館林三喜男の印象★
菊池 三好 根岸 植村
寛 十郎 寛一 泰二
▼脚本研究・石川 成二
外畫併優論・檜崎 勤
浅草映畫街・高見 順

「よく出來た」といふ叫びが、期せずして、口から口に傳へられた。人々は、ほつと吐息した。かうして、鐵製大砲は、はじめて思ふ通りものに出來上つたのである。

(五) 造船事業と殖産興業
今一つ、造船の事業についても、苦難のベエジが次から次へひろげられた。大船の必要は、早く義公の時代にも認められ、烈公の時には、歐米が伸ばす侵略の魔手をはねのけるため、どうしても、軍艦、巨船を迅速に作ら

ねばならなかつた。それ故、烈公は、天保五年以來、再三、幕府當局の許可を求めたが、快く受け入れられなかつたのみならず、一時疑ひさへ掛けられた。が、烈公は、これがために、初志を捨てない。殊に水戸領は、東方四十海里の間、すべて海に直面してゐる。いつ、西洋の軍艦から襲撃し來るかも知れない憂ひがあつた。それ故、烈公は海軍政策に特別の力を入れると共に、寝ても、起きて、頭の中は、船のこと一杯になつてゐた。

「事は全日本の運命にかゝる問題だ。これ

がため、一身、一家が、どうならうとも、また幕府からどんな嫌疑を受けようとも、自分は斷じて、國防の目的を全うするために、一日も早く洋式の大船を作らねばならない」烈公は、かう考へて、時の來るのを待つた。それらの日、先づ幕府の眼を醒ましたのは、嘉永六年、米艦が浦賀に姿を現はしたことがある。機は漸く熟しかけて來た。その際、烈公は、海防思想を喚起するために先づ自藩で作つたバツテラ二隻を江戸に廻漕して幕府に上つた。

もうこの頃、烈公は、さへべき情勢を察し

海南島と蘇東坡

工藤 直太郎

蘇東坡が海南島に貶されたのは紹聖元年(一一九一)の時であつた。彼は雷州半島を経て瓊州海峽を渡り、海口海南島の瓊山に着いた。彼の謫居したところは「東坡讀書處」と名づけて今は遺跡となつてゐる。建物は瓦葺の南方支那式の書樓作りで、至つて麗々なもので一寸儼然としたものだ。その後改築になつたものだといふ。毎年七月二十八日の命日を以て「蘇祭」を行ふといふ。瓊山には瓊城がありそこから一里離れて蘇公廟があつて、東坡の石刻遺像がある。蘇公廟に彼の遺像中についた詩詞歌を石刻のものとして傳へてゐる。

「清夜無事、月色銀ノ如シ。酒ヲ斟ム時須ラク十分ヲ滿スベシ。存名浮利。休苦勞神。隙中ノ駒。石中ノ火。夢中ノ身。似タリ。文章ヲ抱クト雖モ開口誰ト観マン。且ツ陶陶トシテ樂ミテ天真ニ取ル。何ノ時ゾ歸去セシ。個ヨリ閑人トナツテ、吾ニ一張ノ琴、一壺ノ酒、一俟ノ雲

アルノミ」とある。

蘇東坡も二十秋萬歳ノ後、誰カ知ラン樂ト辱トヲ。但シ恨ム在世ノ時、飲酒ノ足ルヲ得ザリシコトヲ」と云つて胸中を吐日に吐く。樽中の酒を傾したることなしと傳へられてゐるが、瀟明は失意と不遇とを酒と琴に紛らしてゐた。蘇東坡も海南島に貶された身となつて、飄落の悲哀を琴と酒に託してゐた。

海南島は今日でも大して開けてゐるところではないが、況んや九百年の昔に於ては、人煙稀薄、野蠻未開の密林に蔽はれ、野獸怪鳥の咆哮に委せられたものであつたらう。東坡の居た瓊山縣地方は山野曠蕩、荒草叢々、蠻瘴地方特有の寂しい風物があつた。

宋の簡公嘗て海南島高麗賈秋村を通過して

「北往嘗テ思フ開喜縣。南來伯

ル買秋村ニ入ルコトヲ。區區一相嘗つたが、自分ではたゞ觀て

萬里天涯ノ路。野草荒煙正ニ斷魂」と詠じた。瓊島の山野に妖香鬼氣の漂ふ囂々たる海南島の往時の風物が現はれる。

さて東坡は瓊山に謫居中讀書と詩作に耽つてゐたが、風土に慣れず脚氣に罹つて暫く病臥してゐたと云ふ。一説には開喜を樂しんで光陰を銷してゐたと云ふが、彼は人のやるのを觀るのが好きであつたが、自分ではやらなかつたやうだ。彼の詩「觀菜」に「予ハ菜ヲ解セズ、嘗テ獨リ瓊山ノ白鶴觀ニ遊ブ、觀中ノ人皆觀シテ驚歎ス、跡リ菜盤ヲ古松流水ノ間ニ開ク、意之ヲ喜ビ自ラ學バント欲ス、然カモ終ニ解セザル也。居士造ハカテ相ボ能スル者ナリ。傳守 張中、日之ニ從テ觀ル、予モ亦偶坐シテ竟日以テ觀ヲ爲サズ」と云つてゐる。愛菜の過は

相嘗つたが、自分ではたゞ觀て

海南島には熱帯地特有の美果香木が叢生する。荔枝、龍眼肉、檳榔、鳳梨、其他色々な果物が豊富である。荔枝は昔から百果の王とされた。荔枝は福建廣東兩省と四川にも産して、楊貴妃が特に好んだので、玄宗は人を急派して之を蜀(四川)から洛陽に運ばせて官妃の嗜好に投じたといふ。

東坡が蜀即ち四川省眉山縣の産であつたので、子供の時から荔枝を好んだ。海南島に来てからは、毎日酒を飲んで悶々の情を遣つてゐたが、酒の好下物はこの荔枝であつた。彼の詩にも「日ニ荔枝三百顆を啖ヘハ長ヘニ瀾南ノ人トナルモ許セズ」と云つてゐる位だから荔枝を十分食へることが出来れば、このまゝ永久に海南島で暮すことも悪くないと思つたのかも知れない。(終)



母乳代用によい粉乳
森永ドライミルク

幸福なりし數寄者

赤堀 又次郎

此の世は苦と患の世界と云ふ。更に大きく云つては三界は安きこと無し。なほ火宅の如しとか云つてある。其中に人間と生れて、僅に五十年の短き間の生命を、苦患の中に終るは普通である。たま／＼好運に生れあはせては、己の好むことに専ら従つて、楽しく送るも無いではない。しかし夫れは稀なことである。茶道の祖と云はれる足利義政も、今より願ふと幸福であつたとは思はれない。又千宗易、即ち利久居士は、茶道の中興として其子孫、門弟の後も長く榮えてはゐるが、彼の運命は幸福とは残念ながら云へなかつた。怨を傳へた木像は、今も寂しく大徳寺の門の上にある。近頃致くなられた益田孝男は、數寄者として珍しくも幸福の人であつた。先づ第一に年徳。九十二歳。古今の數寄者と云はれたものは多いが、これだけの天壽を受け得たものは殆ど聞かぬ。之は人力を超越した幸福。

第二には金徳。天壽のことは別として、現代資本主義の世界に於て金徳を受け得た人は極めて多い。夫れに人徳をも合せ有つた人は甚少い。生きて居ては八方美人、十六方美人と云はれるほどの人徳のあつたものでも、死んでしまふと、がらりと人氣の無くなるのが多い。書畫にしても書いた人の生前と死後とで異なるが普通。益田男が無形のこととは別として、

有形の徳業を遺されたのは珍しい。

第三人徳。人徳と云ふことは、具體的には一寸現はしにくいことであるが、其華族、男爵となられたので徳望の高かつたことが察しられる。主人の三井家にしても同じく男爵である。官界に終身忠勤を抽でて其處まで昇るには容易ではない。勳功と共に徳望が無くてはならぬ。

佐渡の土。『有馬よりいつち善くきく佐渡の土』と云ふ川柳がある。益田男は佐渡の人、其土の中に金徳を握つて生れられたのである。幕末の佐渡奉行に鈴木重嶺と云ふ人があつた。生きながら神様に祀り上げられたと云ふ高德の人であつた。明治元年の瓦解後は東京へ歸り、歌の代作、代添作を業として終られた。

自ら其生神様の徳に益田男は感ぜられてゐたのであらうが、それと當人も氣が付かなかんであらう。益田男は佐渡から東京へ來て英語を學び、之をよく應用せられた。高商の名校長矢野の兄弟富永冬樹と云ふのがあつて、同じ英語仲間。横濱にてドル相場をやつてゐたが、金徳が既に現れて益田男は毎々巨利を獲た。之を知つた東京日々新聞社の福地源一郎が三井へ推薦して、それから運命が向いてきたのである。其頃は正金銀行も無く、小判が盛に流出した頃であつた。其頃横濱に榮えた人は、今は少い。

御殿山。應舉館。益田男の異名を世間では御殿山と云つた。其本邸の所在から云つたのである。其座敷は京都の某家のものを移されたのであるが、襖障子の張付が應舉の名畫である。故に之を應舉館と云はれた。晩年に其地所と共に、保

森永製菓

存費をも添へて帝室博物館へ寄附せられた。之にて遺徳が永く傳へられることゝなつた。因に云ふ。此地に將軍家の御殿があつた故に此名が呼ばれた。塙檢校の群書類従の版木も此山にあつたことは、石原正明の年々隨筆に見えて、寂しかつた由が書いてある。自分は其舊地を知らぬ。

星ヶ岡茶寮。今の日枝神社の境内は昔永田馬場と云つた所。神社の名は、もと山王權現と云つた。其御境内に此の茶寮は設けられ、松田宗匠を招きてさび、わびの味をたゞよはされた。正に東京に於ける茶道中興の本山たるは勿論であるが、資本家益田男を參謀總長として、主義戰鬪の策略を此處にてめぐらされて、今日の國際的取引もみな此處から、爐の釜の涌き上るが如くに涌き上りて、現今の盛大をなすに至つた。上方では茶の湯の事を貧乏神のお湯立と云ふが、東京にては福の神のお湯立であつて、山王様は日本第一の福の神たることが、事實上に示されてゐる。

更に明治初年をかへり見ると、

幸福なりし數寄者

御遷座。しかし之が今日では天下第一の銘を打たれやうとは何人も見とほしがつかかなかつた。まして參拾萬圓と正札がつ

て露を飲み、霞を吸ふが如く、仙人の境界に入られて、浮世の苦患を忘れられたは即ち天命を感ぜられたのであらう。近傍には山縣公や松下將軍の別莊もあつた。松下は正宗と名に負つた位にて、近づくものは皆怪我した。山縣、桂の大將組も切りまくられた。益田男に對しては切込む隙間が無かつた。最後に水攻の戰略をめぐらしたが勝つ事ができなかつた。益田男の聰明で有つた事が感ぜられる。

白描の兩界曼茶羅。もと仁和寺所藏の兼意筆。弘法大師百年忌に將來のものを寫されたもの、我國所傳の兩界の中にて最も鮮かなるものとして有名。一日青木信宣氏の藏となつてゐたもの。

紫綾の兩界曼茶羅。之も仁和寺の藏にて、やはり青木氏にあつたもの。

座右の銘。弘法大師筆。もと高野山藏。狩野探幽が、高野山に畫を描きし時に畫料の代りに其中の數字を申受けて替へる。夫れが益田男の手に入つた。かやうなことが原となつて

一七 雲華上人詩書

卜得花と妙身あ計ふ
 此良同冬月句久庫際
 斜暉 己酉四月

(紙本竪四尺一寸巾一尺六寸九分)

二四 中林梧竹書

蜀郡太守平陵侯君遣孫臨
 文用功午一百九十一日建武中
 元二年六月

(紙本竪五尺九寸五分巾一尺五寸八分)

大雅と安永檢校

存費をも添へて帝室博物館へ寄附せられた。之にて遺徳が永く傳へられることゝなつた。因に云ふ。此地に將軍家の御殿があつた故に此名が呼ばれた。塙檢校の群書類従の版木も此山にあつたことは、石原正明の年々隨筆に見えて、寂しかつた由が書いてある。自分は其舊地を知らぬ。

星ヶ岡茶寮。今の日枝神社の境内は昔永田馬場と云つた所。神社の名は、もと山王權現と云つた。其御境内に此の茶寮は設けられ、松田宗匠を招きてさび、わびの味をたゞよはされた。正に東京に於ける茶道中興の本山たるは勿論であるが、資本家益田男を參謀總長として、主義戰鬪の策略を此處にてめぐらされて、今日の國際的取引もみな此處から、爐の釜の涌き上るが如くに涌き上りて、現今の盛大をなすに至つた。上方では茶の湯の事を貧乏神のお湯立と云ふが、東京にては福の神のお湯立であつて、山王様は日本第一の福の神たることが、事實上に示されてゐる。

更に明治初年をかへり見ると、昨日のお江戸を來て見れば、今日は東京と變りける、朝日は高く昇れども

秋風寒く身にはしむ。

かゝる中に應舉館や茶寮が出來たので、天下を驚し、福の神の恵にあづからむと、參詣者が多くなつた。箱根山の別荘。既に御殿山、星ヶ岡の經營を終り、更に地を選びて箱根山に廣大な自然を愛されることになる。晩年は此處にて暮された。昨日までの二天作の煩しさに引きかへ

幸福なりし數寄者

て露を飲み、霞を吸ふが如く、仙人の境界に入られて、浮世の苦患を忘れられたは即ち天命を感じられたのであらう。近傍には山縣公や松下將軍の別荘もあつた。松下は正宗と名に負つた位にて、近づくものは皆怪我した。山縣、桂の大將組も切りまくられた。益田男に對しては切込む隙間が無かつた。最後に水攻の戦略をめぐらしたのが勝つ事ができなかつた。益田男の聰明で有つた事が感ぜられる。

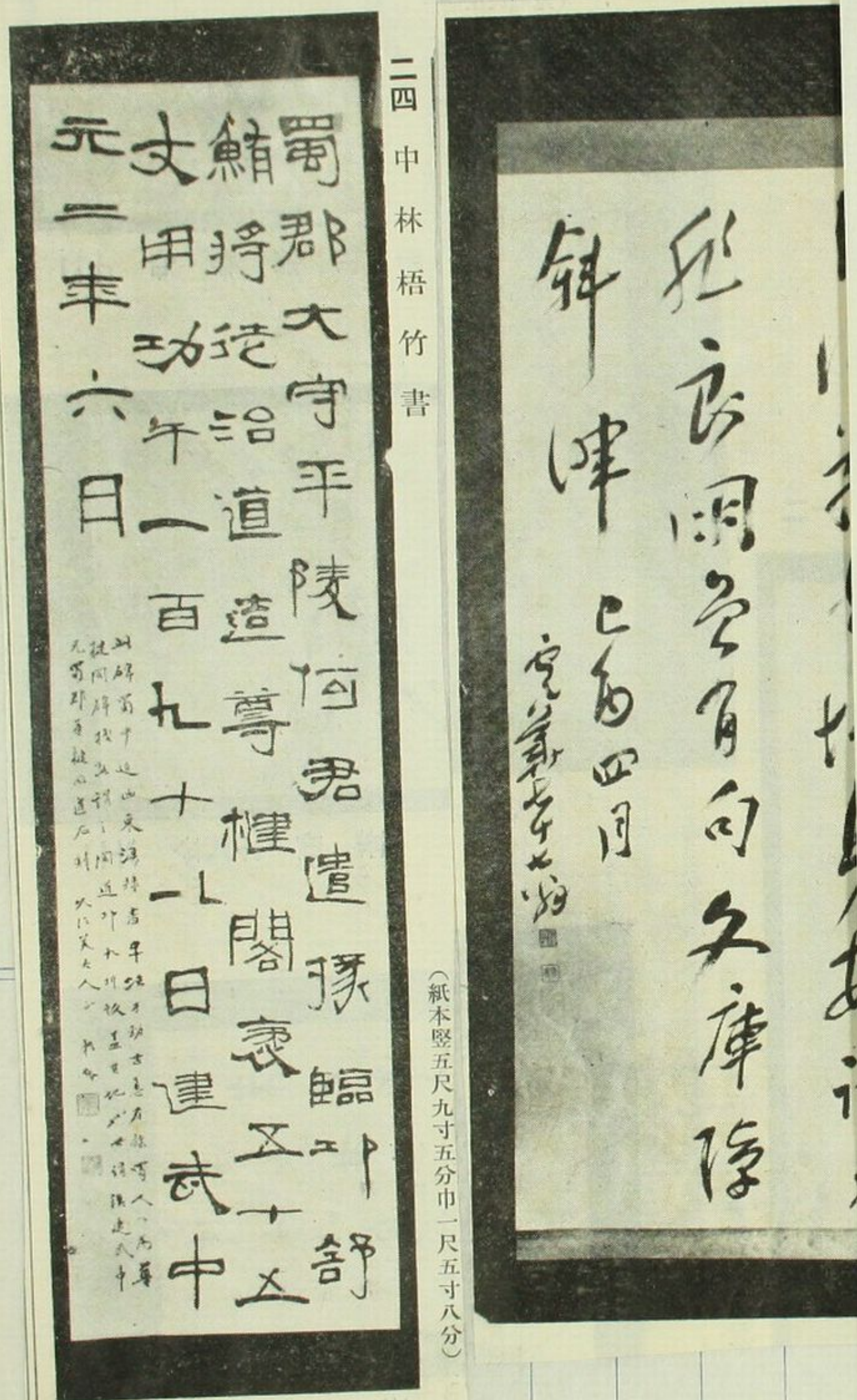
自描の兩界曼茶羅。もと仁和寺所藏の兼意筆。弘法大師百年忌に將來のものを寫されたもの、我國所傳の兩界の中にて最も鮮かなるものとして有名。一旦青木信宣氏の藏となつてゐたもの。

紫綾の兩界曼茶羅。之も仁和寺の藏にて、やはり青木氏にあつたもの。

座右の銘。弘法大師筆。もと高野山藏。狩野探幽が、高野山に畫を描きし時に畫料の代りに其中の數字を申受けて替へる。夫れが益田男の手に入つた。かやうなことが原となつて大師會と云ふこと毎年催されることになつた。今では其事業を音羽の護國寺にて行はれることになつた。藝術觀賞の會である。

十一面觀音畫像。民間にあるものとしては天下第一の名畫。もと大和の松尾寺に拜まれて居たが知事の古澤滋が見つけ、懇請して金百圓を與へて持ち出し、直接井上馨侯に贈る。侯は、不動尊の如き顔を辨才天の如くして大満悦。早速、益田男を召される。男、これはくゝの連發。御前の御目鏡には恐れ入りますを更に連發した末に參萬圓を奉納して御殿山に

二四 中 林 梧 竹 書



(紙本 縦五尺九寸五分 巾一尺五寸八分)

御遷座。しかし之が今日では天下第一の銘を打たれやうとは何人も見とほしがつかなかつた。まして參拾萬圓と正札がつかうとは益田男自身も考へられなかつたことである。

三十六歌仙の模造。其昔に勅命を以て本願寺に賜はつたものであるが、年久しくて忘れられてゐたを、光尊上人の歌道の師、大口鯛二氏が再び世に紹介された。研究の爲に拜借して東京へ運ばれた。益田男も拜見して深く感服し、寺の許可を得て、全部を模造せられた。此時は只數寄の一事に過ぎなかつた。

其後に寺の原本は、國寶に指定せられたが、乍残念其時には既に原本の二帖は紛失してしまつて無かつた。原本の姿を、今日に於て見られるは、只其模造の本のみ、豫期せられないではないが、益田男の遺徳の一つとなつた。他にかやうなことをした人はないので、遺徳のほどが察せられる。尋常の數寄者では無かつた。

益田男とは、自分は全く一面の識も無かつた。其數々の名品の一つをも拜見したことはない。世に高い風聞の中の小耳に残つたものを茲にしるすに過ぎぬ。夫れに付けて猶思ふに、世の書畫を樂しむ人、骨董を愛する人々よ。希くば男にあやかれ。いたづらに我一身の慾にふけること無くして廣く世と樂みを同じくし、人と悅を共にせよ。乃至老年に至りて死慾に迷はさるゝなかれ。自ら省てよく培養して、年徳をも、金徳をも、はたまた人徳をも成就せよ。かくして國恩の萬が一をも報いませつれ。

藝文史話

大雅と安永檢校

大雅は若い時、非常に三絃を好んだ。斯うした結果は當時の名人安永檢校の隣家に移つて、その妙音を聴くのを無上の楽しみとした。

或日のこと、大雅は檢校を訪づれて事情を語り、是非一曲をと懇望した。檢校はその熱心なのに感心して、『それではお聴かせいたさう。』

と、快く傍らの三絃を取り上げて一曲を奏した。ところが生憎その三絃の裏皮が破れてゐたので、大雅は、『ほかの破れないので、今一曲お願ひ出来ませうまいか。』

と頼むと、檢校は大雅に何を業としてゐるかと問ひ、その畫家であることを知ると、

『ハ、ア、繪かきにしても餘りお上手の方ではござらぬな。』

といふ。大雅は盲人のくせに生意氣など、一寸癢に觸らざるを得なかつた。そこで、

『貴方は繪の上手下手がどうしてお判りになります。』

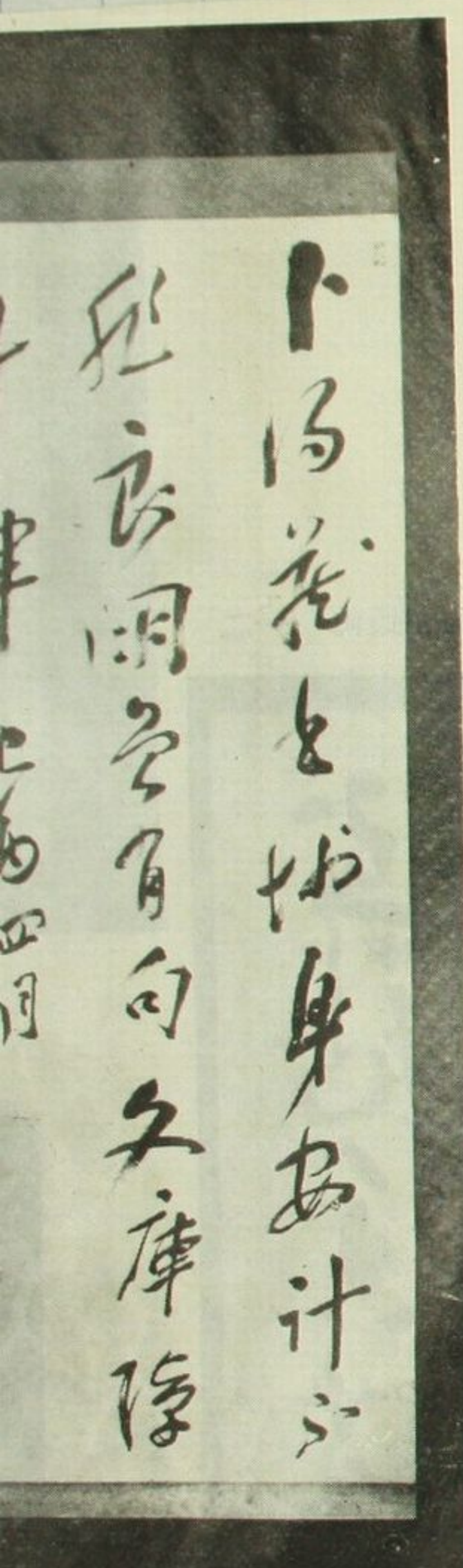
と問ふと、檢校は笑ひながら、

『裏皮の破れたので弾いたのを、不満に思ふやうな聴きやうではさうと思はれぬ。三絃は右手に撥を持つから、右手で弾くのは元よりであるが、と云つて左手に精神が籠らなければ、決してその妙を發揮することの出来るものではない。私の左手の精神がお耳に入らぬところからすると、繪も亦右手でゑがくものだといふことだけを知つて、左手、否、全てに精神が満ち溢れてゐなければならぬといふことをごぞんじないと思はれぬからである。』

と云つた。正に達人の至言である。流石は大雅だ。此の一言にはなるほど深く感動せずにはをられなかつた。以來、心機一轉、更に畫道に精進をつゞけるに至つたといふ。

(裕亭生)

(紙本 竪四尺一寸巾 一尺六寸九分)





集古

昭和十四年一月發行

一勇齋國芳の話

—若樹漫筆から—

竹内久一氏曰、國芳といふ人は面白い人だつたネ、丸で豊國とは意氣が合はない、例へば書畫會へ出て人から先生一枚願ひ升なんかといやア、ワツチャー未だ先生ニヤアなりやせん、先生ていふナア、ネソラあすこの隅に居る被布を着た人（豊國を指して）サといふ挨拶だから、其弟子も同じくベランメイ計り。然し師弟の情誼といふものは至極厚かつた、師匠も弟子を愛せば弟子も師匠を慕つた、學問は無いが頭は中々善いし能く人を知る明があつて一とかどの人物さ。國芳の卅三回忌に向島に碑を建てた時、芳虎が師匠の名をだしにして自分計り旨い汁を吸ふケンカラン奴だといふので、到頭除名して石には名は載せなかつた位、死んでからも皆ソナ師匠を大事にして居た。ソナ風で人物が好いので、弟子も各其特長を發揮した工夫の旨い所は芳藤の玩具繪になるし。武者繪や筆意は芳宗が傳へるし。鐵砲の巢口や刀を眞直に見たとこを畫くといふ風は芳年に傳はるし。一筆がきや一寸思ひきは親父（久一氏父）芳兼に傳はつた様に、種々様々に其風を傳へて行つた。一體玩具繪といふのは繪かきの内職で、閑の時にかいといて繪双紙屋へ買つて貰ふものだから、芳藤は此方に善い頭を持つてゐて、色ざ

しが旨く畫面にむだの無い様にかくのが名人だつたので、遂におもちや繪で成功した。板下の安いので賣り出した所謂數でこなしたの芳虎はだ、玩具繪一枚の板下が其頃の相場で五百から一朱迄であつた。

前いふ通り豊國とは肌が合はないので始終暗闘を續けてゐた、それは豊國と國芳の錦繪を對照すれば能く其消息が判る。或年廣重が二人の仲を直した際に、三人合作の東海道五十三次の錦繪を出した、廣重は景色には獨得の技倆があつたが、人物は凡て國芳の筆意を模してゐた。國芳は工夫に長じてゐた、私の親父は同じく國芳の弟子で芳兼といつたが、師匠を一つ困らしてやらうと、附地口に釘抜きを持つて行つたら、即座に手に持つ方の二本を足に見立て、足長島にしてつた、さういふ風で堀江町の附地口は終始國芳にきまつてゐた。繪かきの収入といへば板下や地口行燈等であるが、吉原の燈籠は一種の廣告故これは身錢を切つて畫いたものだ。それで浮世繪師は凡て繪かきと言つて、繪かきといへば浮世繪師を指したもので、本繪の方は繪師といつた、又粉本は種（タネ）の名でとほつてゐた。

弟子の中で師匠から、さんづけにされるのは松さん（芳宗現在の人にはあらず）と兼さん（久一氏父）計り、二人共重く用ひられてゐた。一體師匠から名を貰ふには二朱宛もつて行つたものだが、私の親父計りは只で貰つた、それに就て面白い話がある（若樹曰話は先年筆記し置けば略す）。

國芳同門は皆ベランメイ連中計りなので、名を呼ぶにも綽名で呼んでゐた、芳年は綽名をドブムといつた。師匠の國芳はヒラ〜といふ號を奉つてゐた、これは顔が平つたいから出たので、師匠の不男なのは自分自身でも能く承知してゐて、或年國芳模様とかいふ題で、御祭の三枚つゞきを出したが、中は國芳の弟子連中をかいであつたが、師匠計りは後向きにしてあつた、いつも國芳自身をかくときは後を向いたり、或は紙を飛ばして顔の半面をかくしたりしてゐる。其頃狂歌師で梅の屋鶴子といふ人があつたが、これは長谷川町の待合茶屋の主人で、此人が國芳の爲めには顧問になつて盡力したので、繪の方も又種の計畫も、此人の采配になつたのだから、此梅の屋の文臺披露を万八樓で開いた時は、國芳も一肌ぬいで弟子と揃の縮緬の浴衣で出席したといふ話である。

國芳の弟子でネ狂名を「をかしかわらへ」といふ加州のかけつけの仕事師があつたが、此人は金が無いといふので、加賀鳶

の半纏をひっかけ、此會へ出て異彩を放つたといふ事もある。或時此人が日本橋長谷川町俚俗玄治店の國芳の近火へ火消しに駆けつけると、途中でハツタと師匠に遇つた、すると師匠がどこ迄焼けたといふから、今和田平に火がついたといふと、國芳は此混雜の中で「和田平が悪くばあやまりませう」と洒落のめす、何んだ、こんな中で洒落所じやアネへといつて怒つたといふのでも、國芳の資性の一斑が知れる、此火事には國芳の家も焼けた。

晩年に國芳は向島に引こして汁粉屋を出したが、これは一寸の間だ、朝櫻樓とつけたのは其時からだ。死んだ時は矢ッ張長谷川町に戻つてからと思ふ。國芳の弟子の芳年此人は旨いには旨いが頭は無い人で、人間は極くつまらぬ男で、所謂時代の流れに乗つた人だから、一生の中に筆が幾度變化したか知れない、つまり一生を修業に終つて、未だ自分といふものを大成しずに死んで仕舞つた。此の芳年のうり出し頃の武者繪、維新少し前の價は一枚八十文より百文、三枚續二百五十文が相場で、三百文といふのは稀であつた。それから浮世繪師即ち彼等が仲間といふ「繪かき」の中の仕事も、前にいふ玩具繪武者繪美人繪其他に、風繪や又さしこ絆纏の繪や、一風違つて文身(ほりもの)の繪をかいたものだ、此ほりものが面白いや、ゑかきがぶつ、けに背中に筆をとる(鈔者云文身談省略)一度國芳がほりものでしくじつたことがある、兩國の仕事師に頼まれて頸の所に一匹の蜘蛛をかい、それから肩から脊へかけて巢をかけた所の圖だ、すると其お袋が怒るまいことか縁起でもネエッてんで國芳の所へどなりこんだ、其時ア國芳も平あやまりにあやまつたといふことサ。

文身をしない奴は無地と言つて其仲間じやア輕蔑したものサ、然し身體にやア昔から毒だといつて、しまひにやアきつとよいゝゝになるとさへいつた、だから國芳と私の親爺はほりものはしなかつたが、晩年に國芳は中氣になつたので、弟子中じや皆ンナ不審をして師匠はほりものはほらぬし中氣になる譯はネエ、こりやきつとあんまり人にほりものをつけてやつた罰ぢだらう、といふことに決めて了つたのも大笑ひサ。

前に咄した錦繪の事だが、師匠は墨がきだけの版下をかい、それが彫上つて校合が済むと、其あとの色ざしは弟子の仕事になつてゐた、弟子の芳藤といふのが此色ざしが旨かつた、銘々得意の色があつて、芳員は好んで代赭を使ふといふ風で、其墨刷へ朱で色のつくところ丈けを塗つて、其紙のはしに赤なら赤、黄なら黄と墨でかきつけて廻すと、板木屋はかまはず彫つ

て了つて、其板へ黄なら黄と書いて摺師の方へ廻す、すると摺師の方でケントウをつけて摺るのだ、摺師の方で色をぼかすには板ぼかし(又とくさぼかしともいふ)ふきぼかし等がある。ふきぼかしといふのは、一旦色をつけた上をぬれ雜巾でスツと軽く拭き取つて摺る、いゝ按排にぼかしになる。板ぼかしといふのはトクサで其處を少し磨いて置いて摺るので、トクサをかけるのは版木師の仕事でなく、摺師の方の領分になつてゐる。それから浮世繪師即ち繪かきの方では、下圖をつけるのに決して本繪の様に焼筆をつかはない、朱筆で圖をつけて其上を墨でかいて了ふので、今でも其やりかただ。清三郎鈔

塵の中から百萬圓 國寶を掘り出す

師弟の協力實を結ぶ



古文書を手を喜ぶ池田助教授(右)と萩谷君

重要な一國文目録の努力とこれを援ける助教授との美しい協力により、近衛家文庫から京都帝大圖書部に寄託、経書に紛れて長年塵に埋もれていた國寶級の平安朝時代歌合巻が大量に見られ、國文學上稀有の文獻として學界に大きな感動を興へてゐる、東京帝大文學部國文學助教授池田龜藏氏に師事して國文學の研究を續けてゐる東大國文學二年生萩谷君(左)は、昨夏以来學課の余暇を京大圖書部に通つて古文書を片づつ唯から通讀して行くうち、經書の中に近衛公爵家から寄託され塵芥に埋もれてゐる古文書を見、その一部を書寫して池田助教授に鑑定を乞ふと、この塵にまみれた古文書こそ、今から約九百年前平安朝時代の國寶級の歌合巻本である事が判明、早速池田助教授から近衛家へ報告され、同助教授はこの文獻に關する研究論文を執筆、近く學界に發表すると共に、文部省に對して國寶指定申請の手續きを執る事になつた

「歌合巻」の全書揃ふ

池田助教授によつて折紙つ

けられた古文獻は、國寶「傳示尊親王歌合巻」第一巻に巻第五卷第七の「歌合」と「古今並に類聚歌合巻全二十卷」の長さにして全三百尺に及ぶ文獻で、國寶「傳示尊親王歌合巻」の方は既に國寶に指定され、全十巻のうち前五巻は前田侯爵家、他の一巻は近衛家、その他は殘欠斷破となつて東京帝大圖書部に收藏されて居り、今回の発見によつて全巻が揃ふと同時に、これによつてその完成事情や原形内容等の全貌が詳細明白となつたものである

「古今並に類聚歌合巻」の方は、今まで全く學界から知られてゐなかつたもので、僅かにその断片が「二條切柏木切」等と呼ばれて

零細な一片の古文書に數千金を投じて諸家に珍藏されてゐた

近衛家でもこんな寶物のある事をすつかり知り、時價百萬圓以上との珍奇な古文書も全く世に知られず塵に埋もれて長い睡りを醒めてゐたわけである、この二十巻本の発見が國文學研究の上で興へる文獻的價値は非常に大きなものであると言はれてゐる「塵中納言物語」の姫きも従来は鎌倉時代に不

功を譲り合ふ

本願寺三十六人集に優る

豊島區長崎町三ノ四〇四二の自邸で池田助教授は證する、實に大層なものが出て來ました貴重扱ひもせず全く塵にまみれてゐたのですから驚くに堪へたものです、今回の発見はかの國寶「本願寺三十六人集」の発見にも優るものといへませう

萩谷君は浪速高校の出身、國文學部山本氏の薫陶に當る若き國文學

「小式部」なる女性の手で書かれたものである事が判明「歌氏物語」の長篇と並んでかゝる立派な短篇が既にその當時から存在した事が立證されるなど、色々な意味での書の発見による功績は大きい

の研究者、休庵で郷里へ歸省中、大阪から歸京したばかりの七日夜、池田助教授宅で證する

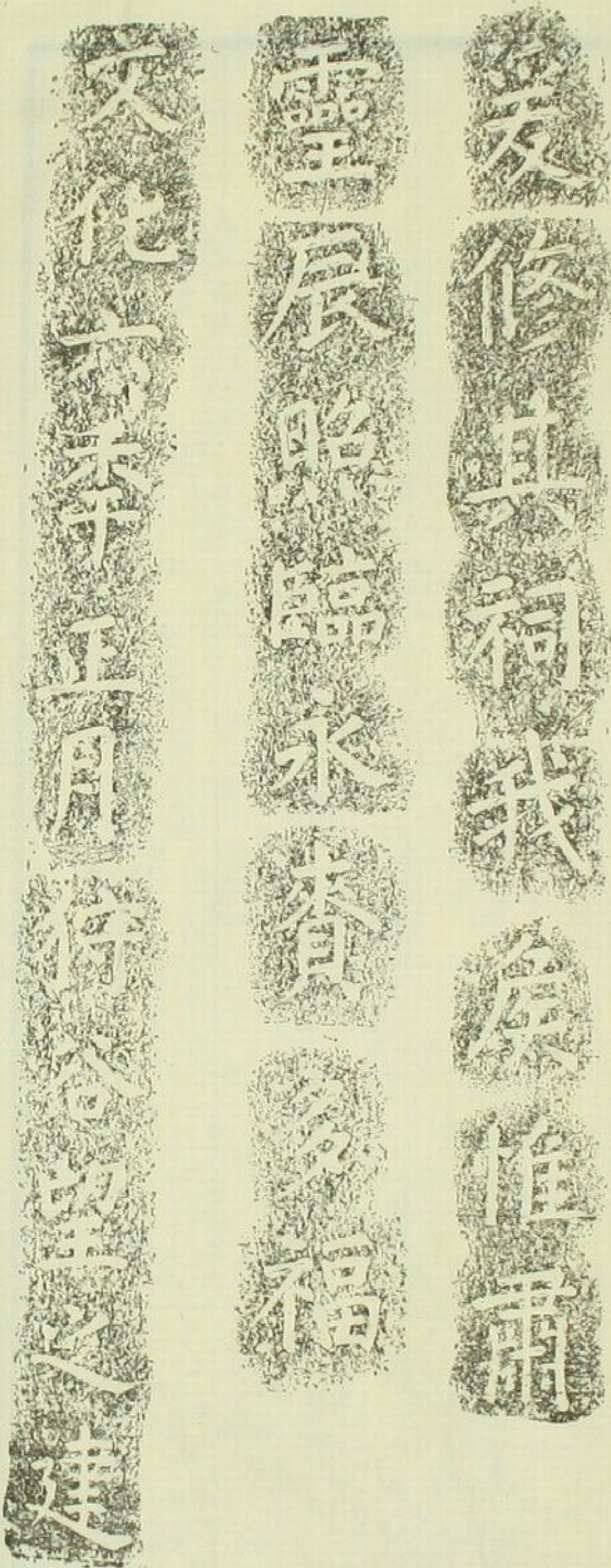
池田先生に色々貴重な文獻を借りて讀んだ勉強が効を奏して運良くあつた大物によつてつたつた譯でした、僕の発見といふよりは先生の指導に依る賜です、平安朝時代歌合研究の資料に乏しい國文學研究者にとつてはたしかに大きな喜びです

青森に於る椛齋寄進の鳥居

森山泰太郎

青森の市街を歩いての印象は、家並の低い黒ずんだトタン屋根が並び、しろくとした銀行や商店の建物を區切る空虚な町角一つ曲れば、すぐ室蘭と函館の二航路に向ふ連絡船が白波を残して行く寒々とした真青い津輕の海に向かひひそな気がする落着かない、わびしいところで、南からの旅人が

トランクを提げて、物珍らしげに小蒸氣船や傳馬船の煙に足を止めて、北國風物に眼をみはる光景にすら旅情の淋しさをかきたてる程の街である。そして町人が形成した歴史につながる文化のさびしさを泌々と想はせる街である。津輕氏十萬石の城下弘前よりは、江戸の新しい力にみちた經濟的な情勢と雰圍氣とに接したことが多かつたけれども、維新この方廢藩置縣といふ變革を轉換期として、今日我々が封建時代の青森文化を振り返る時いかにも傳統が淺く、情緒の重厚性に於て乏しいところがあるのを感じるのには止むを得ない。



それでもこゝ外ヶ濱一帯は、田村鷹將軍遠征の遺跡、また異聞義經物語、謡曲善知鳥、錦木、歌枕では壺の碑、野田の玉川など東北特有の奇怪な美しい傳説を持つてゐる。

こうしたところに、狩谷椛齋寄進建立の鳥居が現存してゐるといふ事は、識者の感興を湧かすに十分であらうと思ふ。青森市の南郊一里半、近年では驛前から十和田湖への觀光客を運ぶ省營バスに便乗して約二十五分、東津輕郡楢内村に大屋神社がある。通稱妙見堂と云はれてゐるが、天御中主尊を祭り、郷社ではあるけれども由緒最も古く、延暦十年桓武天皇蝦夷鎮護として同郡東嶽に勸請したるを、後田村鷹將軍東夷征伐の時結構を宏大にする爲今の地に遷座されたと傳へ降つて舊藩時代には津輕氏が更に造營して藩の祈願所となし社領玄米八石を附せられたと云ふ。

参道は雜草が茂り、曲折した數町の小徑がつゞいて靜寂森嚴そのものである。境内には多數の船舶の繪馬や、大坂石工の名が見える石橋など、青森の盛んなりし海運時代を偲ばせる資料として面白い、椛齋の大鳥居は丈餘の花崗岩で、往還の街道の傍、社の参道入口に亭立してゐるものである。鳥居の内側には穩かな大字で次の刻字がある。

爰修其祠我侯惟肅靈辰照臨永資多福
左の柱に(一行)

文化六年正月 狩谷望之建

私がこの鳥居を知り得たのは、鶴見の木村繁四郎先生(元横濱第一中學校長)の御垂教によるもので、同先生が昭和十年五月七日青森に赴かれた折偶然に矚目せられたものであつた。私は昨十二年六月十九日恰も弘前に歸省の際、青森郷土會の種市、今村、肴倉三氏と共に訪ねて、今更ながら偶然ではないかとさへ思つた。あまりにも意外な所に於て、あまりにも意外なものを見たものである。私は尊さと、喜びと、名狀し難い感情と感激とで暫し青草原に坐つてゐた。私の眼には青々たる津輕の夏山も霞んでしか見えなかつた。そして青森の市街を越えて間斷なく遙か沖合から吹きよせる潮風に苦心して、梯子の上から辛うじて拓したのがこの寫眞に見える拓本である。

社務所を訪ねたが折悪しく神主は青森に出かけて不在だつたけれど、この鳥居に關する文獻資料がないと聞かされた。しかし大正十四年九月二十九日附「東奥日報」紙上に「妙見堂神社の石鳥居」と題して關榮太郎氏(元東京高等師範學校地理科教授、故人)の談話が記載されてゐることをその時知

右の柱に(一行)

つた。同氏も偶然に見出されたものゝ如くである。この時ま
で恐らくは古今津輕の郷土史家のうち、一人としてこの鳥居
を世に紹介したことはなかつた。私は同氏に次で之の一文を
認め得たことを喜ぶ。なほ枚齋に就てこゝには記す必要はな
い。また津輕家と狩谷氏の關係に於ても世上若干の紹介はな
されてゐるが、大正十年一月發行の本誌に「弘前に於ける狩
谷氏の建碑」と題した木村捨三氏の御發表を併讀せらるれば
這般の消息や、引いては本論に於て私の淺學足らざる所をも
補はれることと思ふ。(十三・九二・於東京大久保法禪寺畔)

葦の假菴藏書

朝ゆふあしりしこもたねあはれ
あがへんせむとくかへりてよ
喚たねあはれとくかへりてよ
よんりささくの糸巾をるかゆえ

二三 齋藤 彦 磨

荻野氏、後興齋藤氏、初稱庄九郎改
小太郎智明更稱彦六郎彦磨字可憐、
號宮川舍、苜假庵、明和五戊子正月
五日生三河矢作、從學加茂季鷹伊勢
貞丈本居宣長同大平等仕石見濱田松
平家住江戶築地、安政元年甲寅三月
十二日歿、享年八十七、葬麻布今井
町法音寺、法名義岳了忠、

軍部懇請により
近衛公翻意す

無任所大臣に就任

四日夜平沼男から無任所大臣とし
て入閣交渉を受けた近衛公は五日
に参り木戸侯を通じてこれを拒絶し
たが、その後同日午後二時板垣陸
相が近衛の別邸に近衛公を訪問軍
部一致の意見として強硬に無任所
大臣就任方を懇請した結果近衛公
も遂に意を解し、若慮を約して會
見を終り、懇請の結果就任を認す
るに決意しこの旨平沼男と板垣陸
相に通達した、依つて平沼首相は
樞密院議長の親任式後近衛樞密院
議長を無任所大臣に勅命を下さう

無任所大臣とは

前例三つ・特殊の場合

無任所大臣とは各省大臣のやうに
自分の受持の省をもたない大臣で
ある、言葉をかへていへば首相も
各省大臣も國務大臣としてすべて
の政治に共同の責任をもつてゐる
が同時に自分の受持つ官廳の長官
であるのに反して無任所大臣は單
に國務大臣で自分の受持つ官廳は

(代時戸江) 形髮ノ嫁ノ家町姿着晴ノ女京



臣にすることは法制上の理前か
ら出来ないものである、それは官
等優給令といふ一本の勅令があ
つて官吏はすべてこの中に列擧
されてをり、もし内閣官制第十
條によつて國務大臣に列せられ
た場合は特にそのものゝために
この官等優給令を改正したりそ
の他いろいろの手續をとりかね
ばならぬ、その他法制上の意義
もいろいろ生ずるといふわけで
これまで歴代内閣中では閣僚の
数をふやすため無任所大臣を置
かうと企てた例もあつたが以上
のやうな關係から樞密院方面の
反對も多く實現を見なかつた
無任所大臣の前例として擧げられ
るものは三つあり、それはすべて

特殊な例で次の通りである
一、明治廿一年第一次伊藤内閣
の末期樞密院が設置され設置の
直後に伊藤内閣が更迭したが伊
藤博文公は新設された樞密院の
議長となると同時に後藤内閣
(西田清内閣)に特に列せしめ
らるゝ恩命を蒙つて政府、樞密
院の双方に勢威をふるつた
一、第四次伊藤内閣が明治卅三
年十月崩壊する時伊藤首相以下
全閣僚が辭表を呈呈したに拘は
らず時の渡邊蔵相がどうしても
自分の辭表を呈呈しないため時
の樞密院議長西園寺公望公が無
任所大臣として入閣せしめられ
て臨時首相代理を仰付かりこの
首相代理の手によつて渡邊蔵相

は遺免免官された
一、昭和五年河口内閣の時宇垣
陸相が病氣のため河口首相は宇
垣陸相の外に別に陸相代理を臨
時に置かうとしたが内閣官制第
九條によれば「各省大臣故職あ
る時は他の大臣臨時攝任した
は命を承けその事務を管理すべ
し」とあつて大臣の代理は他の
大臣でなければ出来ない、しか
るに陸軍では陸軍軍人以外の大
臣が陸相代理となることに反對
したので河口首相は無任所大臣
を陸軍から一人作りこの大臣に
陸相代理を命ずることとし當時
の阿部信行陸軍次官が内閣官制
第十條によつて國務大臣に列せ
られしがる上で陸相代理に任せ

Sublime tobacco! which from east to west
Cheers the tar's labour or the Turkman's rest;
Which on the Moslem's ottoman divides
His hours, and rivals opium and his brides;
Magnificent in Stamboul, but less grand,
Though not less loved, in Wapping or the Strand;
Divine in hookas, glorious in a pipe,
When tipp'd with amber, mellow, rich, and ripe;
Like other charmers, wooing the caress,
More dazzlingly when daring in full dress;
Yet thy true lovers more admire by far
Thy naked beauties—Give me a cigar!

LORD BYRON, *The Island*



話のたね
その昔ウアージ
ニヤの植民地を
手に入れた英國
政府はタバコの
葉と引換へにロ
ンドン娘を異郷
へ送りつけたと
いふ、恐るべき
タバコの魅力で
はないか。

草と兵隊

火野葦平

全く煙草を嗜まないの、煙草について語る資格はない譯である。私
はいせぬか煙草のみの客はあまり歓迎しない。煙草のみの客が来ても灰
皿が無かつたりマツチが無かつたりすることが多い。すると何の中にも吸殻を落し
たり、床の上に灰を散らしたりするので腹の立つやうなことがある。喫煙家はさうい
ふ神経は無くなるのか、食事をした後や茶を飲んだ後などにも、灰皿がないと否あつ
ても、今まで自分が飯を食つた茶碗や湯呑の中に、平氣で灰や吸殻を落す。私は匂ひ
が嫌ひだし、煙草の灰や吸殻の取り止めもないやうな散亂の仕方は不潔といふよりも
癪に觸つて不快で仕方がない。ところが大體私位の年配で全く煙草を喫まないといふ
やうな野暮な奴は殆ど居ないので、私の客の大半が喫煙家である。喫煙の醍醐味とい
ふものを私は理解しないではない。一服の煙草を時に臨んで味ふことを時に羨しと思
はないではない。殊に私は小さい頃から、母が何かの仕事に疲れた後などに、襦袢を外
して立て膝か何かをしながら、長煙管にあやめのきざみを詰め、頬を凹ましてさも
うまさうに一服の煙草を吸ふのを、子供心に何か嬉しいやうな氣持でよく眺めた。煙草の
外に何の楽しみもないとか、その他、此の世に下されたあらゆるものの中で、最も麗



法に富み、且つは幻想的ですらある煙草の藝術についても、少々
の理解は持つてゐる。にも關らず私はどうにも自分ではこれを習
得する氣にはならなかつたのである。と云つて世の煙草を好む人
人を決して嫌悪したりはしない。ただ私は私の女房が煙草を吹か
すのを見たならば、忽ち三下り半を叩きつけて離縁してやらうと
思つて居るのである。



(賣草野火の東廣)

一種の社交の用具として、用談中の話の切れ目や、妙に座の白
けたやうな時に、喫煙家は實にう
まくその間を一本の煙草に依つて
誤魔化すけれども、私はそんな場
合には一寸手持無沙汰で困るやう
な事もあつた。それ位の時の外私
は煙草の效用を感じなかつたし、
煙草を習つておけばよかつたなど
と後悔したことは一度もない。殊
に私は召集を受けて戰場に来ると
ともに、やれやれ、煙草なんぞ確でもないものを習はなくてよか
つた、と、一層さう思つた。それは私達が戰場では屢々煙草など
から全く縁の切れることが多かつたからである。

類の煙草が廣告され、その多くの煙草を實に多數の支那人が喫つ
た。その支那人といふ言葉には、男女老幼が悉く含まれて居るの
だ。殊に子供までが煙草を吹かしてゐるのに駭いた。實に七つ八
つから、中には四つ五つ位の子供が喫煙をやるのだ。無論十四五
才前後の少年は悉くと云つてよいほど喫煙をする。それは見榮で
してゐるのではなく、本式に深く味はふやうに吸ひこみ、うまさ
うにして居る。私達は戦火のために廢墟と化した町々を渡せさら
ぼひ歩く乞食や貧民の姿を屢々見かけた。彼等は垢
と泥とによごれ、襤褸の身に杖を引き、空腹に踰越
として彷徨つて居るがなんと小粋なことには、
誰もすばすばと煙草を吹かして居る。それは一
寸奇異な感じがする。彼等は殘飯よりも五分に
も満たない煙草の吸殻を街上に見出すことに血
眼になつて居るやうに見える。私は街上で一本
の短い吸殻のために數人の乞食がものすさまじ
い鬨を發して争ひをして居たのを何度も見た
ことがある。又、一本の煙草をやれば或る支那人はどんな仕事で
もした。私は杭州の街頭で色青ざめた數人の少年に追ひかけられ
たことがある。彼等は狂人のやうに眼を釣り上げ、先生煙草進
上、煙草進上、と通呼しながら私から離れなかつた。私は汽車で
杭州と上海の間を數回往復したことがあるが、私達の列車が驛を
出て走りだすと、私は線路の兩側に五間か十間位宛の間を置いて

「いま下...」
 日暮「それ子後田は...」
 日暮「いま下...」
 日暮「いま下...」
 日暮「いま下...」



煙草と兵隊

火野葦平

いつたい私は全く煙草を嗜まないで、煙草について語る資格はない譯である。私は自分が喫まないせいか煙草のみの客はあまり歓迎しない。煙草のみの客が来ても灰皿が無かつたりマツチが無かつたりすることが多い。すると何の中にも吸殻を落したり、床の上に灰を散らしたりするので腹の立つやうなことがある。喫煙家はさういふ神経は無くなるのか、食事をした後や茶を飲んだ後などにも、灰皿がないと否あつても、今まで自分が飯を食つた茶碗や湯呑の中に、平氣で灰や吸殻を落す。私は匂ひが嫌ひだし、煙草の灰や吸殻の取り止めもないやうな散亂の仕方は不潔といふよりも癩に觸つて不快で仕方がない。ところが大體私位の年配で全く煙草を喫まないといふやうな野暮な奴は殆ど居ないので、私の客の大半が喫煙家である。喫煙の醍醐味といふものを私は理解しないではない。一服の煙草を時に臨んで味ふことを時に羨しと思はないではない。殊に私は小さい頃から、母が何かの仕事に疲れた後などに、襦袢を外して立て膝か何かをしながら、長煙管にあやめのきざみを詰め、頬を凹ましてさもうまさうに一服の煙草を吸ふのを、子供心に何か嬉しいやうな氣持でよく眺めた。煙草の外に何の楽しみもないとか、その他、此の世に下されたあらゆるものの中で、最も魔

一つの感情があつたのである。

私は到る處で新生活運動といふ文字を見た。到る處に何々縣新生活運動促進會製といふ青色の縁を取つた無数の傳單を見た。それは新しい支那の更生建設のためには無論必要な運動であつたに違ひない。その傳單の中に必ず「不吸烟」の字が見られた。又「六年禁煙興國之基」烟即亡國之大因」等のスローガンがあつた。この烟或ひは煙の字には無論阿片の意味が多分に含まれて居るに違ひない。然し、その兩方の意味を含めて、かくの如くも支那民衆が烟を愛し、現在ではこれに溺れて居るといふことは、充分に理のあることであつて、彼等が只管自家一個の幸福と享樂に没頭す

るやうになつたことは、決して民衆の罪ではなかつたのである。

私達は戰場に来て、我々の接した支那民衆と、その上部の一切のものが、政治的軍事的、或ひは經濟的にすらも、こんなにも距離をおいて離れて居ることに一驚したのである。クロード・フアルの何かの文章で見たことのある、最初から支那などといふものは無かつた、唯民衆があつただけだ、といふやうな言葉は奇矯に過ぎるとしても、私達は、これは煙草といふ小さな窓から覗いただけではあるが、これらのえたいの知れぬ支那民衆の姿に接して、支那といふものの持つ必然的に避け難い悲劇が蔭々と感じられたのである。

「いま下...」
 日暮「それ子後田は...」
 日暮「いま下...」
 日暮「いま下...」
 日暮「いま下...」



シルエットさえ垢ぬけてくる

ハチマシオン



40 セン
 63 セン
 95 セン

店商源近 社會式株 京東 舖本

銀座を歩く
特選
季節
紙

何れも数本宛に過ぎなかつた。もとより一時は、この野郎ひでえ奴だ、と呟いて居た他の兵隊達もこれを許し、次いでストツクの増したことを喜び、何か見えない蟠りのあつたやうに思はれた兵隊達の間が一層和やかに緊密になつたやうに感じられた。その日も私達は敵弾を浴びたが、静まり返つた夜になつて、私はうとうとしかけて居た眠りを一人の兵隊のために妨げられた。私が眼を醒ますと、その艶だらけの兵隊は、闇の中であたりをおぼおぼと見廻し、殆ど囁くやうな低い聲で、班長殿、お願ひがあります、と云つた。私が何かと訊ねると、彼は私に小さな紙包を渡し、實は私も少しばかりの煙草を隠して持つて居つたのです、と云つた。彼は今日晝間の事件のあつた時にもその場に居合はせたのであるが、どうにも気が弱くて皆の前に告白することが出来なかつた。然しどう考へても自分の隠匿して居る煙草をその儘所持して居るに忍びず、と云つて皆に告げる勇氣もなく、處分に窮して棄ててしまはうかと思つた。然し皆が一本の煙草すらも大切にしてお分け合つて居ることに思ひ到り、遂に私に打ち明けるべく種々煩悶の末決心したのだと云ふ。私はその意向を諒とし、その紙包を受け取つた。中には一箱のゴールデン・バットが入つて居た。私は自分が煙草を嗜まないに關はず、その箱を持つた時に、夜闇の中にも幽かに光を放つ金色の二匹の蝙蝠と、外廓の四角と、GOLDEN BAT の外國文字とが、たとへ難く愛着を感じさせる此の上もない美しいものに眼に映つた。私は煙草の箱の手ざはり

の柔かさに駭いた。熊襲のやうに艶のごつい氣の弱い兵隊は、宜しくお願ひ致しますと云ひ残し、重大な任務を終つた斥候でもあるやうに、足取りも輕げに闇の中へ去つてしまつた。さて然し私はこの莫大もない依頼品に一寸閉口したのである。この缺乏の時期に一箱の煙草は旱天の慈雨にも増して兵隊の歡迎し狂喜することはよく判つて居ながら、これを如何にして自然に兵隊の中に持ちこむかといふ方法に一寸行き憊んだのである。艶の兵隊は去る時に、何度も臆病さうに繰り返し、自分の名を絶對に出してはくれぬやうにと云つた。兵隊達は私が煙草を喫はないことを誰もよく知つて居る。私は途方もない高價な寶物を胸に抱いたやうな氣持で、一箱のゴールデン・バットを軍服のポケットに忍ばせ、やがて壕の中で眠つた。星の降り落ちるやうな燦めかしい春の夜空が仰がれた。兵隊達の嘶や齒軋りが幽かに聞えて来る。私は何か寢苦しく何度も藥の中で寢返りを打つたが、ふと眼を開けたらすると、兵隊達の黒々と重なつて居る姿が見え、ぼつりと赤い煙草の火が光つた。私はその光を胸の痛む思ひで見なほした。

朝になつて、兵隊達の貧弱なストツクの中へ、貴重なる一箱のゴールデン・バットが加へられる事業は、案ずる迄もなく極めて容易に成就された。兵隊達はこの莫大な收入に有頂天になり、それが後方との連絡の不十分な戦場に突如として出現した不可思議について深く究明しようとはしなかつたのである。私はそれを背の中から取り出し、ああ、うっかりして居た、煙草を一箱入れ

Sublime tobacco! which from east to west
Cheers the tar's labour or the Turkman's rest;
Which on the Moslem's ottoman divides
His hours, and rivals opium and his brides;
Magnificent in Stamboul, but less grand,
Though not less loved, in Wapping or the Strand;
Divine in hookas, glorious in a pipe,
When tipped with amber, mellow, rich, and ripe;
Like other charmers, wooing the cares,
More dazingly when darning in full dress;
Yet thy true lovers more admire by far
Thy naked beauties—Give me a cigar!
Lord Byron, The Island





國寶 大燈國師像

大德寺藏



イラニ・チ・ラッガ



大德寺藏

